
原作？なにそれ、おいしいの？

八重桜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

原作？なにそれ、おいしいの？

【Nコード】

N29900

【作者名】

八重桜

【あらすじ】

生きるチート（自称）の本郷直孝は神様のミスで死んでしまう。

代わりに与えられたのは好きな世界に何回でも転生する権利。

直孝はどこの世界でどんな人生を送るのだろうか……。

11月29日に読者の方からこの作品が盗作されているとの連絡があり、実際にその小説を読んでも一部の話の内容が酷似していました。

このかたは他の方からも盗作疑惑がかかってるそうです。

私自身で運営に通報しておきましたが、全てを防げるわけでもありません

読者の方々もあまりにも似過ぎている小説を見つけたら教えて下さるとうれしいです。

1話 転生しまSYO！（前書き）

ノリで書いた文章なのでgdgdかもしれません。

1話 転生しまSYO！

俺は本郷直孝^{ほんこうなおたか}、高校2年生だ。

親が武術の道を歩んでいたため、気がついたときには俺も武術の道に入っており、いつの間にか「武術に関しては敵なし」とまで言われるようになった。

実際中学のときは3年連続で、柔道、剣道、合気道、空手、弓道、フェンシングetc・・・で日本一に輝き、高1のときにやった世界チャンピオンとのボクシングではKO勝ちし、柔道の金メダリストには1本で勝った。

そんな若干チート気味な能力を持つ俺は今日も学校に向かい、友人と駄弁っているはずだった。

そう、「はずだった」。ここ重要だよ。

そして、実際には・・・・・・・・・・・・・・・・目の前に俺に謝り倒している自称神様（笑）がいた。

「だから、自称じゃなくて、ちゃんとした神様なんです」

「まさか。武術で俺にかなうやつはいないって言われて倒れが死ぬなんて、ないだろ」

「いえ、実際問題あなたは死んでいます。正確には私が間違って殺してしまったんです」

「……………まじ?」

「大まじです。」

————説明中————

「つまり、俺はまだ死ぬはずなかったのに、ほかのやつと間違えて殺されてしまったと」

「すみません。反省はしてますけど、後悔はしていません」

「よし、一回死ぬか？」

「冗談です（泣）」

許してやるか。女の子（？）に手を挙げるのは男のやることじゃないし。

「ちなみに俺の死因って何？」

「食中毒ですね」

はい？交通事故とかじゃなくて食中毒？

「そうです」

いまさら気づいたけど心の中読まれてるし。

「まあ、神様ですから」

「まあ、間違つて人を殺すような神様だけだな」

この神様は十条菜月（と名乗っていた）。性別（神にあるかは知らないが）は見た感じ女。身長は140後半ぐらいかな。

「152cmです」

なんか、また俺の心の中読んでるし。

まあ、このように、こいつは人の心を読むことができるらしい。

「で、結局俺はこのまま死ぬの？」

「いえいえ。本来ならあなたは後87年生きることができていたはずなのに、今回あなたが死んでしまったのは私のせいです」

「なので・・・」

「なので？」

「あなたにはあなたの好きな世界に転生してもらいます」

「好きな世界って例えば、D・C、shuffle、俺つば、マジ

恋、車輪、パルフェ、シヨコラ、baldrrシリーズ、こんにやく、さかはり、fate、空の境界、月姫、恋姫無双、青空、あかね色、星空、ナツユメ、LaB、かしまし、恋楯、天神乱漫、よあけな、FA、車輪、G線、光輪、置き場、コン僕、暁の護衛、るいとも、かにしの、オトボク、なのは、SAO、デュラララ、ロウきゅーぶ、アスラクラインetc・・・の世界に転生できるってこと?」

「ものすごい無駄に文字数使いましたね。」

でも、簡単に言つとどの世界でも大丈夫です。回数制限もありません」

「じゃあ、例えばマジ恋の世界に飛んで、そのあとD・Cの世界に飛ぶのもおk?」

「はい、大丈夫です」

「こついつのつてチートな能力ってつくの?」

「何もしなくてもチートな気がします、もちろんあなたが望む能力をあげますよ」

「よし、じゃあ・・・」

「俺の身体能力を上げてくれ」

「あげるまでもない気がするんですが……。で、どこの世界に転生するか決めましたか？」

「ああ、最初は」

「マジ恋の世界に転生する!!!!!!」

「選んだ理由はなんですか？」

「作者の好みだ」

「……………」

そこで無言はやめようぜ。

能力も上げてもらい、ついに出発の時。

「転生する場所は2009年4月1日、川神市でいいんですね？」

「ああ」

「戸籍と、川神市のほうに住居を用意しておきました。

後何かありましたら念話を使って連絡してください」

「分かった」

「それでは、真剣に私に恋しなさいの世界を楽しんでください」

菜月がそういうと俺の意識が遠のいていくのを感じた。

「がんばってくださいね、直孝さん」

菜月がそつつぶやいたのを聞いてる人は誰もいなかった。

1話 転生しまSYO！（後書き）

作者の八重桜です。最近マジ恋ブームが自分の中で巻き起こってるので、最初の転生場所をマジ恋の世界にしました。

そういえば、直孝のエロゲ名とアニメ名を羅列した台詞、すべて分かったかたいますかね？

けっこう、ふざけてたんですけどwww。

感想はいつでもお待ちしてます。エロゲについて語りたい方もぜひ感想に書いてください。

2話 初対面（前書き）

さて、第2話です。相変わらずの○○○○な文章ですが楽しんでいただけるとうれしいです。

2話 初対面

気がつくと俺は見知らぬ家のベッドの上で寝ていた。状況から考えると菜月が用意してくれた家と考えて間違えはないだろう。

そう、平和に暮らしてた俺は、神様である菜月の手違いによって死んでしまい、その代わりに自分が好きな世界に転生することができるようになったのだ。

そして、俺は1番目の転生する世界にマジ恋の世界を選んだ。

なぜかって？

風間ファミリーに入って客人を一緒に倒したかったからだ。

俺は状況を確認するためにまず家の中を探索した。

探索した結果、リビング、トイレ、お風呂などは1階にあり、俺が寝かされていた部屋や、ほかの部屋は2階にあった。

また、家の中を探索する際にカレンダーを見たが今日は俺が菜月に指定したように、2009年4月1日だった。

家の中の探索を終えた俺は、次は川神市を見て回ることにした。

外に出てみると、暑くもなく寒くもない春らしいよう気だった。

そこから5分ほど歩くと見覚えのある建物が見えてきた。

そう、島津寮だ。

実際に見てみると外装はきれいで、その割には風情のある庭などがあり、結構いいところだと思った。

俺はそのまま駅に向かっていたが、途中河原を通った。

そのときだった。

「君、危ない！！避けて！」

唐突に声をかけられたので振り向くと、野球ボールが俺にあたる直前だった。

結果どうなったか？

無意識に素手でキャッチしてしまっていた。

素手で取ったにもかかわらず痛みはまったくなかった。これは菜月に頼んだ身体強化のおかげだろう。

ボールが飛んできた方を見ると、そこには河原で野球をやっている風間ファミリーの姿が見え、見た感じ打ったのは百代で、俺に声をかけたのはワン子のようなだった。

ワン子はそのまま俺のところに来て

「君、大丈夫だった？」

と聞いてきた。

「大丈夫だよ、まったく怪我もないし」

「それにしてもよく素手で打球を取れたわね」

「咄嗟だったからね」

「怪我がなくてよかったわ。」

ホント、お姉さまももうちょっと手加減してくれないと・・・」

「まあ、野球なんだからしょうがないよ。」

そろそろ俺駅に向かうから。はい、ボール」

俺はワン子にボールを手渡しした。

「じゃあ、ホントごめんね」

「ぜんぜん気にしなくていいから」

そついうと俺は再び駅に向かった。

川神百代の視線を背中に受けながら。

川神一子 side

「ワン子、あの人怪我なかった？」

こういうときに一番最初に声をかけてくるのはいつも大和だった。
普通は打った本人であるお姉さまのはずなんだけど。

「うん、まったく怪我ないって」

「でも、まさか素手での打球を取とは思わなかったぜ。あいつ、

おもしろえーな」

「あいつ、本当に面白いかもな」

意外にもキャップの意見にお姉さまが乗ってきた。

「珍しいね、姉さんが人のことを面白いつて言うなんて」

「弟よ、気づかないのか？」

「何に？」

「あの人が声をかけられて振り向いてから、ボールが当たるまで1秒しかなかったのに素手で完璧にキャッチしたんだよ。私の視力と反射神経でも無理だと思う」

言われて私も気がついた。

そうなのだ。あの人は私が声をかけてあの人が振り返ってから、ボールが来るまで1秒しかなかったにもかかわらずボールをとることができたのだ。

つまり、1秒の間にボールの軌道と回転を読み、そのうえしっかりと手でつかんだのだ。

ものすごい反射神経と動体視力がなければできない技だったのだ。

「京、よく気づいたな。ご褒美に気持ちよくしてやろう。うりうり」

「・・・あ・・・あう」

「昼間から姉さん達は菜にやってるの？」

「大和」。モモ先輩に汚された。大和ので上書きして」

「謹んでお断りします」

平和だな。

でも、またあの人と会うことがあったらそのときは勝負よ！

川神一子 side

完

川神百代 side

私は京が投げた内角低めのシュートボールを思いつきり引つ張った。
そしたら、打球はフェアゾーンではなく河原沿いの道を歩いてる通
行人に向かって飛んでいった。

いとしの妹も通行人に急いで声をかけたが、ボールは通行人に当た
る直前であり、あきらめて川神院に連絡を取ろうとした。

だがその通行人は声をかけられて振り向いてからボールと接触するまで1秒しかなかったにもかかわらず、その通行人は素手でそのボールをキャッチした。

1秒の間に打球の軌道を読んだ反射神経&どう他視力と、その上、打球（私が見た感じ球速250km前後）を素手でしっかりと取る握力&筋力は、最近強い相手がいなくて退屈していた私を久しぶりに興奮させるものだった。

今度戦ってみたいと思いながら、私はその通行人が見えなくなるまでその通行人の遠ざかって行く背中を見ていた。

川神百代 side 完

俺は河原でのハプニングの後川神駅に行き、そこから東京駅へと向かう電車の中でさっきのハプニングを思い出していた。

まさか野球ボールが飛んでくるとは思ってもいなかったが、こんな初期に風間ファミリーに接触できたのは光栄だった。

キャップは面白いの好きだし、百代の目にも留まったようだった。

百代とはいずれ戦ってみたいが、その前に俺には戦わなきゃならぬ相手がいた。

その相手との対戦こそ俺が今東京に向かっている理由だ。

東京は沢山の電車と新幹線が通っているからな。

待ってるよ、

!!!!

2話 初対面（後書き）

さて、直孝が戦いにいった相手が誰だか分かりましたか？

戦いに行った相手は次話の冒頭で判明する予定です。

感想お待ちしてます。では、また次話で！

3話 決闘しまSYO！（前書き）

さて、2日で3話とそこそのペースで書いてますが、相変わらずsgsgsgです。

バトル描写は難しい・・・orz

3話 決闘しまSYO！

川神百代 side

――2009年4月3日

今日の川神院は朝から騒がしかった。まあ、修行してる人数が人数なのでいつも騒がしいのだが、今日はいつもに増して騒がしかった。

その原因は今日の早朝に届いた2つの連絡が原因だった。

ひとつは「昨晚、武道四天王の一人、橘天衣が東北で何者かに倒された」という連絡だった。

そして、もうひとつは「昨晚、武道四天王の一人、鉄乙女が近畿で素性の分からない男に倒された」というものだった。

武道四天王とは、名前のとおり武道における頂点4人のことである。武道四天王は、四天王同士の戦いで負けても何にもないが、四天王以外の相手との戦い負けると、四天王の名は剥奪され、その倒した相手が新たな四天王となる。

昨日2人が倒されるまでは、私、揚羽さん、乙女さん、橘天衣が四天王だったが、今回のことでそのうちの半分が変わったことになる。

こんなルールなので四天王が変わるのは年に2、3度あるが、1日に2人が倒されるということは今までなかった。

一応言つとくが、橘天衣を倒したやつと乙女さんは倒したやつは別人だ。なぜなら、2人が倒されたのはほぼ同時刻だからだ。そんな短時間で近畿から東北に行くのはまず不可能だ。

まあ、そういうことで四天王2人が同じ日に倒されるという異例の事態で川神院はめちゃくちゃ混乱している。ルー師範代を含めた川神院の面子も何人も2人を倒したやつを調べるために調査をしている。

そんなこんなで川神院は混乱しているのだが、私自身にはうれしい状況だった。

最近挑戦者も弱くて、ものすごく退屈していたが、新たな強者が現れたのだ。

この私が興奮しないはずがない。

それに……

その強者2人とは近々会う気がした・・・。

川神百代 side 完

―――2009年4月15日

今日は俺が川神学園に転入する日だ。

ということで、俺は梅子先生に呼ばれるまで教室の外で待っていた。
今までの2週間何やってたかって？

四天王の一人、鉄乙女を倒した後ずっと森で特訓していた。

確かに身体能力は上がったが、それは使いこなせなければ意味がない。なので俺は、2週間近く山にこもっているいろいろな武器での技、奥義を身につけた。

そして、その技は今日使うことになるだろう。多分……ワン子の性格からして……。

「それでは、おい。入ってきていいぞ」

「はい」

梅子先生に呼ばれると返事をしながら、教室の扉を開け、中に入った。

風間ファミリーのやつらも気づいたようで、京は何かいいたそうな視線でにらんできていた、俺は無視して教卓の所まで行った。

「はじめまして、本郷直孝です。よろしく!」

「うむ、何か転校生に質問あるやつはいるか?」

梅子先生がそういうと沢山の手が拳がった。

「そうだな、じゃあ川神」

やっぱり、この展開は……。

「本郷……。なんか言いにくいからナオでいいや。」

ナオ、何か武道はやってるのかしら?」

「いろんなものを少しかじってるだけだよ」

「YES!! 梅先生提案!」

ワン子が身軽に立ち上がった。

「転入生を歓迎してあげたいと思います」

クラスが歓迎の意味を悟り騒然とする。

なんか、まさに予想通りの展開だな。

「ふふつ、血気盛んだな川神。だがそれは面白い

本郷、そのポニーテールがお前の腕前を見たいそうだ」

「なるほど、新入りの歓迎ね」

見事に予想的中。というか、ドンだけ行動が読みやすいんだよ。

「川神学園には決闘っていう儀式があるの。」

決闘の意思を伝え、自分のワッペンを机の上におく」

原作で一応ルールは知っているが、あたかもはじめて聞いたかのよう
うに聞く。

「ナオ、決闘で勝負よ!!」

「いいよ。受けてたつ」

俺は自分のワッペンをワン子が置いたワッペンの上に重ねる。

「おおつ、すげえ！受理したぞ!!!」

「いいねえ、キッパリしてて気持ちがいいや」

「マジ？決闘久しぶりに見れるんだ!」

「（ら抜き言葉か……学のなさが良く分かる）」

クラス中から喜びと期待の声が聞こえていた。

「待て、肉体を使用する決闘の場合は職員会での了承が必要だ」

「ほっほっ。小島先生、話は聞かせてもらったぞい」

「学長。いつのまに……」

「いいだろう、わしの特権で許可する。今すぐやんなさい。」

わしが責任もって見届けよう」

クラス中が大騒ぎになった。

「転校生歓迎なんてものは勢いが大事だからな」

まさに、学長の言うとおりだと思った。簡単に言っちゃえば、クリスマスパーティーをお正月にやっても盛り上がりがないのと同じだ。

「ワン子ちゃん強いですよ？大丈夫ですか？」

真与が心配して声をかけてきた。

「まあ、大丈夫だろ。怪我しない程度にやるし。」

」

そついいながら、俺は少し殺気を強めてみた。

「・・・・・・・・！！」

やっぱり、こついつのに一番敏感なのは京みたいだな。

「相手強いよ、多分私よりも」

「そんなわけじゃない、絶対京のほうが強いわよ」

「（そういえば、ワン子は殺気とかを読み取るの苦手だったっけ・・・。しょーもない）」

34

「よし、じゃあ早速外に出なさいよ、ナオ」

「武具は教室に飾ってあるレプリカを使え。

切れはしないが優劣をつけるには十分だ」

「あいよつ、あたしは当然薙刀つと！」

「俺は素手でいいよ」

「武器なしで薙刀に勝てるのかしら」

「自分の肉体が武器なんでね」

「おお！！！俺と同じ考えのやつがいた」

一人、大喜びをしている筋肉男がいた。

「おおーい、みんな賭けやるぞ！！！」

俺とワン子がグラウンドに向かっている最中、そんなキャップの聲が聞こえた。

京じゃないけど、しょーもない。

あれから、十分たったがグラウンドは決闘で使うスペース以外、人だらけだった。やっぱり、アナウンスでの放送でほかの学年の人も集まってきたようだった。

「これより川神学園伝統、決闘の儀を執り行う！！」

冗談を言っているときは大違いの威厳のある声が響き渡る。

「二人とも前に出て名乗りを上げるが良い！！」

「2年F組、川神一子！」

「2年F組、本郷直孝！」

「わしが立会いのもと、決闘を許可する。」

勝負がつくまでは何があっても止めぬ。が、勝負がついたにもかかわらず、攻撃を行おうとしたらわしが介入させてもらう、いいな？」

「承知したわ」

「問題ありません」

「いざ、尋常に、始めいっ……！！！！！！！！！！」

今までで一番の声で学長が叫ぶとともに、ワン子が距離をつめてきて、鋭く薙刀を振り回した。

俺はそれ避けようともせず腕で防御しにいった。

「そのうでもらったわああ！！！！」

多分、「腕で防御に行くなんて馬鹿なやつだ」と思った奴が多いだろうが、

結果、薙刀が真つ二つに折れた。

種明かししちゃうと、俺は自分の腕に高密度の気をまとわせて強化させていたのだ。その硬さは金属バットをはるかに越えるだろう。これが、俺が特訓していた技のひとつだ。

簡単そうに見えるかもしれないが、高密度の気をまとわせるのは大変で慣れるまで3日はかった。

グラウンドが歓声と驚きと困惑の声に包まれる。

薙刀を折られた一子自身もまったく予想してなかったらしい。

「武器も折れちゃったし終わりにする？」

俺はあくまで挑発のためにそう聞いた。まあ、ワン子の性格からしてここで終わらせるわけがないしね。

「武器がなくなったら私は戦えるわ」

そういつて、ワン子は俺に飛び掛ってこようとしたが、その途中でワンコは地面に倒れた。

まあ、正確には強烈な殺気をワン子にだけ飛ばして、気絶させたんだだけだね。

「勝者、本郷直孝！！！！！！！！！！」

「一子はすぐ保健室へ」

グラウンドはまた、**歓喜と困惑と驚きが混じった声に包まれた。**

なかには

「大損したぜええ」or「Z」

とか

「今日はご馳走だ」

とかいってるやつらがいた。

なんか自分達の勝負がかけの対象って言うのも微妙だな・・・。

「おい、そこの君！」

いきなり後ろから声をかけられた。

「川神百代先輩ですか？」

「ああ、そうだ」

まあ、気を察知したから分かってたけどね。

「で、何ですか？」

「この前はすまなかったな」

多分、この前の打球のことを言ってるのだろう。

「いえいえ、とんでもないです。まったく傷もありませんでしたし、気にしないでください」

俺がそういうと百代はいきなり真剣なまなざしになり

「君、本当はとても強いだろう？」

と言ってきた。

「まさか。今回の勝利も一子さんの体調不良か何かのおかげですし」

「まあ、あんな殺気を当てられたら、体調不良ぐらいにはなるよな」

やはり、気づいてたか。まあ、これも作戦のうちだけだね。

これで完璧に百代の興味を引くことができた。

「気づいてましたか・・・」

「並大抵の奴じゃ気づけないかもしれないが、私にはわずかだが感じ取ることができたぞ」

「おい、本郷！早く教室に戻って来い」

いきなり、梅先生に上から声をかけられた。

「それでは先輩、授業が始まっちゃうんで失礼します」

「ああ、いつか私と本気で戦ってくれ」

「考えておきます」

そんなやりとりで俺達は別れた。

川神鉄心 s i d e

「彼のあの気の強さ。彼ならば・・・」

「もしかしたら・・・」

「百代を変えてくれるかもしれない・・・」

そう、無敵だった百代を破り、百代に敗北を教えさせてくれるかもしれない。

川神鉄心 side

完

3話 決闘しまSYO！（後書き）

とらぶぐさん、感想ありがとうございました。

やっぱり感想をもらえるととてもうれしいです。

ほかの方も感想を書いていただけるとありがたいです。

さて、本編ですが……主人公強すぎですねw。

まあ、あと2、3回で箱根旅行に入れるといいな。

ということで、みなさんまた次話であいましょう。

see you again!!

マジ恋を知らない人のためのキャラ紹介〜風間ファミリー&主人公編〜（前書き）

マジ恋を知らない人のためのキャラ紹介です。

マジ恋プレイ済みの方は一番最後のページだけ読んでください。

まあ、読まなくても支障はありませんが……

マジ恋を知らない人のためのキャラ紹介／風間ファミリー＆主人公編／

な
お
え
直江
や
ま
と
大和

陽気でお喋り屋で外交的な性格。2月20日生まれ。2年F組。

人との繋がりを大事にするが友達と呼ぶのは風間ファミリーの仲間
に限定され「それ以外は皆、知人」と言いきる。

武闘派のヒロインたちとは異なり、頭脳派で策略を好むチームの参
謀的な存在だが、クリスには「正々堂々戦わない」という理由から
よく叱責されている。

趣味はヤドカリの飼育と観察で、ヤドカ리를馬鹿にされたり軽く扱
われたりするとスイッチが入りヤドカ리의魅力についてを延々と語
りだす。

成績は非常に優秀でSクラスへ入ることもできたが、本人が希望し
なかったために2-Fに編入されている。

百代とは幼い頃に師弟（姉弟）関係を結び、それ以来、百代を「姉
さん」と呼び姉と弟のような関係となった。

京を幼少時にいじめから助け出したことで京に惚れられ、以降、ほ
ぼ毎日交際を迫られているが断り続けている。しかし、お互いに相
手に対する依存度は高く、京が暴走した際や機嫌を損ねた際はほぼ
毎回大和がフォローするため、ガクトや他の仲間からは京の安定剤
的存在として認識されている。

朝に弱く毎朝、京やクッキーに起こされている。

好きな言葉は「揺るぎない意思を糧として闇の旅を進んでいく」

戦闘では自身の広い人脈を生かした計略、イカサマを用い、一対一の対決でもギャンブルなどの小細工が通じるものを好む。

タロットカードを引いた際に出たカードは『世界』

川神 かわかみ
百代 ももよ

武士テーマ：「誠」 - 嘘はつかず自分に正直

風間ファミリー内で唯一の上級生にして大和の姉貴分。 8月31日生まれ。血液型はO型。 3年F組。

鉄心の孫で川神院の跡取り。武器は己の拳。学園内外でも美人と評判だが、彼女の圧倒的な戦闘力の前に世の男子たちは少々敬遠気味。自分に正直な性格からか金欠に陥り易く、仲間から借金をしてはそ

の返済に充てるためにアルバイト（主にガテン系のバイト）をする姿が目撃されている。

暇なときは女の子と遊ぶか大和を呼び出して時間を潰している。

戦うことを心から楽しんでいる節があり、強者との戦いを至上の喜びとする。

自分に挑戦してきた者には礼を以って全力で相手をし、勝負の後には打ち負かした相手の怪我の手当を手配するなどの配慮をするが、礼を欠き多勢で押し寄せてくる無礼者には一切容赦をしない。

戦闘では、その戦闘力と川神院流武術を使って敵を圧倒するタイプ。

タロットカードを引いた際に出たカードは『審判』

川神 一子

武士テーマ：「勇」 - 何事にも恐れず挑んでいく

百代の義理の妹。2月26日生まれ。血液型はB型。2年F組。「一子」の名をもじり、「ワンコ」というあだ名がつけられている。

普段から落ち着きのない猪突猛進タイプで、風間ファミリーの切り込み隊長を自負している。

武器は薙刀を使う。武道家としての未熟さを自覚しているが、尊敬する百代に近づくことを目標に日夜トレーニングに励んでいる。

その一方で勉強はてんで駄目で、川神学園に入学する際もギリギリの成績で合格した。

ファミリーの中ではイジられキャラ的な存在で、仲間内ではよく京に弄られている。遠くの笛の音を聞き取れるほど耳が良く、その特技を生かし仲間たち全員に自分を呼ばせる笛を渡している。笛を吹くと10分以内に駆けつけるように訓練されており、本人に行く気が無くても体が勝手に反応してしまうほど。

百代とはとても仲が良く実の姉妹同然に接している。

孤児になった時期があり、その頃に源忠勝とは同じ施設で一緒に過ごしていた。川神家に引き取られる前の旧姓は「岡本」。

食欲旺盛で、よく仲間たちに食べ物进行をせがんでいる、特に肉的な食べ物が好きだが野菜嫌いといわけではなく、食事の栄養バランスには気を遣っている。

九鬼英雄に惚れられているが、本人は英雄のことを苦手としている。

戦闘スタイルはスピード重視の速決タイプ。

タロットカードを引いた際に出たカードは『太陽』

椎^{しい}名^な 京^{みやこ}

武士テーマ：「仁」 - 深い愛情

口数の少ない大和の幼馴染み。 4月13日生まれ。 血液型はA型。
2年F組。

中学時代に一度親の都合で隣の県に引っ越しており、川神学園の寮生として再び風間ファミリーに合流した。

得意な得物は弓で、弓道部にも所属しているがサボりぎみ。

生徒の中では成績優秀な部類に入るが、大和の方が成績はずっと上。美形のため男子からは人気があるが、仲間以外の他人の前ではクールで無口、話しかけられても機械的な態度で接し、大和達以外の人間と接することを極力避けている。

一方で仲間を思う気持ちは誰よりも強い。

小学生の頃は家庭の事情で周囲からいじめられていたが大和に救われ、以来彼に惚れており、様々な方法でアプローチと告白を繰り返しているが未だ成功には至っていない。

病的なまでに大和を慕っているが、ヤンデレではない。

家事はできるが料理だけは京自身が度を越した辛党のため、作る料理すべてが激辛になる。

仲間以外の人間からはすでに「大和の女」として認識されており、2・Fのクラスメイトからは2人は付き合っていると思われる。

戦闘スタイルは遠距離支援タイプだが、インファイトもそこそこできる。

その際に「切り札」を2つ用意している。

タロットカードを引いた際に出たカードは『吊された男』

まゆずみ ゆきえ
黛 由紀江

武士テーマ：「礼」 - 他人に対する思いやり、優しさ

北陸加賀出身の武家の流れを汲む旧家の娘。 10月26日生まれ。
血液型はAB型。 1年C組。

愛用の日本刀を常に帯刀している。実家は家柄を重視する不死川心が友達になってもよいと言っほど高い家柄を持つ。

その高い家柄と自身の極度に内気な性格も相まって、地元では友達が一人も出来なかった。

地元から遠く離れた川神へ引っ越してきたことを機に、友達を100人作ることを目標とし、まずは同じ寮生である大和たちに近づく。

料理が得意で、同じ寮の大和達に料理をふるまったことが風間ファミリー入りするきっかけとなる。

たまに父親手作りの黒い駿馬の携帯ストラップ「松風」と会話しているがどう見ても腹話術であるため、友達を作ることはおろか、その場を目撃した人間から奇異の目で見られている。

仲間内では同時期に加入したクリスと仲が良く、父親に雰囲気似ているガクトにも懐いている。

父は国から帯剣許可を貰うほど名の知れた武道家で、「剣聖や「幻の黛十一段」などの異名で呼ばれている。

由紀江の帯刀も父親が国に掛け合って許可された。実力は既に父を凌駕し、武道四天王であった橘天衣を討ち倒すほどである（倒した日にちは直孝が鉄乙女を倒した日と同じ2009年4月2日）。

妹が一人いる。

戦闘での持ち味は、精神統一してからの神速の抜刀での一撃。

タロットカードを引いた際に出たカードは『節制』

クリステイアーネ・フリードリヒ（Christiane Friedrich）

武士テーマ：「義」 - 正しい道を進む、芯の強さ

通称クリス。川神市の姉妹都市・ドイツのリューベック市から2 - Fにやって来た留学生。10月26日生まれ。血液型はA型。

いまだに日本を侍の国と思っているなど間違った日本観の持ち主。

騎士道精神に重きを置き、真つ直ぐで礼儀正しいが反面、負けず嫌いでプライドも高く自分自身の考えを曲げない頑固な性格。

根は優しい性格ではあるものの他人の心を思い遣るデリカシーに欠け（いわゆるKY）、最初の方では風間ファミリー（特に京と卓也）を本気で激怒させた。

武器はレイピアを使用しフェンシングの腕前は達人級。

好きなものはぬいぐるみで寮の自室には多数のぬいぐるみを所持しており、その全てに日本の戦国武将の名前がついている。

父から激しく溺愛されており本人も父を尊敬している。2・Sのマルギッテを姉のように慕って「マルさん」と呼び懐いており、マルギッテもクリスを「お嬢様」

と呼び甘やかしている。時代劇が好きで「大和丸夢日記」が一番のお気に入り。この時代劇の主人公と同じ名前である大和が勝負事に策を弄することが気に入らず、大和とは喧嘩ばかりしている。

ただし、大和の仲間を思う気持ちは認めている。

仲間の中では新参者同士である由紀江と仲が良く、一子とは転校初日の決闘以来、良いケンカ仲間となる。

日本に来てからは温泉にハマっており、島津寮の敷地内に湧いている温泉に入ることを楽しみの一つとしている。

好物は稲荷寿司。

戦闘での持ち味は、正々堂々の真っ直ぐな「突き」。武器無しでも結構な強さを誇る。

タロットカードを引いた際に出たカードは『正義』

風間 翔一かま しょういち

風間ファミリーのリーダーにして大和の親友。12月12日生まれ。血液型はAB型。2年F組。

風間ファミリーのマスコットの存在であるロボット、クッキーのマスター。

子供の頃からどんなことでも器用にこなし、みんなから「キャップ」と呼ばれ尊敬され親しまれている。その見た目と性格から女子から人気があり告白されたりもするが、本人が恋愛に興味がない（性に目覚めていない）ので全て断っている。

感性のまま自由に生きることをモットーとし、強引とも言える行動力は未だ健在。

旅が好きでよく旅に出ている。

お気楽な性格だがリーダーとしての資質は十分持ち合わせており、仲間たちが険悪な雰囲気になっても翔一が登場または発言することにより大抵は解決する。

仲間の中では大和と仲が良く、よく大和の部屋に遊びに行っている。常にバンダナを頭に巻いており学園でも内申点と引き換えにバンダナの装着を許可されている。

趣味はバイトで本屋、デパートのヒーローショー、デリバリー寿司屋など数多くのバイトを経験している。

2・Sの九鬼英雄とはお互いに気に入らないと思っている。

自身の身体を賭けたポーカー勝負でロイヤルストレートフラッシュを完成させるなど、天性の豪運を持つ。

戦闘での持ち味は、自身の天性の運動神経を生かしたアクロバティックな一撃。

タロットカードを引いた際に出たカードは『愚者』

島津^{しまづ} 岳人^{がくと}

通称ガクト。長身でボディビルダー並みの筋肉を持つ巨漢。8月1日生まれ。血液型はO型。2年F組。

一人称は『俺様』。仲間内では力仕事を担当。単純で熱血馬鹿だが情に脆く心優しいところもある。

若干ナルシストの傾向があり自身（特に筋肉）に絶対の自信を持っている。

そのため喧嘩もかなり強いが、ファミリー的女子達が強すぎるためあまり目立たない。

常に女の子にモテたいと思って行動しているのだが、母親譲りの見た目のゴツさとスケベな性格が相まって女の子には敬遠されている。頼りがいがありそうな見た目であるためか年下の女の子からは好かれる傾向があるが、好かれないと思っている同年代や年上からは特に敬遠される傾向にある。

仲間の中では特に卓也と仲が良く、一緒に行動することが多い。好きな食べ物は肉で好きな飲み物は肉汁と見た目通りの嗜好をしている。

戦闘スタイルは、自身の筋肉を生かしたパワータイプ。プロレス技を多用する。

タロットカードを引いた際に出たカードは『力』

師岡 卓也 もろおか たくや

漫画やアニメ、ゲームなどに詳しいアキバ系で主人公の友人の一人。

あだ名は「モロ」。3月21日生まれ。血液型はA型。2年F組。

チームの中で数少ない常識人ゆえにか、自然とツツコミ役を担当するハメに。

女性と仲良くしたいと思っているが、仲間以外の女性とは目線を合わせることも出来ずにいるシャイな性格。

普段は温厚で良識派だが本気でキレると恐い。特に仲間を傷つける相手に対しては冷酷になる。

幼馴染のガクトと仲が良く、大抵二人でつるんで遊んでいる。

2・Fのクラス内ではスグルや福本育郎などの男子とも仲が良く、アニメについて語ったりパソコンの修理をしてやるなど仲間以外で

も非モテ系男子との交流はある。

ガクトや福本育郎のようにオープンにエロトークはしないものの女性への興味はそれなりにあり、福本育郎が隠し撮りした写真にクリスのパンチラがあると聞くやいなや、すごい勢いで喰いつくなどのアクションを起こし、福本育郎などの一部男子からはムツツリスケべと認識された。

アニメ「オータム」が気に入っているようで携帯の着信メロディにオータムの主題歌を設定している。

アニメと同じぐらいパソコンなどの機械にも詳しく、機械の話になると延々と語りだす。

戦闘時は、データ収集、説得などに回る完全支援タイプ。

タロットカードを引いた際に出たカードは『教皇』

ほんごうなあたか
本郷直孝

転生前はさまざまな武術の種目で世界チャンピオンを破るなど、まさに生きるチートであったが、菜月のミスによって誤って殺されてしまう。死因は食中毒。

その後、菜月から間違ってしまったお詫びとして、「好きな世界に転生できる権利（回数制限なし）」をもらった。

その権利を使い、今はマジ恋の世界で楽しく暮らしながらマロードの野望を阻止することを目標としている。

外見は身長175前後でそれなりにイケメン。実際、転生する前は何十人も女子から告白を受けていた。

菜月によって施された身体強化と、直孝自身の特訓の末、百代でさえも本気を出せば勝つことができる。ちなみに、鉄乙女との勝負は一発でけりがついた。

戦闘スタイルは様々。前述したようにほとんどの武術ができるため戦い方も何百パターンもある。

だが、直孝自身は素手が一番好きである。

また、気を使うのがうまく、相手一人だけに高密度な殺気を送ったり、自分の身体にまわせて身体の硬度を増させることがしばしばある。

ついでに言つとくと、結構計算高い男である。

好きな言葉は「人生で受け取ることができる悲しみの量は決まっている」

とっでもどつでもいいことだが、童貞。

マジ恋を知らない人のためのキャラ紹介〜風間ファミリー&主人公編〜（後書き

さて、次回はサブキャラ紹介&用語解説を予定しております。

多分その後は本編に戻ります。

というか、今回これを書いてて思ったことがひとつあります。

「wikiって便利だね!!」

nosukeさん、beetさん、感想ありがとうございました。

ほかの方も感想書いてくれるとうれしいです。

マジ恋を知らない人のためのキャラ紹介／サブキャラ編／&用語解説（前書き）

1 ページ目の最初の方はお知らせというか報告です。

正直今回は前回のキャラ紹介より長いです。というか、マジ恋サブキャラ多すぎ……。

なのでプレイ済みの方は1 ページ目のお知らせを読んだ後、あとがきまで飛んでくださってかまいません。

マジ恋を知らない人のためのキャラ紹介、サブキャラ編、&用語解説

まず、最初にお知らせがあります。

10000PV&2000ユニーク&合計100pt突破しました
!!!!!!

まさか投稿してから3日でこれだけ沢山の人が読んでくれるとは思
ってもいなかったので感無量です。

これからもがんばりますのでよろしくお願いします。

それでは本題に入ります。

・キャラ紹介

おがさわら
小笠原 千花 ちか

川神院に通じる仲見世通りに軒を構える和菓子屋の娘。 7月20日
生まれ。血液型はB型。

一子、京、真与、クリスなどの人気のある女子は色々な理由で敬遠
されているため、その結果手頃な千花に男子が殺到している。

しかし、みなとそふと公式によると彼氏とは長続きしないタイプ。

クラス委員長の真与とは仲が良い。ガクトや福本育郎などの2-F
の非モテ系男子を「マジキモ」と嫌っており中でもスグルとは犬猿
の仲でしょっちゅう喧嘩している。

非モテ系男子の中でも卓也は比較的嫌っておらず、「師岡くん」と
名字で呼び普通のクラスメイトとして会話しているが、話すときに
目を合わせない癖は嫌がっている。

心を許した相手には手作りの小笠原キャンディという飴を贈る。

割と純情で優しい部分も持ち合わせてはいるのだが、基本的には今

時の女子高生らしく思慮が浅く軽率な言動が目立つ傾向がある。

タロットカードを引いた際に出たカードは『恋愛』

あまかす まよ
甘粕 真与

2 - Fで一番身長が低いクラス委員長。 4月10日生まれ。 血液型はA型。

千花と仲が良くよく二人でいる。

2 - Sに昇格できるだけの成績を保持しているが、卒業後は貧乏な実家の家計を助けるために社会に出て働くつもりなので2 - Fに留まっている。

家の経済事情からか質素儉約を心がけており、かなりの儉約家。

見た目は小学生であるが、本人は自分がお姉さんキャラであると感じている。その幼い容姿から井上準にはいつも生暖かい目で見守られている。見かけによらず責任感や芯が強く、尚且つ周囲に対しての思いやりや優しさを持つこの作品随一の良識人。

タロットカードを引いた際に出たカードは『女教皇』

小島^{こじま} 梅子^{うめこ}

2 - Fの担任教師で歴史担当。 1月7日生まれ。 血液型はA型。

弓道部の顧問も務める。 28歳独身、恋人無し。 生徒指導に厳しい女教師で、本物の鞭を使って「教育的指導」を行う生徒たちからは「鬼小島」と呼ばれ恐れられている一方で、その美貌からガクトなどの年上好きの男子には密かに人気があり、同僚教師の宇佐美巨人からも度々アプローチを受けているが毎回袖にしている。

タロットカードを引いた際に出たカードは『女帝』

福本 育郎
ふくもと いくりょう

常にカメラを持ち歩いている写真屋の息子。9月30日生まれ。血液型はB型。

あだ名は『ヨンパチ』。

カメラの腕前が披露されるのは女子の盗撮がほとんどで、梅子に鞭で叩かれて喜ぶなどマゾ気質も併せ持つ変態。

岳人とは「モテない」仲間。

『ヨンパチ』というあだ名は四十八手をすべて言えたことから、ガクトにつけられた。

独自の情報網を持ち女子の男子に対する好感度を瞬時にグラフにできる。風間ファミリーの女子達も盗撮しようとしているが、百代達に盗撮するスキが無いため毎回撮影に失敗している。

タロットカードを引いた際に出たカードは『星』

くまがい みつる
熊飼 満

体が大きく「クマちゃん」の愛称で呼ばれている。5月4日生まれ。
血液型はA型。

食に通じており、料理も上手い。グルメ仲間の翔一が一目置いてい
る。

糖尿病の気があるため最近は体重を気にしている。

みなもと ただかつ
源 忠勝

島津寮で暮らしている。1月30日生まれ。血液型はO型。

あだ名は「ゲンさん（源だから）」。

元々は孤児だったが宇佐美に引き取られた。

趣味は料理と裁縫で、その家事スキルは高く、ごくたまに寮の皆に
料理を振る舞ったりしている。

大和いわく「健康的な不良で実は良い人（新ジャンルとまで言っている）」。

孤児時代に川神一子と同じ施設で育つなど風間ファミリーとの繋がりも浅くないため、度々翔一や大和から風間ファミリーに誘われているが「なれ合いは好きじゃない」と断り続けている。

「お前のためじゃねえ」や「勘違いすんな」が口癖のツンデレ。

タロットカードを引いた際に出たカードは『悪魔』

大串 スグル（おおぐし　すぐる）

2 - Fの引き籠もりっぽい青年。 6月15日生まれ。 血液型はA型。

恋人は二次元の美少女と恥ずかしげもなく言えるオタクである。

最近のお気に入りアニメは「オータム」で学校内外でよく卓也とアニメやゲームの話をしている。

握力が平均的男子の数値よりもかなり低いが本人は「マウスクリックできる力があればいい」と、まるで気にしていない。

ドイツ軍に関する知識は本職の軍人にも負けないと自負している。

タロットカードを引いた際に出たカードは『隠者』

羽黒 はぐろ
黒子 くろこ

2 - Fの女子生徒。 3月6日生まれ。 血液型はB型。

悪役レスラーの娘。

いざというときには仲間のために己の身を危険に晒すことすら厭わない。

九鬼^{くき} 英雄^{ひであ}

九鬼財閥の御曹司で2 - Sのリーダー。8月7日生まれ。血液型はB型。

きみあるに登場した九鬼揚羽の弟。

みなとそふと公式では超絶俺様主義者と称されている。

一人称は「我」。破天荒で高飛車だが悪人ではない好漢。

成績は冬馬に次ぐ学年次席の成績。

学校に登下校する際にはあずみが引く黄金の人力車に乗っている。

姉の九鬼揚羽と腹違いの妹の九鬼紋白がいる。

九鬼家の嫡男として高い能力を持ち一部では姉を凌駕するものを持っているが、武道に関しては姉ほど強くはない。

3人とも兄弟仲は良く、3人でそれぞれ九鬼家での役割を決め、力を合わせて父である九鬼帝を超えるつもりでいる（揚羽が軍事、英雄が商業を統べ、妹の紋白が政界に進出するという計画）。

夢を断たれた過去があり、それゆえ夢に向かってひたむきな努力を

続ける一子に惚れている。

全く相手にされていないが、その想いは真剣であり彼女の幸せを何よりも願っている。

対して一子と常に一緒にいる風間ファミリー（特に翔一）は気に喰わない庶民と認識している。

口癖は姉と同じく「ふはははははは！」。

タロットカードを引いた際に出たカードは『皇帝』

忍足 あずみ（おしたり あずみ）

英雄に仕える万能メイドにして、九鬼家の使用人たちの統括役を務める。5月26日生まれ。血液型はAB型。

英雄のメイドであることを強く意識しているため、学園でもメイド服を着用している。

みなとそふと公式によると「メイドモード」と「通常モード」の2

つのモードがあり、英雄がない場では「通常モード」に切り替わる。

通常モードになると一人称が「私」から「アタイ」へと変化し、他の者に対しては気が強くて腹黒くなる。

かつては、前作に登場した大佐（田尻耕）の部下として同じ傭兵部隊に所属し、「女王蜂」の異名で名を馳せていたが、戦いに疲れて部隊を去った。

武器は小太刀を愛用しており、武術も小太刀を用いた二刀流を得意とする。本物の戦場で戦ってきただけに、まっとうな対決よりも暗殺やだまし討ちなど、手段を選ばない戦いに強い。

タロットカードを引いた際に出たカードは『魔術師』

葵 あおい
冬馬 とうま

川神市で一番規模の大きな病院・葵紋病院の跡取り息子。12月25日生まれ。血液型はA型。ハーフ。

人並み以上のルックスを持ち、さらに大和たちの学年で首席の成績を誇る。

それ故に女子からの人気が非常に高い。男でも女でも「可愛い子が好き」と公言するバイセクシャルであり、大和にもアプローチを仕掛けてくる。

大和とはライバル関係でもある。

井上準と榊原小雪は特別な存在で、3人で一緒にいることが多い。

タロットカードを引いた際に出たカードは『死神』

さかきばら
榊原 小雪

みなとそふと公式では一人でフラフラしている謎多き美少女と紹介されている。7月1日生まれ。血液型はA型。

一人称は『僕』。準や冬馬に懐いている他、好物のマシュマロをくれるあずみの言うことはよく聞く。

よく井上準に内容が激しくシニールでブラックな手作りの紙芝居を

披露している。

テコンドーの使い手で、身体能力は恐ろしく高い。

タロットカードを引いた際に出たカードは『塔』

井上 準いのうえ じゅん

みなとそふと公式では2・Sのツッコミ役と称されている。10月7日生まれ。血液型はA型。

成績優秀、スポーツ万能、料理も得意。拳闘を嗜んでいる。

昼寝をしている間に小雪に悪戯され髪の毛をすべて剃られてしまったから、その髪型を気に入りそれ以降はスキンヘッドで通している。ロリコンだが「幼女は手折るものではなく愛でるもの」と語っており、姿を見ているだけでいいらしい。

普通の女子にもそれなりにモテるが、前述の理由から悉く断っている。

親が葵紋病院のNo.2なので、冬馬とは小さい頃から付き合いがある。

2・Sでは主にあずみのパシリとして使われている。

百代と二人で校内放送のパーソナリティを務めている。

タロットカードを引いた際に出たカードは『死神』

マルギツテ・エーベルバッハ（Margit Eberbach）
軍人の家系に生まれ、名家であるフリードリヒ家に修行に出されている。3月14日生まれ。21歳。
血液型はB型。

軍での階級は少尉で「獵犬」の異名を持つ。

多額の寄付金によって学園での軍服着用を許されている。

成績優秀で学年次席の九鬼英雄も「面白い勝負」とマルギツテの実力を認める。

優秀であるが故に、自信過剰で他者を侮り軽視するクセがある。

他者にも自分にも厳しいが世話好きなところもあり、特にクリスに
対しては「お嬢様」と呼びフランクと同じく激しく甘やかしている。
クリスにとって姉のような存在で、身の回りの世話もしているため、
家事も一通りこなせる。

左目に眼帯をしているが目に何かしらの欠陥を抱えているわけでは
ない。

武器はトンファーで、かなりの使い手。

激情した時の口癖は「H a s e n J a g d（野ウサギめ、狩って
やる）」。

いつ引いたのか不明だがタロットカードを引いた際に出たカードは
『戦車』

不死川 ふしかわ
心 こころ

名門と言われた不死川家の娘。 7月2日生まれ。 血液型はO型。

両親からは蝶よ花よと育てられた箱入り娘で、それ故に極端な選民思想を持っており、大財閥である九鬼家すら成り上がりとは馬鹿にし不死川家より格下だと思っている。

何があっても敗北を認めず勝負に負ける度に「覚えておれー！」と泣いて逃げていく愛すべきヘタレキャラ。

一人称は『此方』（こなた）。口癖は「ゝなのじゃ」。

武術は柔道を嗜んでおり、その腕前は全国区の実力で得意技は（華麗なる）内股と関節技（自称「高貴なる飛び関節」）。

見かけによらずインファイターだが、肉体的にも精神的にも打たれ弱い。

家の名声のおかげで着物で登校することを認められている、しかし2・5に在籍しているのは家の力ではなく自分の実力であり、努力家である。

家柄で人を選び好みするため友達はほぼ皆無で、ぬいぐるみ作りや影絵などの一人でも楽しめることを趣味としている。

タロットカードを引いた際に出たカードは『月』

宇佐美 巨人
うさみ きょじん

川神学園で教育の一環として取り入れられている「人間学」の教師。
9月6日生まれ。血液型はB型。35歳。

一見ダメ人間のようにだが、腕はあるので特進クラスの2・Sの担任に抜擢される。

本職は代行業。

後を継いでもらうべく孤児であった忠勝の面倒を見つつ、ノウハウを叩き込んでいる。

梅子にアプローチしているが相手にされていない。

さらにキャバ嬢も口説いているために万年金欠で過ごしている。

忠勝の師匠にして身元引受人。

最近インポテンツ気味で風俗で性行為を行う前にバイアグラ的な薬を飲んでいる。

タロットカードを引いた際に出たカードは『運命』

クッキー (Cookie)

本作品のマスコットの口ボ。

きみあるに登場したデニーロに対抗して九鬼財閥が作り上げた人工頭脳を備えた口ボ。

英雄が一子にプレゼントしたものだ、一子が「いらない」と大和に誕生日プレゼントとして送りつけた。

以後はクッキーのことが気に入った翔一をマイスターとし、主に翔一の部屋に居る。

秘密基地の管理の他、様々な世話を焼く。用途に合わせて3段階に変形することが出来る。

口癖は「全力で」。普段はお使いロボの第1形態でいることが多いが、沸点が低いためすぐキレて戦闘モードの第2形態に変形する。

第2形態の必殺技は「クッキー・ダイナミック」。

第3形態は小型化し翻訳機能を搭載した頭脳特化型となり口調も少しイヤミになるが、なぜかデニーロには弱腰。

非公式であるがクッキーを基にした戦闘タイプ（マガツ・クッキー）
やそのサイズアップされた有人機サイコ・クッキーも作られている。

タロットカードを引いた際に出たカードは『世界』

川神 かわかみ
鉄心 てっしん

百代の祖父。血液型はO型。

数十年前までは最強と言われていた男で、武術の総本山とも言われる川神院のトップ。

きみあるに登場した大佐の師で、川神学園の学長でもある。

とぼけた爺さんだが、怒った時に見せる闘気は凄まじく、世界各国に恐れられている。

「ワシがいる限り、この学園はブルマじゃ」と言い張り、弟子達に

拳以外にもこの教えを残している。

総理が子供であつた数十年前から見た目が変わっていない。

百代を止められる数少ない人物。

九鬼くき
揚羽あげは

1月1日生まれ。血液型はA B型。

既に学校は卒業し、現在は九鬼家軍事部門統括という地位にいる。

きみあるではショートボブの髪型だったが、たった2年で膝までの超ロングにまで伸び、体も成長した。きみあるから引き続き小十郎が専属の執事としてついており、姉と弟のような親しい関係になりながらも確固たる主従関係を結んでいる。

九鬼三姉弟の長姉で英雄の姉。

「人生は闘いである」という座右の銘を掲げている。武道四天王の1人で同じく武道四天王の川神百代とは過去に4回対戦したことが

ある。直孝が現れるまでは、百代が唯一「自分と対等の存在であるライバル」と認めている人物であり、先輩であり良き好敵手でもある彼女との試合を楽しみにしていた百代は、揚羽の卒業を寂しがっていた。

ルー師範代るーしはんだい

本名はルー・イー。7月30日生まれ。血液型はAB型。

川神院の拳法師範代にして、川神学園の熱血体育教師。

常にジャージ着用。百代のような天性の素質はなく努力によって師範代に至ったため、同じく努力家である一子の修行をよく見ている。

恋愛に関しては初心であり、素人童貞であるため、巨人にかかわれている。天性の素質では川神の血に劣るものの師範代の名は伊達ではなく、その強さは半端ではなく並の武道家など物の数ではない。

そんなルーの力を持つてしても川神百代には太刀打ちできない。

しかし百代の両親より実力は上であり、百代の両親はそのことを恥

じ現在武者修行の旅に出ている。

普段は面倒見のいい教師だが、その实力は鉄心や百代ですら文句無しに認める実力者。

酔拳の達人で飲めば飲むほど強くなるが本人は酒に頼ることを嫌っており、あまりこの技を使いたがらない。

70年代巨大ロボットアニメ風の必殺技を習得しており暇な時は必殺技の名前を考えている。

綾小路 麻呂
あやのこうじ まろ

川神学園で日本史を担当する教師。2月3日生まれ。血液型はAB型。

日本の貴族の生き方に心酔しており、一人称は『麻呂』。

「くでおじゃる」などのエセ公家言葉で喋り、顔も全身白塗りにして貴族になりきっている。

担当科目である日本史の授業でも、ほぼ平安時代しかやらない。

やんごとない家柄と認める不死川心をひいきしている。

不死川家と並び日本三大名家の一つ綾小路家の出身。

フランク・フリードリヒ (Frank Friedrich)

クリスの実の父親。 47才。 血液型はAB型。

由緒ある家柄の優秀な軍人で中将の地位に就いており、クリス自慢の父でもある。

一人娘であるクリスを溺愛しており、クリスに手を出す者がいるならば特殊部隊を動かす覚悟を持っている。

その溺愛ぶりは、マルギツテが川神学園に送り込まれたことや自身がクリスの無事を確認しに不定期に学園を訪れていることから伺える。

年齢の割に老けた容姿をしているが、実は理由があつてのこと。

総理そうり

日本の総理大臣。

元川神院門下生であり、鉄心と親しい。

現在でも時々川神院で体を鍛えているため、百代や一子とは顔見知り。

弓矢や射撃はかなりの腕前。

定額給付金などの政策を推し進めた。

蘇我そが
梅雪ばいせつ

総理の失脚を狙う野党幹事長の地位にある政治家。

卑劣な策を使うことが多いが国を想う気持ちは本物である。

ストレスが限界まで溜まると残忍で無邪気な性格に豹変する。

てんちょう
店長

川神駅前の商店街に店を構える川神書店の店長。 12月17日生まれ。血液型はB型。

大和達を子供の頃から知っている頑固オヤジ。

マニアックな書籍を取り揃えているため一般受けが悪く、さらにはチェーン展開する大手の書店が台頭してきたことで、近年経営が危うくなっている。

ちなみに店長の経営する書店は翔一のバイト先の一つでもある。

釈迦堂 刑部

元川神院師範代。 9月14日生まれ。 血液型はB型。

野獣のような男で純粹に戦いだけを楽しむ。 優れた天秤を持つが精神面の問題を克服できず、ルーとの決闘に敗れ破門された。

その後政府の諜報員となったが宮使えが性に合わず辞任。

現在は板垣三姉妹に武術を教えている。

板垣 竜兵

川神の歓楽街で不良たちを纏め上げている凄腕の男。 8月27日生まれ。

強い者と戦えればそれで良く、そこに善悪の価値は存在しないという考えを持つ。

しかしながら、姉たちには頭が上がらない。

辰子とは双子であり竜兵が弟。

同性愛者で、線の細い美少年タイプが好み。

板垣 いたがき 亜巳 あみ

川神の駅前から歓楽街あたりで見かけられる女性。

10月7日生まれ。男女見境無く暴力をふるうサディストと噂されている。

職業はSMクラブのNo.1女王。

弟と2人の妹を完全に支配している。

板垣 いたがき
辰子 たつこ

ボーッとしており、よく川辺で寝ている温厚な女性。 8月27日生まれ。

竜兵とは双子で辰子が姉になる。

主人公と同年。

姉妹の中でイジられ役で家事などを全て担当しているが、それが当然だと思っている。

姉や妹、弟が大好き。

大和に本気で惚れているらしい。

武道の素質は姉妹の中でも一番あり、覚醒状態ならば力だけなら川神百代を超える。

全体的な出番は少ないものの、発売後に行われた女性キャラ人気投票では第7位を獲得した。

板垣 いたがき 天使 えんじえる

ゲームセンターでよく見かける口の悪い娘。 5月1日生まれ。

人懐っこい感じで親しみやすい。

上の姉2人や兄が大好き。

本人は自身の名前をとて嫌っており、つけられていい迷惑だと思っている。武器はゴルフクラブ、戦闘時は薬で強くなったこともある。

マロード

板垣姉弟や川神の薬物汚染の影で蠢く正体不明の謎の人物。

恐るべき計画を実行するため風間ファミリーへその魔の手を向けてくる。

変声機を用いてP C画面越しに会話するため、ごく僅かな人間しかその正体を知らない。

おおわだ
大和田
いよ
伊予

由紀江と同じ1 - C組に所属する普通の女の子。10月7日生まれ。

血液型はA B型。

クラスで席替えをした際に由紀江の隣の席になったことで由紀江と知り合う。

別学区から川神学園に越境入学してきたという境遇から、由紀江に「昔からの知り合いが学校にいない。つまり友達があまりいなさそう」と思われたため、由紀江の100人お友達計画のターゲットになる。

性格はおとなしく少しボーっとしたところがあり、クラスでも地味な存在だが、隠れ美少女として密かに人気がある。

好物は和菓子で、猫食いでちょっとずつ口に運ぶ姿がよく目撃される。

とつつきやすい性格だが、大ファンである七浜ベ이스ターズがあと一步の所で逆転を許すなどの試合をした翌日は機嫌が悪くなる。

武蔵 むさし 小杉 こすぎ

川神学園1 - S組に所属する中性的な外見をした女生徒。 9月15
日生まれ。 血液型はB型。

口癖は「プレミアムな〜」。

特進クラスのS組に所属するだけあってプライドが高く全てにおいて自分が一番でないと気が済まない性格をしている。

そのため、様々な相手に片っ端から決闘を仕掛け、現在は1年生のほぼ全てを掌握し現在は学園の制圧を目標に上の学年の生徒たちをターゲットにしている。

いつ戦いになってもいいように、常に動きやすい体操服を来ている。

武器は弓矢を得意とする他、体術を会得しており1年生のほぼ全てを決闘でねじ伏せ掌握している。

矢場^{やば} 弓子^{ゆみこ}

弓道部主将。 8月8日生まれ。 血液型はAB型。 3 - F所属。

人と話す時は語尾に「候」をつけるが、梅子や弓道部員など気を許す人と話す時は素の口調になる。

本来は非常に面倒見のよい家庭的な性格をしているが、優しすぎて拒否ができない人間になりそうだったので意識して伶俐な仮面を被りクールに振る舞う事にした。

彼女の元々の性格を知っているのは親戚一同と弓道部の面々のみ。

実はかなりミーハーな所があり、葵冬馬が好みのタイプ。

百代とはそれなりに遊んだりするらしく、3 - F組では一番の仲良らしい。

京極^{きんぎょく} 彦一^{ひこいち}

3・S所属の言霊部部长で、エレガント・クアットロの一員。

常に和服を着ており、いつも難しそうな顔で読書をしている。

腕っ節はからつきしだが、戦闘ではそれを補って余りあるほど強力な言霊を駆使する。

百代や弓子の異質さに知的好奇心を抱き、Sクラスに身を置きながらもよくFクラスに顔を出している珍しい存在。

島津^{しまづ} 麗子^{れいこ}

大和の幼馴染の一人である島津岳人の母親。

見た目は非常にゴツいが料理上手の肝っ玉母ちゃん。

大和達が寮生活をしている島津寮の管理人兼寮母。もともと島津寮は島津家が土地と建物を川神学園に提供したことでできた寮であるため、学園側から生徒の引率を任されている。

その見た目通りの豪快な性格でかつて島津寮の寮生の男子が立ち入

り禁止の2階に無断で侵入した際にはその男子生徒を市中引き回しの刑に処した上、退学にしたという逸話が残っている。

昔は川神の鬼女と呼ばれ、恐れられていた。

岳人の母親ということもあり大和達を子供の頃から見知っており「大和ちゃん」「京ちゃん」と「ちゃん」付けで呼び親しげに接している。

しもきたざわくん
下北沢君

川神学園での大和の知人の一人。

女好きで見た目も中身もチャラ男。

よく大和のメル友相手になっている。

橘 たちばな 天衣 たかえ

かつては「武道四天王」だったが、黛由紀江に敗れ、称号は剥奪されている。

武道四天王であつた頃は四天王最速のスピードを誇る武道家として知られていた。

鉄 くろがね 乙女 おとめ

かつては「武道四天王」だったが、直孝に一撃で倒され、称号を剥奪された。

じゅうじょう ながき
十条 菜月

直孝を誤って殺した張本人で神様。

神様の中ではそれなりに強い権力を持っているらしい。

神様なので正確な年齢はわからないが見た目は身長155cmほどで、それなりに胸もある。

今後の展開しだいでは直孝と（ry。

・用語解説

風間ファミリィ

風間翔一を中心とした友人グループの通称。

最初は大和、翔一の2人から始まり、その次に一子、岳人&卓也、百代、京と増え7人のメンバーとなり、クリス&由紀江&直孝が加わって10人のメンバーとなった。

川神学園

作中の登場人物のほとんどが通う学園。学長は川神鉄心。

ここには合法的に「決闘」を行えるシステムがある。

Sクラス

川神学園の特別進学クラスで、学年50位以下の成績を取ると在籍できなくなる。

川神院

川神姉妹や鉄心が住んでる寺院。

拳法を教えている。総理もこの門下生。

九鬼財閥

『君が主で執事が俺で』から引き続き登場する財閥。

武道四天王

川神百代、鉄乙女、九鬼揚羽、橘天衣の四者を四天王に擬えて称する呼称だったが、後に橘天衣は黛由紀江に破れ、鉄乙女が直孝に敗れたため武道四天王の称号を剥奪され、後に黛由紀江と直孝が新たな武道四天王となる。

エレガンテ・クアットロ

川神学園における四大イケメンである風間翔一、源忠勝、葵冬馬、

京極彦一（3年S組・言霊部部长）の四人を称する呼称。

イケメン四天王とも呼ばれる。

キモ四天王

2年F組の女子が岳人達と対立した時に使用した蔑称。島津岳人、福本育郎、大串スグルの3人と、残りの1人は「3年の常に牧場の匂いがする先輩」。

競り

学院内で発生した問題（ただし、規模が学院外に及ぶ事もある）を解決する担当チームを決めるオークション。

代表者が出席した会合で麻呂が依頼内容をなぞらえた俳句を読み上げ、報酬の食券を最も少ない枚数で落札した代表者のグループが責任をもって依頼を遂行する（失敗した場合は食券倍返しのペナルティが架せられる）。

モチーフは寅の会

大和丸夢日記

クリスが大好きな時代劇。モチーフは必殺シリーズ。

オータム

スグルが神聖化している美少女ゲーム。

滋賀アニメという会社によってテレビアニメ化されており、そちらも好評。

設定されているヒロインたちの名前は平成ライダーシリーズの登場人物がモチーフ。

ユートピア

川神市に広まりつつある合法的な麻薬。

マロードと呼ばれる存在が元締めとして暗躍している。

川神水

成分は普通の水だが多馬川の源流に湧く水。

飲むと酒を飲んだような状態になるが、ノンアルコールであることが作中何度も強調されている。

酔ったとしても場酔いと考えればいいらしい。

マジ恋を知らない人のためのキャラ紹介／サブキャラ編／&用語解説（後書き）

作者の八重桜です。本文にも書きましたがまさか3日で10000pvを超えるとは思いませんでした。これもすべて読者の皆様のおかげです。これからも読んでくださるとうれしいです。

さて、2話連続でキャラ紹介を行いました。マジ恋のキャラの多さを実感しました。まさか2話で15000文字を超えるとは・・・。

ですが、次回からは本編に戻ります。

早く箱根旅行編書きたいです。

感想をくださりましたキキヨウさん、ありがとうございました。

ほかの方も感想を下されると私が調子に乗って執筆スピードが上がりますんで、良かったら書いてくれるとうれしいです。

それでは see you again .

4話 それぞれの金曜日（前書き）

本編第4話です。

アクセス数があと少しで20000pvです。みなさんご愛読ありがとうございます。

4話 それぞれの金曜日

教室に戻ると、俺はほかのクラスメートから声をかけられた。

「本郷君すごいですね。あのワン子ちゃんに勝つなんて」

「ワン子が……負けた……。」

って割と良くあることだったわね」

「まあ、ワン子ちゃんはいつも喧嘩吹っかけて負けてますよね」

あの真与に苦笑いをさせるなんて、ある意味すごいぞ、ワン子。

「でもナオ。結局どうして薙刀が折れて、ワン子が倒れたんだ？」

ここに、からくりが理解できていない馬鹿ガクトがいた。

まあ、分かってる人のなんて一握りもないだろうけど。

っていうか、俺のあだ名、「ナオ」に決まっちゃったのか……。

「それは「ちよつと待った!!!」」

あだ名が微妙に女っぽいことは置いて、気を取り直して話そうとしたら、いきなり声をかけられたので、振り向くと、そこには意識が戻ったらしいワン子がいた。

「ナオ、もう一回勝負よ!!」

はい？なんとおっしゃいましたか？

この子あれだけ完璧に負けてて、まだ勝負する気なの？

「今度は本気でいくわよ!!」

そう言うと、ワン子は装備していたリストバンドをはずした。

そのリストバンドはズンツ、という音をたてて落ちた。

そういえばあつたなこんな展開。たしかクリスが転入してきたときだったつけ？

「おいおい、あのリストバンド何キロあるんだ？」

「今まであんなハンデの中で戦ってたというのか・・・」

ワン子が重いリストバンドをつけていたってという事実を知って、
クラスはまた騒がしくなった。

「さあ。第2Rといきましょう・・・」

「ワン子、もうやめとけて。」

ナオはお前に一撃も攻撃をせずに勝ったんだぞ。

それに相手は素手なんだから、直孝も十分ハンデをつけていたんだぞ」

戦う気にあふれていたワン子を止めたのは、大和だった。

「うっ、痛いところをついてくるわね。」

そうね。勝負はいつでもできるし、まずは・・・」

そこで一旦言葉を切ると、

「私達はナオを歓迎するわ!!!」

と言った。

その言葉に続くように、

「強かったんだね、すごいすごい」

「健闘をたたえて拍手です」

「骨のある奴だ」

「かつこよかったぞー!!」

ほかのクラスメイトも俺を歓迎してくれた。
ツンデレな源さんもほめてくれたし。

「よろしくね」

「川神さん、俺こそよろしく」

「ワン子って呼んでくれていいわよ。ほかのみんなもそう呼んでる

し。

そのかわりに私もナオって呼ぶからね」

俺達は握手をした。それはもう友人としての、いや、仲間としての握手だった。

「で、結局なんでワン子は負けたんだ？」

ここに、いまだに質問に答えてもらえていない馬鹿^{ガクト}がいた。

――2009年4月24日

おれが転校してから1週間たった。クラスメイトもおれを歓迎してくれたため友人が何人もできて、楽しい学園生活を送っている。

今日はクリスが転校してきて、ワン子が決闘をして、原作どおりワ
ン子が負けた。

こんな風にのどかな毎日を過ごしていたのだが、

今俺は夜の親不孝通りにいた。

そつ、いち早くユートピアの流通を止めるために早くからでも行動
を起こそうと思ったからだ。

実際さつきまで2、3人の外国人（たぶん台湾人が中国人だろうが）
に声をかけられた。

まあ、その売人には眠っておいてもらったが。

そんなこんなで俺は今親不孝通りの最奥にいた。

そのときだった。

ものすごい邪悪な気を感じ取ったのは。

俺は大急ぎで道を引き返し、その邪悪な気の発生源の元へ向かった。

その発生源にたどり着くとそこには大量の人が地面に転がっており、その大量の倒れている人の中央に一人だけ立ってる人がいた。

その人は青髪の青年、そう、暁の護衛シリーズの主人公、朝霧海斗だった。

「お前は誰だ？」

「人の名前を聞く前に自分からの乗るもんじゃないのか？」

まあ、俺はお前の名前を知ってるがな、朝霧海斗」

「なぜ俺の名前を知っている？」

「さあな。

というかそんなに殺気を放つな。

俺はお前とここで戦う気はない」

その言葉は事実だった。

別にここで戦っても仕方がないし、何より戦う理由がないのだ。

地面に倒れている人は俺の知り合いじゃないから、別に咎める気がないし。

「そうか、その言葉を信用する気はないが、お前とここで戦っても確実に勝てると思えん。」

お前、相当強いだろ？」

「さあな？そんなこと言ったらお前も相当強いだろ？」

「海斗。こっちは終わったよ……って、誰そいつ？」

海斗のそばに現れた女は杏子だった。

杏子は俺の存在に気づき次第、殺気を放ってくるが俺はすべて無視していた。

「別にこいつは俺らの敵ではないらしい。それに相当強いぞ」

「こんな男が？ありえない……」

その言葉を言い終える前に俺は杏子を気絶させた。もちろん殺気で。

「殺気だけで杏子を気絶させるとは……。そんな奴めったにないぞ」

「そりゃ光栄だね」

「もう少し話していたいが、俺らはもう行く。こちとら口うるさいお嬢様が待つてるんでね」

そう言つと、海斗は杏子を抱きかかえながらこの場を去っていった。

海斗がこの世界にいるのは予想外だった。まあ俺の存在みたいなイレギュラーってことかな。

だが今の発言から考えると、まだあの事件は起きてないようだな。あの事件が起きたとき、海斗はどちら側につくのだろうか？

そして、なぜか………海斗とはいずれ戦うことになる気がした。

大和 side

――同時刻 秘密基地

「……………ってことがさっきあったわけなんだぜ!？」

俺はさっきのクリスとのやり取りをほかのみんなに話していた。

「はははっ、大和がせこい手使ってっからだ」

「失礼な女だね。案内した大和に向かって（怒）」

「む？策を用いる大和に怒りを覚えるなら、正統派肉弾タイプな俺ならクリス落ちるか？」

「無理無理。ああいうタイプは口うるさいよ」

岳人の馬鹿な発言は一瞬で京によって否定された。

「まあ、父親も怖いしな。俺様の肉体も銃弾は弾けない」

「そういう生真面目そうなのを落とすのが面白い。

私の美少女パワーでクリスをメロメロにしたいな」

「美少女？漢パワーの間違・・・いでっ」

正しいこと言ったのに姉さんに殴られた。理不尽だあああああ。

「ふふんっ、生意気な大和をこねくり回して遊ぶかな」

抱きしめられたので撃退の呪文を唱える。

「姉さん、そろそろ貸した金返してよ」

「zzz」

「寝た振りする気持ちも分かるけど、私の分もね」

「さて、ポップコーンでも食べるか」

姉さん、逃げたな……。

「なーんてな。しっかりと金は持ってきてるさ」

京がお姫様抱っこされた。

「助けて大和、寝取られる。狼に食べられる」

「zzz」

こういうときは寝たふりが一番。

「都合が悪くなるとああするように調教してある」

「いいな、私も調教したいな。ヌルヌルと」

「では一緒に調教するか。ネッチリと」

「いきなり矛先が俺に向くから侮れない」

「むっ、この強い気と普通な気はワン子とモロロか」

普通な気って……、確かにその通りかもしれないけど、なんか
かわいそう。

「2人来たんだ、相変わらず便利なセキュリティ

「今2階あたりだな」

建物から周囲2kmにかけて、姉さんが気を張っているため、侵入
者がビルに近づくと、即座に察知が可能である。

「到着ー！飲み物買って来たよー」

「ではそれは預かっておこう」

クッキーはワン子を買ってきた飲み物を収納した。

「おー。キャップ以外はみんなそろってるね」

「もうすぐ来るだろ。モロはなにしてたんだよ」

「ヨンパチの画像収集用のPCが重くて調子が悪いって言うから、家まで行って見てきたんだけどさ、常駐ソフトが同時に立ち上がりまくってて、そりゃ重いはずだよ。」

で、まあメモリを増やすより先にリソース不足を解消しようと不要ファイルとかレジストリーなんかをソフトで消しつてて、デフラグとかをかけてって……」

「出た、モロの機械語り」

そう、モロは電子機器やゲームの話になると良くしゃべるのだ。

「おい、誰か聞いてやれ。火種の岳人行け」

「ヤドカリオタクもいるし、迷惑な存在だぜ」

ヤドカリ……！

その言葉を聴いた瞬間、俺の頭の中でSEEDが弾けた。

「ヤドカリの良さが分からないか。なら教えよう。彼らはキュートに動く。木に登ったり砂に潜ったり。そののんびりした感じが、あわただしい現代社会の中では……」

「2人に増えてしまっただろうが。早く止める」

「大和は私が引き受ける。たとえ貞操を失っても止める」

「大和の貞操が心配だ」

「すでに貞操なかったりしてな」

「そしたら殺す」

男の嫉妬って怖いね、うん。

「盛大に殺す」

そして岳人より京のほうが怖い。

「てーそう？なんのこと？和菓子的一种かな？」

そしてそういう知識がない犬が一匹。

「なんとなく無垢な存在。まぶしくて見えない」

京さんや・・・あんただれだけ暗いんですか・・・。

「お姉さま、何の話なの？」

「子供はどうやってできるか・・・そんな感じだ（ずいっ）」

なぜか京が答えたし。

「おおっ！（赤面）エロチ力な話だったんだ」

はい、そこ。これぐらいで赤くならない。

「あたしそういうのぜんぜん分からなくて・・・。

教えて、お姉さま」

「レズには興味がないね」

だから、何でさっきから京が答えてるの？

そのとき、近くで原付の音が聞こえた。

「この音はキャップか」

「ああ、間違いないな。この楽観的な気は」

「ウイース」

ダダダダダダダ！！！！

「駆けつけてくるとは俺になついてるな、ワン子」

「待つてたわよ、晩御飯!!!!!!!!!!!!!!」

「あーそっちね。まあ、全員そろってるようだし始めるか、金曜集会。」

ほれ今日のあまり分だ。量多いぜー、フフン」

キャップがドンツつとおいた袋の中には、バイトでの収穫物、寿司が大量に入っていた。

「大量ね。ざるパック（下が蕎麦、上が寿司）もある」

「今日はかなりあまったからな。ガンガン食え」

「モロロ、寿司来てるぞ。お前は箸使う派だろ」

「ビデオカードアクセラレーターをつけて18万で売れ……。」

あれ、キャップ来てたんだ」

「食う準備しないとほしいのなくなっちまうぞ」

「これだけの量の寿司があれば結構もつぜ」

「甘いなガクト」

「ねっ、あたしらガッツリ食べる心構えよ」

相変わらず仲がいい姉妹なことだ。

「大和、はいシヨーク」

「ああ」

「大和、はいタバスコ」

「いらんだろ」

無意識に突っ込んでしまった。

「いるでしょ」

「醤油にタバスコ混ぜやがった……赤いよ赤いよ」

「そんじゃ頂きまーす」

キャップの号令でみんなが箸（一部、手）をのばす。

「あはは、おいしいおいしい。タダ寿司だわ」

「フライドチキンも良かったが寿司もいいな」

川神姉妹は手でひょいひょいと食べていた。

「余りゲットはバイトの役得だな。あつ、ネギトロもらい」

「でも宅配寿司はもう終わりだな。もともと短期だったし」

「望みどおり何か楽しい体験できた？」

「バイトの作業自体は簡単な宅配作業だからとくにねーけど、釣り好きな人が店長で、夏休みに奄美大島に釣りに連れてってくれるってさ。船の中泊まりで。大物とかガンガンいけるって、すげえ楽しみ。」

あと、宅配先ってご老人宅が多いんだ。どこで福引券とかいっぱいもらっちゃったりして」

「かわいがられてるねえキャップは」

「次はどこでバイトするかな」

「もぐもぐ。金曜日は食べ物系にきなさいよね」

「分かってるよ。よー食っちゃちな」

俺たちは子供のころからずっと一緒に遊んでいた。

ところが中学生のときに京が両親の離婚で静岡の中学校に転校することになった。

京はそれでも時間を作り、毎週金曜日〜週末にかけて、静岡から遊びにくるようになった。

だから俺たちも金曜日だけは空けるようにして、皆秘密基地に集まって遊ぶようになった。

これが俺たちが大切にしている「金曜集会」。

この伝統は京がこっちに帰ってきてからも、変わらずずっと続いている。

「じゃあ今日の議題だ」

キャップが本題に入った。

「明日どこで遊ぶか」

「それも重要だが、新メンバーの加入についてだ」

「新メンバーって何人？」

「クリスとナオと寮の後輩の3人だ。」

「で俺はいいと思うんだけど」

「というか、なんでその考えに到達するわけさ？」

「決まってるじゃん。」

「もって面白くなりそうだからだ！！。」

「それに一緒に遊びてえっと思った。」

「つで、久しぶりの新メンバー加入、どうよ？」

「一人ずつ聞いてみなよ」

俺はキャップに提案した。だって、このファミリーは7人集まってるファミリーなんだから。

「うーし。じゃあ牢名主のモモ先輩からどうぞ」

「賛成だ。クリスとまゆっちは欲しい。いろいろな意味で。

直孝は面白い奴だ。こっちもいろいろな意味で」

「即答だね」

「まあな。

安心しろ大和。射程はお前以外にとらないからな。

私の子分はお前一人。泣くところだぞここは」

「違う意味で涙が出てきそうだ」

「俺様は賛成。理由は簡単だ。女子は2人ともかわいいし、ナオは俺と考えが同じだしな。肉体こそが己の武器だ!!!!!!」

なんか一人、無駄に張り切ってるのがいるが無視しよう。

「私も賛成。いつでも勝負できる人が増えるし。でも、やっぱり様子見かしらね」

ワン子は様子見で、これで賛成3、様子見1か。

「じゃあ次はそこで浮かない顔をしている京」

「私は反対」

「……ああ、やっぱり?」

「他人は増やさなくていいよ。いらないそんなもの。この七人でいられるのが好きなの」

「モロはどーよ?」

「んー。僕も京と同じで反対かな。
いまさら新しいメンバーとか気を使っちゃうよ」

「えーと今は賛成3、反対2、様子見1か」

「大和、お前の意見が重要だ。聞かせてくれよ」

「ふふ、責任重大ね。やーいやーい」

「うーん」

「無視しないでよおお・・・」

「俺は3人の加入に賛成する」

「よしよし、よくできた舎弟だ」

「まあ、健全な男子なら当然の選択だな」

「大和が賛成なら、私も不本意ながら賛成」

「僕だけがままだいえないね」

結局は皆賛成になった。まあ一人様子見もいるが。

「じゃあ、3人には声かけるぜ。」

まとめると、京はなんか不満そうだし、空気が悪くなりそうだった
ら遠慮なく切るってことで」

キャップ、京のために切るとか厳しいこと言ってるな。

「うう。そうして」

「でもな、俺もっと楽しくなる確信はあるんよ。」

この数年、新規メンバーなんて俺が言い出したの初めてだろ。そんな
ぐらい面白い奴らなんだよ、あの3人は」

「相変わらずズバッと言い切るね」

「おう、任せとけっつーの。この俺を信じろ」

「うん。なにより3人の意思が重要だしな」

「皆、お疲れ様。飲み物でもどうだい？」

クッキーがちょうどいいところに来てくれた。

「私はピーチジュースがいいぞ」

「天帝ハバネロカイザードリンクがいい」

「俺様は肉が好きだから肉汁がいいな」

「マイスターはコーラだったね」

こうして飲み物を飲みながら、俺たちは明日どこで遊ぶかを話していた。

金曜の夜はまだまだ長かった。

4話 それぞれの金曜日（後書き）

さて、今回は暁の護衛と若干話をつなげてみましたが、海斗は当分出てきません。あくまで当分です。この意味分かりますよね？

6、7話からは箱根旅行編に入れそうです。

感想お待ちしております。

それでは see you again!

番外編？&アンケートのお知らせ（前書き）

29500PV、4000ユニーク、お気に入り登録60件突破！
！！！！

今、私はテスト中でありまして正直余り小説を書く時間がありませんでした。

ということで、文章のgood度がいつもの2倍くらいです。

また、アンケートをとりたいと思うので、できれば大勢の方に答えてもらいたいです。

番外編？&アンケートのお知らせ

俺は昨日親不孝どおりから帰ったあと、菜月に連絡を取ってからすぐに寝た。

だから、起きたときはもちろん自分の部屋のベッドの上にいるはずなのだが……………

「なんで俺ここにきてるの？」

そう、今俺がいるのは、一番最初に来た場所、つまり天界だった。

「昨日お話について説明しようかと思いましたが」

そして、当然のごとく菜月が俺の目の前にいた。

「というか、話すんだったら念話でいいじゃん」

「いや、出番が少ないと存在が忘れられそうですし……………」

まあ、3週間くらい会ってなかったのは事実だけども。

「それと作者の都合ですねwww」

あのヘタレ作者があああああ！

「結構ひどいことを言ってる気はしますが、それは置いて、昨日のお話について説明しましょう」

昨日の話とは、俺が昨日親不孝通りで朝霧海斗と出会ったことだ。

まあ、俺自身、まさかマジ恋の世界で暁の護衛シリーズのキャラに会うとは思ってなかったからとても驚いた。

「簡単に言っちゃうと直孝様の存在が原因です」

「俺？」

「はい。直孝様の存在によってマジ恋の世界に若干の歪みが生まれてしまったからです。」

まあ、直孝様自体イレギュラーな存在ですから」

まあ、実際マジ恋の歴史を変えちゃってるからな（笑）。

「じゃあ、これ以降も若干のイレギュラーはいくつも存在するといふこと？」

「そのとおりです。あと、直孝様……」

菜月は少し言いづらそうにしている。

「このままだと、彼は、朝霧海斗さんは大事件を起こしますよ」

俺は大事件と聞いて、真っ先にあの夏の、禁止区域の人間たちが起こした悲惨な事件を思い浮かんだ。

でも、あれは朝霧海斗が起こしたものではなかったはずだが……

「あと、現段階でもうひとつ原作と違う点がわかりました」

「何？」

「直孝様と黛さんが武道四天王を倒したことが、おそらくあと2、3日で川神院に気づかれます」

原作では確かまゆっちルートの7月後半とかそこら辺だったのに、ずいぶんと早まったんだな。

でも、川神院に気づかれるって事は、そろそろ百代と戦う準備をしておかなきゃな。

「私から伝えることはこれが全てですね」

「で、俺はどうやったらここから帰れるの？」

「普通におきたときにはベッドの上ですよ。あくまで私が直孝様の夢の中に入り込んでいるだけなので」

まじで？

「マジです！」

「でも夢なら、起きたら話の内容は忘れてるんじゃない……」

「神様の力を使えば大丈夫です」

「便利だな、神様の力って」

「まあ、人間より高位な存在ですからね。

ということ、そろそろ私も自分の仕事に戻ります」

「ああ。つで、次回はいつごろ出てくるんだ？」

「作者の都合しだいです（笑）」

本編終了。これ以降はアンケートについての説明です。

さてさて、この小説はそろそろ30000pvを超えるわけですが、マジ恋編は主にリユゼツランルートを基本として勧めていき、と

ころどころに川神大戦や運動会やオリジナルな展開を盛り込んでいく予定です。

また、現段階の予定としてはマジ恋の世界の3月、つまり百代の卒業、クリスの帰国までを描く予定で、リュウゼツランルート後の展開は全てオリジナルです。

あと、感想に書いてくださった方がいたのですが、マジ恋ではハイレムを作る気はありません。

あくまでマジ恋は友情をメインに進めて行きます。

いろいろと書きましたが、簡単に言つと皆さんにアンケートをとりたいと思います。

このアンケートの結果によって、今後の作品展開が変わります。

？マジ恋のキャラで誰が一番好きか？

A、百代

B、一子

C、クリス

D、まゆっち

E、京

F、2・S軍団

G、ファミリーの男性陣&源さん

H、その他

?マジ恋の世界が終わったら何の作品の世界をやって欲しいか?

この質問には自由に答えてくださって結構です。まあ、必ずしも要望にこたえられるとは限りませんが、自分の知ってるものならできるだけ答えられるように努力します。

まあ、できれば有名なエロゲorアニメにしてくださいとうれしいです。

？正直、この小説の改善点ってある？

A、文章の作り方が下手

B、1話、1話が短い

C、文章自体面白くない

D、その他

E、いや、改善点なんてないと思うよ

？ここは任意でいいです。

この小説に関しての感想をお聞かせください。

以上4つの答えを感想に書いてくださるとうれしいです。

答えてくださったアンケートは、今後の改善や小説の展開に影響します。

みなさんのご回答をお待ちします!!!

番外編？&アンケートのお知らせ（後書き）

さて、正直あとがきに書くことと書く時間が余りないのですが・・・
・次回はクリスのKYが炸裂すると思います。

それでは、皆さんのご回答、お待ちしております

5話 対戦相手不明の試合（前書き）

37500PV、5700ユニーク、75件のお気に入り、総合ポイント180p突破！！！！！！

読んでくださっている皆さん、いつもありがとうございます。

さてさて、結局今回も新メンバーにとっての初めての金曜集会までたどり着けなかった。でも、次回は確実に書きます。

今回は結構オリジナルな展開です。それではお楽しみください。

5話 対戦相手不明の試合

「・・・・・・・・ん」

今度は目が覚めると自分の部屋のベッドの上だった。窓からは光が差し込んでおり、時計は8時23分を指していた。

それにしても、ちゃんと十分に睡眠時間とったはずなのに、疲れが取れてない感じで、ものすごくだるかった。

絶対、人の夢に出てきたあの神のせいだろ。こっちは昨日何人も倒してきたっていうのに。

そんな感じで菜月に不満を覚えながらも、ベッドから出てリビングに降りようとしたそのときだった。

『忘れないでね、忘れないから、小さくうなずいて最初のキス』

狙い済ましたかのようなタイミングでリビングの電話が鳴っていた。

直江大和 s i d e

今日は土曜日……つまり基本的には休み。

だから俺は眠りを貪る……といいたところなんだけど、

「 z z z
」

「何で布団の中にお前がいるんだ！」

布団の中には京がいた。

「既成事実。ぽっ」

「嘘つけ。朝に潜り込んだだろ」

「想像に過ぎないね。くくく」

「既成事実だったからお前はそんなに元気じゃない」

「え？」

「今まで挑発された分、あらゆるエロイことを一晚賭けてお前にやりまくるので、そんなに元気ではいられないはずだ」

「なんで、俺は朝からこんなことを豪語してるのだろう。なんか、悲しくなってきた。」

「え．．．．あ．．う」

「京の顔は赤くなっていつていた。まあ、あんなこと言った俺のせいだけださ．．．。」

「具体的には．．．．」

「いいから出て行きたまえよ」

「あああ生殺し．．．．。朝からこんな．．．」

そんなこんなで力オスな朝は過ぎていった。

一時を同じくして島津寮2階、黛由紀江の部屋――

「父上、一筆啓上申し上げます。」

由紀江が川神学院に入学して、数週間が経過しました。

そちらはお変わりありませんか？

由紀江は未だ友達ができず、1人部屋で膝を抱えている日々です。

けれど、父上をお願いしてまで出てきたこの地、必ずや友達を作って父上にご紹介いたします。

暑くなるのが早いのでご自愛ください、あらかしこ――

「手紙の書き方、微妙におかしくね？まゆっち――」

「いいんですよ。形式ばり過ぎると堅苦しいと父上が――」

「難しい注文だよなー」

「ふう・・・、こうして家に手紙を出すのは楽しみです」

「弱気はだめだよー、今日はインハイ攻めようぜ」

「内角攻め・・・ですか？」

「風間グループに入って青春を楽しみたいんだろ」

「はい、もしそうならどんなに楽しいか・・・」

「入ーれーってYOU言っちゃいなYOー!」

「そんな、私なんかが入ったらご迷惑に」

「でも入りたい乙女心は天神乱漫・・・じゃなかった、春爛漫だろ？」

「はい、友達欲しいです。もう、一人は寂しいです。百人一首は」

人でやるものではないです」

「まゆっち、ちょっといいかい？」

「今の声はキャップさんのようです」

「まゆっちー、これはチャンスじゃね？」

「まあ、とりあえず行って来ますので、待っていてくださいね、松風」

あの京とのカオスなやり取りのあと、皆で朝食を取り、野球をしに河原に来ていた。もちろん、途中でワン子とモモ先輩とモロを誘って。キャップはまゆっちとクリスと直孝を誘ってあとから合流するらしい。

「4番、ファースト、島津岳人ーっと（打者）」

「ガクトか。空振りがとりやすい相手かな？（投手）」

「ウルア。来い京、ヒョロ玉を太平洋まで飛ばす」

太平洋って……、ここから何KM飛ばせばいいと思ってるんだ
よ……。

「結構いい球投げるぞ、京は（捕手）」

「ライトー、レフトー、よろしくねー」

「任せとけー。ズバっと投げろい！（ライト）」

まあ、こんなこといっても、実際に飛んできたらくに取れないけどねw。

「どんな球が来ても取るよー、イチロー並のプレイで！（レフト）」

「痛烈なあたり以外、内野ゴロはアウトだからね」

「ゴロなんか論外！俺様はHRのみを目指す！」

力強いけど、チームでやる時は最悪な発想だよな。

あれ？あそこを歩いてるのは……直孝とキャップとまゆっちとクリス？

直江大和 side 完

電話が鳴り始めたので急いでリビングに降りて電話に出ると、かけてきた人物はキャップだった。

「はいもしもし、本郷ですが」

「なんか眠そーな声してるな、お前。昨日ちゃんと寝たか？」

「ああ、ぐっすりと7時間寝たよ」

「まあいいや。本題に入るけど、今日お前空いてるか？」

「特に用事はないけど」

「じゃあ、駅前まで来てくれるか？会って話したいことがあるんだ」

「分かった。特に用事もないし行くよ」

「じゃあ、10時30分に駅まで来てくれ」

そついい終わるとキャップは電話を切ってしまった。

ホントに自由な男だな。

俺は話の内容に予想はつきつつも、待ち合わせ時間に遅刻しないように準備を始めた。

その後、約束の15分前に行くとすでにキャップ、それと俺と同じように声をかけられたらしいまゆっちとクリスがいた。

そして今現在俺たちは河原を歩いていた。

「つまり、俺たちを風間ファミリーに入れてくれるってこと?」

「ああ。まあ今日は野球だが、俺たちは他にもこうやって遊んでいく」

キャップの言葉とともに野球をやってる京たちのほうに視線をずらすと、

「それっ、ハンサムには打てないボール」

「まじでっ？（空振り）」

「1ストライク」

バカなことをやっていた。でも、

「楽しそうだな」

俺は無意識のうちにそう言っていた。

俺は転生する前も親の意向で武術の稽古ばかりしており、友人と遊ぶ時間などめったになかった。だからこそ、風間ファミリーがうらやましく思えるのだろう。

「そう思うなら仲間に入れよ、俺たちは歓迎するぜ！」

「ありがとう」

「他の二人も仲間に入るよな？」

「ああ、いきなりこんなに友達が増えるとはうれしいな」

「私、こんなに幸せでいいのでしょうか・・・」

なんか、まゆっちは昇天しそうな勢いだった。

「じゃあ、今日は島津寮でプチパーティーだな。川神院から肉を持ってそっちに行くぞ」

いつの間にか野球は休憩に入ったらしく、他のメンバーも俺たちのほうに来ていた。

「よし、じゃあ新メンバーも交えて、野球再開しようぜ！・・・」

「キャップ、その前に休憩させてよ！」

自由な男キャップに、大和とモロが悲鳴を上げていた。

翌日、風間ファミリの一員となった俺は、一緒に学校に行くため、河原で他の仲間を待っていた。

昨日はあのあと野球を17時くらいまでして、その後一旦解散してから島津寮に再集合してパーティーを行った。ワン子の食べっぷりは実際に見ているとものすごいものだった。

まるで、餌を投げ込まれたライオンのy・・・

「誰がライオンよ！」

「お前、いつの間に！というか人の心の中読むな」

「何言ってるのよ、声に出してたじゃない。」

失礼よね、ライオンじゃなくて、せめて犬って言いなさいよ」

「声に出ってたんだ。それに、結局人間扱いじゃなくてもいいんだ・

」

「おお、お前ら朝っぱらからいちゃついてる・・・うわあああああ
あ」

いつの間にか島津寮組とモロとモモ先輩が来ていた。ついでに言つとくが、ガクトを殴って川までふつとばしたのは、俺じゃなくてモモ先輩だからね。

「あれ、ガクト生きてるかな」

「大丈夫だろ、あいつは頑丈だけが取り柄だし。私はあいつは何があつてもしぶとく生き残ると信じているぞ」

それが殴つた人の言葉じゃなかったら感動できたのにね。

「そついえば、私の対戦相手が決まったらしいぞ」

「そつなの？お姉さま」

「でも、またモモ先輩の圧勝だろうね」

「対戦相手は誰なの？」

「それが、今回に限って、ジジイが対戦相手を教えてくれないんだよ」

「え？対戦相手を知らないの？」

「ああ。新しく武道四天王になった奴とは教えてくれたんだが」

俺はその会話を聞きながら昨日のことを思い出していた。

~~~~~回想~~~~~

――昨日　川神院

俺はパーティーにが終わって帰路についていたときに、川神院から呼び出された。なので俺は急いだ川神院に向かった。

「いきなり呼び出してすまんかったのう」

俺の目の前には世界最高の武神、川神鉄心がいた。

「いえいえ、俺もちょうど帰る途中だったので」

「やっぱり、モモは川神院の肉を持っていったのかの？」

「話を聞く限りそうみたいですな」

「あいつは……全く。肉を持っていくときぐらい声をかけんか」

モモ先輩、何も言わずに持ってきていたのか……。

「すみません。俺も食べてしまいました」

「いいんじゃないよ。どうせ声をかけてれば許可するつもりだったから」

「そうですか」

ここまでの会話を聞いてても、俺が呼び出された理由は分からなかった。

「さて、本題に入ると、君にお願いがあるんじゃない」

「お願い……ですか？」

「そうじゃ」

「それでそのお願いの内容とは？」

「モモと正式な試合をしてくれんかのう？」

「こんなお願いをしてくるってことはもしかして・・・」

「こんなこと、鉄乙女を一撃で倒した君にしか頼めないのじゃよ、  
武道四天王の一人、本郷直孝君」

「やっぱりばれてんのかよ。菜月は2、3日後とか言ってたけど、普通に1日後じゃねえか。」

「後であいつにはおしおきだな。」

「やっぱりばれてるんですね」

「川神院の修行者たちが全力で情報を集めたからのう。それに君たちの戦いを録画してた人がいたんじゃないよ」

なるほど。実際の映像があれば捜査も相当早くなってもおかしくはないな。

「それでも、モモ先輩に勝てるとは思えませんよ」

「いやいや、いくらモモでも武道四天王相手に一撃、それも開始3秒で決着をつけるのは無理じゃよ。それに殺気だけでそれなりの実力を持つ戦士を気絶させることも」

おそらく、戦士とはワン子のことを言っているのだろう。やっぱり、あの決闘のときに殺気で気絶させたのはばれてたか。

「別に無理に戦ってくれとは言わん。だが、モモに敗北を教えることができるのは君しかないのじゃ。」

わしは、モモがこれ以上戦闘をすることに快楽を覚え、戦闘狂になるのを止めたいんじゃない。

モモは実力はあるがそれに対応する精神力をもっていない。このままでは釈迦堂のようになってしまう。

どうか、わしに力を貸してくれんかの？」

言葉の節々からモモ先輩に対する愛情や思いやりを汲み取ることができた。こんな思いを聞いちゃ答えることなんてできるわけがない。

「分かりました。勝てるかどうか分かりませんが全力でやってみます」

「ありがとうございます。試合は来週の土曜日、場所は川神院にて、時間は13時から行つ」

「分かりました。この試合のことはやっぱり皆には伏せておいたほうがいいですか？」

「そうじゃの。わしもモモには対戦相手を伏せて伝えておく。なので、君もこの試合のことは誰にも言わんでくれ」

「分かりました」

「それにしても風間ファミリーとは不思議じゃな。武道四天王が3人もいるとは」

「後一人は黛由紀江のことですね」

「君は知っておったのか？」

「予測はしていましたけど、確信はありませんでした」

「もしかしたら、風間ファミリーだけでひとつの町を支配できるかもしれない」

「まさか……そんなことは………できない(?)とおもいますよ」

できないと断定することができなかった。モモ先輩一人でも相当なのにそれに、まゆっちと俺がいるわけだからな。

「失礼します。鉄心様、百代殿が島津寮のお風呂を壊したそうです」

いきなり入ってきた修行僧が、唐突にそんなことを告げていった。

「モモのやつ……せめて人様の家ではおとなしくできないのか」

「モモ先輩らしいですね。」

それでは、俺もそろそろ帰ります」

「直孝君、君には感謝してるよ」

「まだ勝てるとは思えませんがね。でも、全力でお手伝いさせてもらいます」

俺はそう告げると川神院を後にした。

~~~~~回想終了~~~~~

ってことがあった。つまり、今話してる試合は俺VSモモ先輩の試合ってわけだ。

「で、姉さんのその試合はいつあるの？」

「今週の土曜日だな。今回の試合は一般にも公開されるから、お前たちもよかつたら応援しにきてくれ」

「もちろん応援しに行くぜ」

「キャップ、言っとくけど賭けはだめだよ」

「なんでだよ」

キャップは嘆いていた。というかお偉いさんも来るかもしれない中で賭けをやるつもりだったのかよ。キャップらしいな。

「お姉さま、どうしたの暗い顔して？」

「いや、対戦相手を教えてくれない上に、一般公開するなんて今までなかったからな。対戦相手がものすごく気になるんだ」

「じゃあ、対戦相手を当てる賭けやるか！」

賭けをやることをあきらめないキャップであった。

そして、時間は過ぎて、クリスとまゆっち、そして俺にとって初め

ての金曜集会がやってくる。

続く・
・
・
・
・
・

5話 対戦相手不明の試合（後書き）

どうでしたでしょうか？次回はようやく金曜集会がやってきます。そして、それが終われば百代VSナオ、そして箱根旅行です。

というか、S組を出す暇がない・・・orz。

余談ですが、最初の着信音はD・C？PCのアイシア、まひるルーTEDの「さよならの向こう側で」です。自分、この曲好きなんですよwww。

さて、アンケートに答えてくださった方、ありがとうございます。

どうやら、人気キャラは今のところまゆっちと百代、次の世界候補はD・C？が多いですね。

このアンケートはまだまだ受け付けるので、まだ答えてない方もぜひ答えてください。

アンケートについて分からない方は前話を読んでください。

また、普通の感想もお待ちしております。

それでは

s e e y o u a g a i n .

6話 初めての金曜集会〜対立編〜（前書き）

48000pv、7000ユニーク、お気に入り件数80件、総合ポイント200pt突破！！！！

いつも読んでくださってる方々ありがとうございます。

これ以降もがんばっていきますので、よかったら読んでください。

さて、今回からちょっとバージョンアップしました。

まず、あらすじ、次回予告を今回から導入します。

そして、OP、EDの設定です。

OP、EDに関してはその状況に合わせて曲のときもあれば、単に主の趣味だったりします。

まあ、5話くらいで曲は変わると思います。

また、URLやその曲の情報を載せて置くので暇があったら聞いてみてください。

本編については、今回、次回はナオが若干空気です。

なんというか、・・・・大和が主人公みたいwww・

ですが、次々回のVS百代戦ではナオの独壇場(?)です。

・OPテーマ

第一章 マジ恋の世界 日常編 part 1 OP

「Shining ray」

歌 J a n n e D a A r c

アニメ ONE PIECE
ED?

この曲は表記したとおりワンピースのEDです。この曲を聴くと旅に出たくなります。

ナオの冒険もまだ始まったばかり。

まさにぴったりの曲ではないでしょうか？

URL <http://www.youtube.com/watch?v=VvzkJwCKRLE>

・EDテーマ

第1章 マジ恋の世界 日常編 part1 ED

「サクラサクミライコイユメ」

歌 yozuca*

アニメ D・Cダカーポop

この曲はD・C無印のOPです。

こちらもちょうど春にぴったりの曲です。

でも、自分はD・Cの曲は暗い曲のほうが好きなんですけどねww

URL <http://www.youtube.com/watch?v=zongc|tw9Us>

それでは、本編をお楽しみください

6話 初めての金曜集会対立編

前回までのあらすじ

ワン子「ついに新風間ファミリー始動。私も対戦相手が増えてうれしいわーって、お姉さまが試合？それに、対戦相手不明？

なんかこの先が思いやられるわ・・・」

今日も俺は河原で他の仲間たちを待っていた。他の仲間たちがいつもより遅いのは昨日夜遅くまで連続学校窓割り犯達を捕まえていたのが原因だろう。

え？連続学校窓割り犯ってなんのことって？

まあ、暇があったら回想することがあるだろう。

「オース。今日も早いな、ナオ」

「まあ、早起きは得意だからね」

現実では朝3時に起きて朝の鍛錬をやっていたので、それと比べれば明らかに楽だった。

「今日は金曜集会な」

「ウース」

「連休の予定も決めないとな」

「まゆまゆとクリスとナオは金曜集会分からないだろ。」

よし、妹よ！放課後3人を基地まで案内してやれ！」

「アイアイサー。で、アイアイって何の略？」

「俺様に聞くとは上級者だな。……猿？」

「アイアイサーって言うのはA y e a y e , s i r って書くんだけど、a y e っていうのは はい とかの意味を持つんだ。

だからアイアイは何かのじゃなくてちゃんと意味を持つてるんだよ」

「ナオ、すごいわね。なんか大和みたい」

「大和お得意のウンチクが取られたな」

「じいじいじいじい（殺意がこもったの視線）」

なんか京からめちゃくちゃにらまれてるんですけど。

今日も個性の強い仲間達であつた。

――放課後

「わああ、いい眺めですね」

「ああ、夕日がきれいだな」

俺達は今、大和とガクトとともに秘密基地の屋上で夕日を眺めていた。

「だろ。えーと、目の前の工業地帯が……」

「海浜工業地帯。太平洋ベルトの中核だな」

ガクトが説明できないと判断すると即座に大和が代わりに説明してくれた。

「あゝ、それだそれ」

「というか、ガクトってまゆっちと一緒にいること多いよね」

「なぜだか俺様に質問してくることが多いのだ。」

「もてるじゃん。ついにきたぞガクトの時代が」

「俺様の時代か。それはいい世の中だな」

「この時代は後に黒歴史と言われるとは、このころのガクトは思ってもいなかった」

「ナオ！変なナレーション入れるんじゃないやねえ」

「ナオって意外とSだよな」

「まあ、年下趣味じゃないからどうでもいいし」

このグループにはアナル軍師を筆頭として、レズ、存在が放送禁止、年上好きでM、女装趣味、女自体に興味がない　　と、まともな性癖の奴が少ないんだあああああ。

「わああ・・・、ここから真下を見るのは勇気が要りますね」

まゆっちを見てると和むな！。まゆっちも変人だけどねw。

「落ちたらdieな高さだね。ハードだな」

訂正。まゆっちが変なんじゃなくて、変なのはあの馬だ。

「そろそろ、中に戻ろうぜ。もうキャップ以外皆集まっただろう」

ガクトのその台詞で俺たち4人プラス1匹は、秘密基地へと戻った。

――秘密基地

「っで、この棚には将棋や囲碁とかがおいてあるんだよ」

「凄いな、なんでもあるんだな、ここは」

俺たち4人プラス1匹が戻ると、クリスはモロに手案内を受けていた。

「お、もてなしを受けてるな、クリス」

「すごいな、なんか俺の部屋より豪華だ」

俺は買いに行くのが面倒で、何も買っていないため、備え付けの家具と服と生活必需品以外ほとんど物が無いのだ。

「皆で持ち寄ったからな。3人も自由に持ち込んでいいぞ。」

あと、ポップコーンだけは常備してある。たんまりとな」

「……ここは漫画の棚か」

「皆がそれぞれオススメを持ってきたから面白いのばかりだよ。持ち出しも自由だから」

「電気系統はクッキーにつなげておきな。電力源だからよ」

「携帯ゲームもおいてあるんだ。これは僕オススメのゲームだから面白さは保障する。ネタソフトも抑えてあるよ」

「あたしもモンハンとゴッドイーターぐらいはできるわ」

あれ？2009年にゴッドイーターって出てたっけ？

まあいいか。気にしたら負けだな。

「うん、・・・で？」

「え」

「この場所はどういう意味があるんだ？」

ついに発動しちゃったよ、クリスのKYが。

「ん？」

「遊びたければ家でもいいだろ。わざわざこんなところに来る意味が分からないぞ。」

「少なくとも建設的な行為ではない」

「空気が……一瞬にして変わった。」

「やめておけ、クリス」

「率直な意見だ、直江大和」

「このような廃ビルはとっとと取り壊すべきだな」

「ついに言ってしまった、言っではならないことを。」

「お前、死ねよ」

「っ!？」

「よくも……よくも好き放題言ってくれたなああああああ」

「！！！！！！！！」

「京、やめろ！」

大和の言葉と同時にモモ先輩が京を押さえつけていた。

京は危うくクリスに飛び掛るところだった。

「クリスもいい加減にしろ」

「では、お前はこのビルが無駄だとは思わないのか？ナオ」

「確かに一般的に見たら不必要かもしれない。でも、こいつらにとつてここは大切な場所なんだ。お前はモロや京や大和の眼を見てそれが分からないのか？」

「分からないだろ、お前には！！この空間がどれだけつ……………どれだけ大切なのか！！！」

「え……………え？」

クリスは普段冷静な京の豹変に驚いていた。

「だから、こんな新参者入れるのは嫌だったんだ。

壊すべき？よくもそんなことをこの場所で言ってくれたな！！

何様だと思っただけやがる！！！」

「京、待て！話を……」

「さっさと帰れ！お前なんか仲間でもなんでもな……」

「京！」

京が最後の1文字を言い終える前に大和は京を抱きしめた。

「落ち着け」

「大和……だつて、こいつ、この場所を、侮辱した。

否定したんだ、許せないよ！！」

「大和、もっと強く抱いてやれ」

「うん。京、もういいから」

「うううううううう……」

場が静まり返り、京のうめき声だけが響いている。

「な、何だ？何が気に障った？

私は正しいことを言ったはずだが……」

「お前まだ分からないのか？

俺だってこのグループに入ってまだ1週間もたってないが、それでも皆のこの場所、秘密基地を大切に思っているのが痛いほど伝わってくるぞ……！

正しいだと？何を以って正しいと言い張るんだ？」

「だって、普通に考えて……」

「もういいよ、ナオ。ナオの気持ちは僕達に伝わったから。」

クリスはまだ自分が正しいと思うんだ？」

「あ、ああ」

「じゃあ、本当にサヨナラだね」

「え？」

「仲間にはなれなかったね、残念。

でも学校では普通に話そうよ！

気をつけて帰ってね」

モロは見た目だけは笑顔だが、内面では京に劣らないくらい怒っているのがよく分かった。

「（マズイ。モロまで切れてる）」

なんか今、大和の心の中が読めたぞ？

「あ……う……ええっと……」

まゆっちは今の状態に対応できていなかった。
何もできずにオロオロしている。

「理由を言ってくれ！！納得できない！！」

「私が言っただろ。」

クリ、お前うざいぞ」

「え……………」

「意味がないっていうのも建設的ではないってうつのもの、全てお前のものさしだろうが！！」

私達は理屈ではなく、好きでここに集まってるんだ！

誰に指図されようがやめるつもりはないぞ」

「自分はただ……………」

「もうよせクリス、ここではお前が悪い」

「ワル……自分が悪だと!？」

「ああ、この周囲の空気が分からないか？」

「悪などでは絶対でない!!」

確かに自分のものさしではあるが、普通の人も自分と同じ意見のはずだ。なぜそれが悪になるか分からないな!!」

「普通の人？お前と同時に加入してきたナオはお前とは反対の意見だが？」

「それは……、ナオの意見がおかしいんだ」

はい？この子ついに変なこと言い出し始めましたよ。

「お前はな、頑固すぎんだよ。」

いい機会だ、反省しろよ」「お前に説教されたくはないな。

この機会だ。自分も言わせてもらうが、大和の行動の数々、策といえど聞こえはいいが、お前はただ、せこいだけじゃないか」

「ああ、せこいし、ずるいし、卑怯だぜ」

「!？」

「ただの褒め言葉に過ぎないな、クリス。」

勝てばいい、それだけだ」

「見下げ果てたな。それを肯定するとは」

「大和は仲間ができるだけ無傷でいられるように策を出しているんだよ、クリ。」

まあ、基本せこいっていうのもあるがな」

「仲間のために?・・・いまひとつ理解できない」

「あ、あの!私ごときが口を挟んで恐縮ですが、皆さん落ち着いて」

「おい、まゆまゆ!私もそろそろ怒るぞ」

今度はまゆっちが対象に……。

「え!？」

「一人だけ後輩だから丁寧語でしゃべるのは分かるがな、いちいち私ごときが　とか言っな！」

「だな、お前キャップが言ったことを理解してねーだろ。

さっき俺も思った、お前人の顔色伺いすぎだ。

度が過ぎると俺様といえども不快だぜ」

「すみません、すみません」

まゆっちが必死に謝っている。っていうかまゆっち、とぼっちり受けてるだけだよね。

「……………さっきから意味不明だ」

「さっきの何が意味不明だ？おバカ娘」

「ば、馬鹿!？」

「クリス、お前にとって何か大切なものを言ってみろ」

「持ち物？」

「何でもいいから言ってみろ。物理的なものだぞ」

「・・・・・・親からもらったぬいぐるみなどか」

「俺はぬいぐるみのよさなんて分からないな。部屋がかさばるから捨てちまえよ」

「貴様!?!?!」

クリスは凄い迫力で大和に詰め寄った。

だが、大和も負けじと睨み返す。

「お前のさっきのモノマネだ、馬鹿!」

「何だと」

「お前のぬいぐるみが俺たちにとってのこの場所なんだ。

誰が何を大切にしているかなんて人それぞれだろ。それを侮辱していいはずがない」

「・・・・・・・・！」

やっと気づいたようだな、この馬鹿娘は。

「まさにそれだぜ、俺様が言おうとしたこと」

「・・・・・・・・そうか」

「それだけ大切な場所だったんだな・・・・・・・・。」

自分の今の怒りと同じ気持ちだというならば、さぞ先ほどの発言は腹がたっただろうな。

椎名京。皆。すまなかった。謝罪する」

クリスはふかぶかと頭を下げた。

「あ、あの、私もすみませんでした。」

まだまだ、勉強不足です。

でも、それでも、私は皆さんと一緒にいたいです」

あのまゆっちがキツパリと主張した。

「自分も今のような発言をしないことを誓う。だから自分もここに
いさせて欲しい」

この感動の場面をぶち壊したのは、

「おっーす。いやいや聞け聞けお前達！俺の運たるや、まさに豪
運といってもいい領域だぜ。ガラガラまわしまくって豪華商品GE
Tだ！」

リーダーであるキャップだった。

「ささ、寿司の残りをつまみつつも皆で俺の偉大さを祝ってくれ！
まあ今日はネタ卵だらけだけだな。」

「……つてあれ？なんだこの空気？」

「ずるいぞう大和。なに俺がいない間に青春っぽい気まずい雰囲気
になってるんだよ……！」

「お、落ち着け。全て話すから。実は……かくかくしかじか」

「ふーん、なるほどね。」

「つてか、もう話解決してるじゃん。」

「クリスマスもまゆっちも謝ったからそれで終わりじゃね？」

「ん、まあな」

「ま、1回くらいこういうのは仕方ないわな」

「寛大な処置じゃないかキャップ。私と同意見だ」

「京、機嫌直せ。なっ？」

「……っん」

「あーあ、いじけちゃった。ケアは大和に任せる」

「ああ……」

「とりあえず、どう皆？」

今ちよつと気まずい思いをした関係を修復する意味で、連休旅行に行かないか？」

「旅行!？」

一番最初に食いついたのはワン子だった。犬だけに。

「いきなり発言したなお前。ナオよりも空気だったのに」

だって、ね。この空気にずうずうしく入っていけないじゃん。

自分でも空気だったことぐらい分かってるよ（泣）。

「いや、私もさっきクリに言おうとしたんだけどね、直江さんちの大和君がアイコンタクトで自重って」

「さらにややこしくなりそうだったからな」

「で、旅行ってどういうことなの？」

やっと発言できたー。わーい、わーい。

注　こいつ、一応主人公です。

「ふふ、商店街のくじ引きで当ててきたのだ。

じゃーん、2泊3日箱根旅行団体招待券!!」

「す、すすすぎる・・・」

「それ何位？」

「2位。ちなみに他は全部ティッシュでしょんぼり」

キャンプの視線を追うとそこにはポケットティッシュが詰まった袋があった。

「ほんと、絶対守護霊ついてるよねキャンプは」

「霊の話はそこまでだ、ワン子。」

それにしても2泊3日で箱根旅行か・・・ありだな。タダだし」

「箱根なら近場だし、手頃だしね」

「で、キャンプいつからだ？」

「3、4、5日だな。明日準備して明後日出発するぞ」

「よかった、姉さんの試合とかぶらなくて」

「まあ、試合とかぶっていたら一瞬でけりをつけていくがな」

「山で駆け回れるのね。いい修行ができそうだな」

「指示通り連休明けてあるだろ？」

「ああ、バイトも入れてないぜ。」

明日姉さんの試合を皆で見に行くだけだ」

「クリスマスも京もいいな？っていうか来い」

「まゆっちもナオもだぞ、もちろん」

「はい、是非」

「ああ、旅行なんて久しぶりだからな」

確か最後に旅行に行ったのは・・・中学の修学旅行のときかな。

「箱根温泉といえば有名だからな。楽しみだ」

「京もいいな？」

「…………ん(コクッ)」

「うーし、決定だな。」

それじゃあ、決定したところで今日は軽い寿司パーティーだ」

「うおっ、ネタが卵だらけじゃねーか」

「卵は栄養あるから好きよ、モグモグ」

「あれ、確か1日に卵を1個以上とるとこれコレステロール的にやばいような…………」

「ナオ、あんたもウンチク披露してないで食べなさいよ。なくなっちゃうわよ」

「うん、おいしいな…………」

「はい、おいしいです」

「今日は互いに注意されてしまったな」

「はい。次は同じことをしないように注意しましょう」

ここに新入り2人の友情が出来上がっていた。

というか、俺も新入りだから仲間に入れて欲しいんだけどな・・・
orz。

「・・・・あれ？この写真、皆さんが小さいころの写真ですか？」

その写真には子供が7人ととても大きな花が1輪写っていた。

「おー。7人そろってるだろ」

「皆、面影があるな・・・」

「背の高い花ですね」

「ふふん。リュウゼツランって言うのよ」

「犬が知っているとはよほど大事な話があるのか？この花には」

「それはね……………」

次回に続く

次回予告

大和「ホント一時はどうなるかと思ったぜ。でも皆仲直りしてくれてよかった。

そんなときにまゆっちから写真についての質問をされ、俺はリュウゼツランについての昔話を語りだす。

そう、それは俺たち7人の心の中にある約束に関する物語。

次回、第7話 初めての金曜集会〜約束編〜。

次回もナオの出番は少ないぞ!」

6話 初めての金曜集会対立編（後書き）

作者の八重桜です。

まあ、今回はリュウゼツランの話まで書くつもりだったんですが、長くなりそうだったので2つに分けました。

今回はリュウゼツランについての昔話、次々回はVS百代編 になる予定です。

さて、今回から若干バージョンアップしたわけですが、いかがだったでしょうか？

よかったらそのあたりも感想に書いてくださるとうれしいです。

この作品、読んでくださる方は多いんですけど、感想を下さる方が（ry。

ということで感想お待ちしております。

それではsee you again.

7話 初めての金曜集会〜約束編〜（前書き）

62000pv、9000ユニーク、お気に入り件数90、総合ポイント220pt突破!!!!!!

ついにこの小説を書き始めたときの目標だった50000pvを突破しました。

これも愛読してくださってる読者の皆さんのおかげです。

これからもがんばりますのでご愛読よろしくお願いします。

曲情報

・OPテーマ

前回と同じ

詳しい情報は前話をチェック！

・EDテーマ

前回と同じ

詳しい情報は前話をチェック！！

7話 初めての金曜集会〜約束編〜

前回までのあらすじ

由紀江「まさか一触即発の喧嘩になるとは思ってもいませんでした。でも、みなさん、最後には仲直りしてくださってよかったです。私ももっと自分に自信を持たなくてはいいけませんね。」

それにしてもあの写真は何なんでしょう？」

以下大和の回想

俺たちは、空き地を秘密基地として使っていた。

なかなかの広さで皆で遊ぶにはうってつけ。

皆といってもこのころは京はまだメンバーではなかった。

故にメンバーは、キャップ、俺、ガクト、モロ、ワン子、姉さんの6人。

「この縄張り、土管がいい味出してるよなー！」

「なんといっても広いわ」

「他には何もないけどね」

「十分だ」

（一応説明しとくと、上からキャップ、ワン子、モロ、ガクト）

居心地はいいが、さほど特色のない空き地だった。

が、ある日その空き地で、

「なあなあ、おかしくねーか？この草大きくなりすぎ」

「あー、そう言われればそうね」

「今まで2メートルくらいだったのに」

「3メートルぐらいありそうだね。背伸びてるね」

「夏だから成長してるんじゃない？

そんなアタシも成長してるわ！」

「はは、そうか？ちんちくりんじゃねーか」

「ガクトがどんどん高くなっていくんでしょ！」

「ワン子も言い返すようになったね」

「私に弟子入りしたのだから当然だ」

モロの言うとおり姉さんに弟子入りした、つまり川神院に入っ

らワン子はなんというか元気になった。昔は俺たちの背中に隠れているような子だったのだから今と比べると大違いだ。

「うん、あたし強くなる」

「よしその意気だ（頭なでなで）」

「まあこの草は成長期ってことで」

「俺様もこの草くらい高くなりたいぜ！！」

3mの人間とかありえないだろ。やっぱりバカだな、ガクトは。
つか、俺まだ一言もしゃべっていないんだが……。

京、大和、新入り3人はまだ台詞がありませんwww

――2ヵ月後 8月

「オイオイ、この草もつ5m超えてるよ！」

「実は妙な生き物じゃね？」

ある日ワンの姿が消えた。するとこの草はワンの身長分伸びていた」

「怖いでしょうが！」

「ある日ガクトの姿が消えた。するとこの植物が花をつけたとき、そこにはガクトの顔が！」

「キヤー、気持ち悪いわ！」

ワン子がゴロゴロとたたうつ。

「ぬぬ……だが物理的に殴れるなら化け物も平気だ」

「あれ、姉さんお化け苦手？」

やっと、俺の初台詞！

「ふん、うるさいな。ちょっとだけだ」

「まあ確かに殴れないモンね、ああいう類は」

「まだミサイル打ち込まれたほうがましだ」

「いや、それはどうなのさ」

このころから姉さんは無茶苦茶だった。

「こらガクト！学校の先生からちゃんと宿題させるようにって電話がかかってきちゃったじゃないか！！」

「あ、ガクトのお母さん。ちょうどいいや、聞いっせ」

事情説明中……………

「この草はあれだよ、竜舌蘭じゃないのかい？」

「リュウゼツ……………ラン」

「それにしても、こんなレアな植物がこんな空き地にねえ」

「ほう、これがセンチュリー・プラントだったのか（このごろの大和はニヒルに毒されています）」

「なんだその漫画の敵キャラのような名前は」

「ガクト、そんなことも知らないのか。」

「気候にもよるが、数十年に一度しか咲かない花だ」

「あんた本当に小学生かい？大和ちゃん」

「フフ、高校生だったらあなたを口説いていた」

「この子は悪党か芸人かのどちらかになる気がするねえ。」

「まあ、百代ちゃんのおじいさんがもつと詳しいんじゃない？」

「では呼んでみよう」

「そういうと姉さんは息を吸い込んだ。」

そして、俺たちは反射的に耳をふさいだ。

「ボケはじめてのブブゼラじい!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

「モモ。お前いい度胸しておるのう」

「一瞬で来ちゃったよ。この一族は全く……」

モロだけではなくほかのメンバーもあきれていた。

再び事情説明中……

「なるほど、これはまさに竜舌蘭じゃのう。

ありゃ50年前かの。確かに咲いておった」

「50年……壮大だな。人間50年と同じ年数か」

「この花はその子供ってところかの。咲いて枯死する前に子株を根

元の近くに作り残すと聞いたが、後は分かん」

「分かん？」

「この花は個体変異が大きくて、変種も多いから分類は難しいんじゃない。咲く年期も花によって違うし。」

まあ、明後日には黄色い花が咲きそうじゃのう。

おっとルーと将棋の途中だったわい」

そういつた刹那、鉄心はその場から消えていた。

「明後日開花かあ。楽しみよね楽しみよねえ」

「まあな。粋なイベントがやってきたもんだ」

「みんなで写真とろうよ」

「ガクトが写真撮影する係な」

キャップいままで黙りすぎでしょ・・・。

「俺様が写らないことをどうするつもりだ」

「卒業アルバムの欠席者みたいに上に」

「そんなネタ的においしいのはキャップにまわすぜ」

「確かにおいしいな・・・。」

「そこ考えるところなんだ・・・」

「クク。皆子供だな。まあ悪くはないけど」

このころの俺は（ry

「・・・」

「おい、またこっち見ていたな」

そこにいたのはこそそこそとこちを見ている京だった。

「……………う……………あの……………」

「なんだ？目を見る目」

「……………私も……………」

「どうしたキャップ、入り口まで走って」

「っ」

「あ、おい！行っちゃまうのかよ」

「なんだあれ？」

「分かんねー。俺に話があるみてー」

「うわ、まさか椎名に好かれてるんじゃない？」

「ばっ、ふざけんな！ちげーよ！」

「はは、冗談だよ。椎名菌だもんな」

「いや、そんなの関係なく女とかやだろ」

「ふっ、子供だなキャップ」

「そのアニメキャラっぽい話し方、どうにかならないのか？」

そして、いよいよ花が咲こうとしたその前夜、強烈な台風が関東に上陸した。

キャップから招集がかかる。

「花がきちんと咲けるように保護するぞ！」

「全く……この台風の中無茶苦茶だ。」

なあ、竜舌蘭は普通に栽培されてるらしいぜ。

今回だめでも、どうかで見ればよくね？」

「あの花は、あの花だけなんだ。代わりなんてねえ」

キャンプはどこかの主人公が言ってそうな台詞を恥ずかしがることなく言っていた。

「空き地で咲いてるあの花を皆で見たいんだ!!」

「アタシも！」

「分かってるさ、俺だって。でも危険すぎるってことだ。」

こうなったら、姉さんよろしく頼みます」

「ああ、私が皆を守る、必ずな」

こちらも負けじとカッコいい台詞を言っていた。

「なんと心強い」

「姉は心強いものだ。安心して任せろ」

一子やモロは吹き飛ばされないように、しっかりと縄で姉さんと？
がれていた。

時々、突風で住宅建築中の工事現場から木材が飛んでくることがあ
った。

それを姉さんは苦にもせず打ち落としていった。

「守る人数は5人。何がどこから飛んでくるか分からない。突風も
十分危険。」

フッフ、面白い！」

この大変な状況で姉さんはなぜか笑っていた。

俺たちが一丸となり空き地に向かうとそこには先客がいた。

「・・・・・・・・・・あ」

「！？椎名？椎名か？」

京は土管の影で縮こまっていた。

「何でこんなときに歩いてやがる！？」

「み、皆、こ、此花が咲くのが楽しみだって・・・。」

でも嵐きたから・・・その・・・」

「聞いてたのか」

「お前かんけいねえだろ。危ないから帰れ」

ガクトの口調は強いものだったが、それは京を心配しているからこそ言っているのがよく分かった。

「というか、よく無事だったな」

「でも」

「いいよ、手伝え！人手は多いほうがいい。」

それに今一人で帰るほうがよっぽど危険だぜ」

「それもそうか」

キャンプの意見にガクトも賛成したようだった。

「姉さん、守る人数増えたけど・・・」

「川神百代だぞ私は」

なんら問題ないらしい。

俺たちは嵐の中、花卉が吹き飛ばされないようにビニールで覆ったりして保護した。

やはり、身体的に優れた姉さんの存在が大きく、作業は素早く進ん

だ。

「よし、まずはワン子と椎名を家に帰すぞ」

俺は最後の一人として、姉さんに送られて家に帰った。

「風呂はいつて、早く寝ろよ」

「姉さんも嵐がやむまで家にいなよ」

「いいさ。一人で川神院まで帰る」

「でも」

「危ないよな。でもそれがいいんだ。ゾクゾクする」

そついうと姉さんは走って行ってしまった。

こんなときでも姉さんは姉さんだった。

その後親に無断でこの嵐の中で外出したことがバレて、死ぬほど怒られた。

そして、次の日、竜舌蘭は見事に黄色く咲いていた。

「わーわー。これが50年に1度なのね」

ガクトに肩車してもらったワン子が騒いでいた。

「おいおい、あんまり肩の上で暴れんなよ！つたく」

ガクトを含め皆、ワン子には甘かった。

「・・・・・・・・・・正直、待たせるわりにはそこまできれいな花で

もないな」

それは俺も思ったことだった。

「ま、50年に1度なら感慨深いかな」

「手触りとか普通の草なのにね」

「あんまりさわるとかぶれるかもよ」

「うわわ、マジで？」

「コラア、俺様の手に擦り付けるなあ！！」

「俺たちが守り抜いた花だ！放っておいても自力で咲いたなんて考えはこの際なしで」

「図々しいけどそっちのほうが楽しいよね」

「まったく、本当に仲いいねあんたら。」

ほら写真取るんだろ。パシヤリといくわよ」

そう、俺たちは麗子さんに写真を取ってもらえないかと頼んだのだ。

「よし、お前ら集合!!!!写真だ写真!!!!」

キャップの命令で皆は一箇所に集まった。

「!。」

お前も来いよー」

「!?!」

キャップは空き地の入り口にいた京に声をかけた。

「・・・・・・・・・・」

しかし京はもじもじしている。

「大和、お前に怖がっているフシがある。」

お前が連れて来い」

「マジで？」

「マジで」

「……………まあ此花に関してはがんばってくれたからな」

おそらく俺たちの仲間に入りたいのだろう。

「花見事に咲いただろ。」

記念写真取ろうぜ、俺たちと」

「……………え……………え……………」

京はどう反応すればいいのか困っていた。

「嫌じゃないなら来なよ」

俺は京の手をとって、強引に引っ張った。

「おお、その子新入りかい？さあとるよおー。」

はいチーズ！！」

その後俺たちはその花を見ながらしゃべった。

「資料の花より真っ黄色だな、この花」

「竜舌蘭の中でも変種っぽいな」

目に焼きつくような、純然たる黄色の花弁だ。

花の形はさほどではないが、色が美しい。

「ね、またこの花を見るとしたら50年後？」

「だな、私達は60歳くらいだぞ」

「じーさんだな」

「私は壮絶な修行により若々しいままだろうが」

「姉さんの場合やりかねないんだよね」

「また皆で一緒に写真をとりたいな」

言ったワン子以外の皆もそう思っていることだろう。

「はは、面白いな。50年前の今と同じポーズでな」

「俺、ぎっくり腰になってたりして」

「椎名も元気だったら、そのときは来なよ」

「うん、うん」

50年後また皆で、この花と一緒に写真をとる。

とても簡単なことだと俺たちは思っていた。

——回想終了——

「………というお話だったのさ」

俺たちは大和の昔話を真剣に聞いていた。

「なるほど、そういう経緯の写真な訳だ」

「あー、昔のこと思い出しそう。さらに落ちるー」

「と、とにかくー!」

大和、逃げたな・・・。

「また見ようって話になったのさ、その花を」

「その空き地、埋め立てられてしまったけどな」

「でもあたし達でこの花の子供をこのビルの下の草地に移したのよ
!」

「根がしっかりしてるから大変だったよ」

なんか、モロが言うと本当に大変そうに聞こえるのはなぜだろう？

「後で見せてやろう、まだまだ小さいがな」

「50年後か・・・いい話です」

まゆっちは今の話を聞いて感動したようだった。

「もちろん50年後のそのときには、まゆっちもクリスマスもナオも来いよ!」

「ああ」

「はい、喜んで」

「喜んで行かせてもらう」

俺たち新入り3人は同時に返事をした。

こうして今週の金曜集会は終わった。

大和「翌日に控えた箱根旅行の買出しを終えて姉さんの試合を見に行った俺たち。」

今まで不明だった対戦相手が今明らかに・・・ってナオ？ナオが武道四天王ってことなのか？

試合が始まり2人による壮絶な戦いが繰り広げられる。でも次第に姉さんが有利に……。もう勝負はついたかと思ったら、ナオはいきなり日本刀を捨てた。そしてそれと同時に川上の上空には雷雲が集まってきた。

次回、第8話 タイトル未定。

ここ2回ほどほとんど出番がなかったナオがついに主人公らしさを見せる……！」

7話 初めての金曜集会〜約束編〜（後書き）

作者の八重桜です。

なんだかんだで更新まで1週間かかってしまいました。まあ、原因としてはマジ恋の世界の最終話までのコンセプトをかくにんしていたからなんですけど……。

先に言つとくと、いくつかのイベントの時期が変わります。

川神大戦は原作では8月31日でしたが、この小説では7月4週目に。

それに伴いKOSは冬に開催されます。

それ以外のイベントの変更は未定ですが、変更される場合もあるのはご了承ください。

感想はいつでも受け付けております。というか感想くれると私は歡喜します。

最近感想が少なくて落ち込み気味なんですよ（泣）。

また、アンケートはまだまだ受け付けますが、現段階では次の世界はD・C?の世界で考えています。

まあ、まだ考えているだけなので他の作品でもかまいません。

また、好きなキャラについてはどんどん投票して欲しいです。現段階では私が好きなので一子ルートは確定しております。

それでは

see you again.

8話 武神vs鬼神（改訂版）（前書き）

この小説は、以前投稿した8話の訂正版です。ナオの決闘シーンを第三者視点で描きました。

9話も今日か明日には投稿できます。

曲情報は前回と同じです。

8話 武神VS鬼神（改訂版）

あらすじ

菜月「失ったのは自由に生きる権利、手に入れたのは本物の強さ。

物語はVS百代戦へと突入。

武神VS鬼神 始まります！」

人は何のために力を求めるのだろうか？

何かを守るため？それとも何かを奪うため？それとも生きるためなのだろうか？

だが、その男の子はどれでもなかった。

そう。その男の子は自分の意志で力を求めたわけではないのだ。

その男の子は気づいた時には、すでに武術を習っていた。いや、習わさせられていたというほうが正しいのかもしれない。

父親が名高い武道家であった影響なのだろうが、彼は常に勝利を求められた。友人と遊ぶ時間のほとんどを鍛錬に費やし、彼は様々な競技で様々な大会を優勝してきた。

それは、彼の両親が死んでからも同じだった。

いや、両親が死んでからより一層鍛錬に費やす時間が多くなった。父親の顔に泥を塗らないために、何かに取りつかれたかのように鍛錬をこなした。

そして、ついに彼は世界チャンピオンでさえも倒すほどになり、それなりの名誉と栄光を手に入れた。

しかし、彼はその代わりに多くのものを失ってきた。

友人といえる人物はあまり多くなく、また、他人と遊ぶことなどめったになかった。

そう、彼は自由に生きる権利を失ったのだ。

それは彼がピンチに陥った時に使う戦闘スタイル、ライドクコブ頼独孤無にも表れている。

俺と京は今現在、明日の旅行に必要なものを買いに来ていた。

「それにしても人が多いな」

「まあ、モモ先輩の試合が見れるなんて珍しいからね」

そう、俺たちは姉さんの近くにいるから姉さんの戦いを見ることができるが、普通の人々は滅多に姉さんの試合を部外者が見ることができないのだ。

だからこそ、今日の試合を一目見ようと人が集まってきているのだろう。

「俺たちもそろそろ場所を取っておいてくれてるキャップたちと合流するか」

「そうだん。もう少ししたらもつと人の流れがすごくなりそうだし」

俺たちは人がもつと多くないうちに川神院へと向かった。

「おーい！！大和！京！こっちだ！！」

俺たちが川神院に着くとすぐにキャップたちに声をかけられた。

キャップたちは一番いい席、決闘場から一番近い席を取っていた。

「お疲れ、キャップ、ガクト、モロ。」

それにしてもよくこない席とれたね」

「当たり前だ！昨日の集会の後からずっと並んでたからな！」

「コミケよりも早く並ぶなんて思わなかったよ」

「ホント、キャップたちは無茶するね」

京、あいつらをそんな哀れんだ目で見ないでやってくれ。

「それにしても対戦あいてやまだ発表されてないの？」

「ああ。どうやら試合開始まで発表しないつもりらしいぜ」

それにしてもなんで、ここまで対戦相手を隠そうとしているのだろうか？

「これより挑戦者対川神百代の死合いを始める」

ついに試合開始の時刻になり川神鉄心の声が川神院に響き渡る。決闘場の内側には修行僧たちが外への被害を防ぐために結界を張っていた。

だが、いまだに対戦相手発表されていなかった。

「西方 武道四天王 川神百代！！」

「ああ！」

まずはじめに姉さんの名前が呼ばれた。

そして次は今まで不明だった対戦相手の名前だ。

「東方 武道四天王」

鉄心はそこで一度声を止めて、

「本郷直孝」

ついに対戦相手の名前を明らかにした。

「はい！」

川神院から日本刀を構えたナオが決闘場へと歩んできた。

しかし、いつもとは比べ物にならないほどの気をまとっていた。

「あの気量は半端じゃない。気量だけだったらモモ先輩と同レベルかも」

「というか、なんで対戦相手がナオなのよ。」

「っていうかナオが武道四天王ってどういうこと？」

「やっぱり、あいつは面白いやつだぜ」

「松風。あの刀、相当な業物ですね」

「軽く100万は下らないだろうZ E」

「あいつ、そんなに強かったのか……。男として戦ってみたいぜ！」

「貧弱で武道とは縁のない僕ですら気を感じとれるなんて……」

ほかのみんなの反応は様々だった。

「東方 武道四天王 本郷直孝！」

俺は自分の名前が呼ばれたことを確認すると決闘場へと向かった。

観客席からの反応は多種多様で、俺の大量の気に恐れているもの、状況に全くついていけないやつなどがいた。

「まさかお前が新たな武道四天王だったとはな」

「いや、偶然勝てただけですよ」

「偶然勝てただけのやつが私に挑んでくるとは思えんが？」

「私語はそこまでじゃー！！」

両者、準備はいいかの？」

「ああ」

「大丈夫です」

「では、いざ尋常にはじめい……！」

その声が聞こえるとともに、ナオとモモ先輩は空中でぶつかっていた。

ナオは日本刀、モモ先輩はもちろん素手だった。

ナオは目に見えない速さで斬撃を打ち込むが、モモ先輩はその斬撃

を次々と受け流す。

「いいぞ、久々に面白い勝負ができそうだ。

川神流奥義 星殺し!!」

モモ先輩のいた場所から超威力のレーザーが放たれた。

「本郷流 終焉の宴 歪」

ナオはそのレーザーを自分の気によって重力を変え、レーザーの進路を変え、レーザーはほかの方向へと飛んで行った。

だが、その隙についてモモ先輩はナオに拳の乱舞を浴びせてくる。

「本郷流奥義 竜巻流星剣!」

ナオは奥義を使ってその拳を相殺させ、反撃として再び剣の斬撃を浴びせた・・・はずだったが、

「その攻撃はもう見切った!」

ナオの剣の斬撃はモモ先輩のシラハドリによって止められた。

そして

「川神流奥義 無双正拳突き!!」

モモ先輩の必殺技ともいえる一撃をモロにくらってしまった。

そのままナオは地面へと叩きつけられる。

ナオの口の中には血の味が広がっていた。

だが、ナオはそれぐらいでは倒れなかった。

「おつ、今をモロに受けてまだ立ち上がれるのか……。本当に面白いやつだな、ナオは。」

それでこそ倒し甲斐がある」

「俺はモモ先輩を倒すためにこの試合に挑んでますから」

「いい心構えだ。だが、無理だな。」

私は無敵だ!!」

「わかりませんよ、だって……………」

そのセリフを言い始めた時から、ナオの上空には無数の雷雲が立ち込めていた。

そして、

「万里の長城よりも高き鉄壁の壁、本郷流究極技　ライドクコブ！
！！！」

そのセリフを言い終わると同時に雷が落ち、その瞬間、ナオは今までは比べ物にならない量の殺気を解放した。

「この殺気は……………」

ナオの解放したや大量の殺気に、さすがのモモ先輩も驚いたようだった。

「さて、次はこっちから行かせてもらいますよ」

その言葉と同時にナオはモモ先輩の後ろに回り込み、背中を切り刻んだ。

普通の人ならここで試合が終わっていただろうが、モモ先輩の瞬間回復能力によってその傷はすぐに回復してしまう。

「確かに、早いし、強いな。」

だが、私にはこの回復能力がある。

「どうやっても私の勝ちだ」

「それでは試してみますか？」

その挑発的な発言を言い終わると、ナオは自らの日本刀を地面に投げ捨てた。

投げ捨てた日本刀は地面とぶつかり、高い音が鳴った。

そして次の瞬間。2人とも地面をけっていた。

「川神流奥義 無双正拳突き！！！！」

「本郷流奥義 疾風迅雷！！」

お互いの拳が空中でぶつかり合う。

観客からは一部の人以上は、拳の動きが速すぎて何が起きているか理解できていなかった。

そして、そのぶつかり合いでナオの拳がモモ先輩の腹に決まった。

「確かにいいパンチだがこれで終わりだ。

川神流 人間爆弾！！！」

その瞬間、ナオはモモ先輩自身を爆心とした爆発に巻き込まれた。

しかし、これはナオの作戦通りだった。

この一撃で倒したと思わせて、煙が晴れた瞬間にナオが、試合が終わったと思ってるモモ先輩を倒す。

なぜなら、ここにいる全員はナオが瞬間回復能力を持っていることを知らないからだ。

そして、煙が晴れた瞬間にナオはモモ先輩に向かって飛びこんで行った。

これにはさすがのモモ先輩も驚いたようだが、すぐに迎撃の態勢に入る。

これですべては思い通りになった。

そして、ナオは最後の一撃になる技名を叫んだ。

「本郷流 終焉の宴 断罪の鎖^{ギアス}!!!!!!!!!!!!!!」

その言葉と共に、地面から無数の鎖（先に刃がついているもの）がモモ先輩に襲いかかった。

ナオの攻撃に気を取られていたモモ先輩はこの攻撃をガードすることができなかった。

そして両手、両足に鎖の刃が刺さる。

そう、瞬間回復能力は体内に異物が混入しているときには使えない、つまり何かが刺さっている状態では使うことができない。

これこそがナオの狙いだった。

最初は、この大量の気によって作られた鎖のために必要な気を地中に送り込んでいた。

ナオの斬撃が防がれたのも地中に送り込んでたせいで気がなくなっていたからだ。

そして、送り込み終わったら本気を解放し、モモ先輩に爆発技を使わせ、試合が終わったと思っているところに殴り掛かる。そしてあわてて迎撃態勢に入ったところを。背後から作り出した鎖で狙う。

これによって瞬間回復能力が使えないうえに動けなくなる。

「そこまで!!!!!!!!!!!!!!」

鉄心による試合終了の合図が川神院に響き渡る。

観客からは困惑と驚きの声が聞こえる。最強と言われていた川神百代が、いままで名も知られていなかった奴に、負けたのだから。

「ちょっとまで、じじい。私はまだ闘え・・・」

「その状況で身動きが取れず、そのうえ回復もできない状況でどうするつもりなんじゃ？」

「ぐっ、それは・・・」

「あの爆発で試合が終わったと思ったのがお前の敗因じゃ。」

まあ、わしもまさか瞬間回復能力を彼も持っているとは思わなかったがな」

「まだまだ世界は広いつていうことだな。

よし。

おい、ナオ！」

「なんですか？」

「お前はいつまで私に鎖を刺してるつもりだ？

これ相当痛いんだぞ？」

「すっかり忘れてました」

「それにしてもお前が瞬間回復能力を持っているとは思わなかったよ。」

私もまだまだあまいっていうことだな」

「いえ、俺が勝ったのも偶然ですよ」

「偶然では困るんだ。それでは私が偶然に負けたことになる。

私が負けたのはナオであって偶然、つまり運に負けたわけではない」

「???」

「理解できなくてもいい。

だが、次闘ったときは必ず私が勝つぞ、我がライバルよ!!!」

次回予告

ナオ「モモ先輩との試合が終わり、ついに箱根旅行！！」

そついや、だれかと旅行に行くのは初めてだな

そして、また新たな伏線が張られる？

次回 9話 タイトル未定

あと2、3話で川神大戦編に突入だ！！」

8話 武神vs鬼神（改訂版）（後書き）

さてさて、gdgdな文章を読んでいただきありがとうございます。

改訂版にした意味があったのかわかりませんが楽しんでいただけたならば

うれしいです。

予告でもお伝えしました通りあと2、3話で川神大戦編へと突入します。

感想は随時お待ちしております。

それでは

see you again.

- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -
- - - - -

9話 箱根旅行に行こう part 1 (前書き)

祝!!!!100000pv突破!!!!

ついに100000pvを突破することができました。

この小説を読んでくださっているみなさん、本当にありがとうございました。

さてさて、ついに箱根旅行へと出発しました。たぶん、part2、part3は結構長くなると思います。

内容が内容だけに。

まあ、箱根旅行が終わって、川神大戦編に入る前に、またアンケートを取る予定なのでその時はお願いします。

そして、今回から新キャラ登場です。

といってもまだ名前は伏せられていますが・・・。

名前はもつとつくに決まってるんですけどねww。

曲情報は前回と同じです。

それでは本編をお楽しみください。

9話 箱根旅行に行こう part 1

あらすじ

菜月「VS百代戦は直孝様の勝利で終わり、ついに直孝様たちは箱根旅行へと出発。

私もそろそろ休暇でもとりますかね・・・。

そして、ついに新キャラ登場!!」

直江大和 side

ゴールデンウィーク真っ盛りな朝。今日は昼から箱根だ。

「……………にしてもみんな起きてる。早いなあ」

「今日は旅行なんだぞ、直江大和。たるんでるな」

「何言つてやがる。旅行だからこそたるむんだよ」

「まだ旅行は始まっていない。その前に1日のトレーニングノルマを消化しなければならん」

そういうと、クリスはランニングへ向かった。

その後俺は部屋へ戻った。

「ちょっとだけ頭に来たぞ、あの説教娘……………」

考え方がそう簡単に変わらないのも分かるが、いちいち注意されていると精神的に持たない。

俺はやドカリを見ながら、目的を定めた。

……この旅行でもう少しだけクリスと仲良くなろう。

「大和、お前今日の準備ちゃんとしてるのか？」

「キャンプのくせに朝早くね？」

そう、ノックもせずに俺の部屋に入ってきたのは、俺たちのリーダー、キャンプだった。

俺はヤドカリを見ながら、目的を定めた。

・・・この旅行でもう少しだけクリスと仲良くなろう。

「大和、お前今日の準備ちゃんとしてるのか？」

「キャンプのくせに朝早くね？」

そう、ノックもせずに俺の部屋に入ってきたのは、俺たちのリーダー、キャンプだった。

「昨晚から寝てねーよ。だからハイだぜ」

「早く寝ろよ。っていうか昨日いなかったよね？」

昨日、姉さんとナオの試合が終わった後キャップはどこかに消えてしまったのだ。

姉さんとナオの試合といえば、結局ナオの勝利で終わったわけだが、あの後新武道四天王の4人が発表された。

まさかまゆっちまで武道四天王だとは思ってもいなかった。

というか、武道四天王が3人もいる風間ファミリーってすごくない？

「ああ、箱根に行ってたんだ」

??。なんか今聞こえるはずのない地名が聞こえたぞ？

「……………オイ」

「どづした？マイフレンド？」

「今日俺たちが箱根に行くってことは知ってるよな？」

「待ちきれなくてついさー。ほい、お土産のわさびのり」

理由がとってもキャップらしかった。「帰ってこないで箱根で待つてればいいのに・・・」

「行く前の電車の中が楽しいんじゃないか！ー！！」

「そこで逆ギレすんなよ」

「じゃあ、俺はみんなで遊べるものを用意してくるからな」

ヒヤッハウッと叫びながらキャップは去って行った。

「・・・・・・・・・・張り切ってるなあ」

台所では京とまゆっちがおにぎりを作っていた。

「うーす」

「ちゃおす」

「大和さん、おはようございます」

「それ、もしかしてお弁当？」

「はい！行くときお昼ですからちようどいいかと！」

「素敵だね。ありがとうまゆっち」

「いえいえ！あははははは」

まゆっちは照れ笑いしながらおにぎりを作っている。

「安心するといい。大和のは私が作ってる」

「今握ってるやつのこと？中に何入れるの？」

「愛」

「そういうことは聞いてないの」

「ハバネロとわさびと辛子を同時に混入させようかと思う」

「そんなおにぎり史上例にないからね」

「ふう、これでひととおり握り終えましたね」

「見事な手際。でも詰めが甘いよ。この粉状の唐辛子をまぶさない
と」

京……お前はこれのおにぎりをすべて無駄にするつもりか？

「ええっ！辛すぎませんか？」

まゆっちも真に受けてるし……。

「いけるって。それ混入開始」

「やめておけ」

「はい、やめます」

「俺がいてよかった。昼飯が惨劇に変わるところだった」

ここで携帯とにらめっこしながら監視しておこう。

深夜に来ているメールを返信していく。

メールの内容の半分くらいは姉さんが負けたということの真偽についてのものであった。

余談だが、武道家の間でも川神鉄心と同じくらいに実力を持つ史上最強の武道家であった川神百代が負けたということは衝撃の事実だったらしく、川神院への問い合わせが絶えないらしい。

「みんな夜更かしが多いな」

「あの、……い、今、携帯を操作しているのはお友達とご連絡

とかですか？」

「うん。メールだね。友達というか知人程度だけど」

「・・・・・・・・・・うらやましいです・・・・・・・・」

「そう？大和は対応人数が多くて大変そう」

「そう思うなら京は送るメールの数を自重してくれ。」

今からお風呂、とかいうメールが来て俺はどう返せばいいんだよ？」

「どこから洗うの？ハアハア・・・・・・・・・・とか聞けばいいのに」

「ふつつ聞かねえよ！」

「モモ先輩は聞くよ？」

「あの人はどう考えても普通じゃないから」

精神的にも身体的にも。

身内は変態さん大集合だった。

「まゆっち、君は普通だよな？」

「わ、私ですか？ まとも……だと思います、ハイ」

「まゆっちは二重丸の優等生だよ。オラが保証する」

やっぱり変だった。

川神から箱根湯本までは電車で一時間弱。

川神から特急踊り子に乗れば一本だ。

「いや、僕たち10人でしょ。たぶんモモ先輩はナンパに出かけるから9人になって、こういう特急列車は4人席がデフォ。4×2＝8で一人あふれると思ったんだけど、ガクトまでナンパに出かけてくれたおかげで結果オーライだね」

そういえば、あれだけテンションが高かったキャップといえ

「zzz・・・さあ冒険だぜ・・・zzz」

「あれだけはしゃいどいて電車で寝る？フツー？」

「というか、電車の中で寝るならそのまま箱根で泊まってても同じだったんじゃない？」

「ナオ、それは言ってるな」

キャップが隣に座るモロの肩によりかかった。

「あはははは、仲がいいわね」

「うれしくないな、男に寄りかかれても」

「キャップさんの寝顔子供みたいです」

「キャップ、後輩に子供見たいって言われるなんて……、まあ子供みたいだから仕方ないか。」

「これ事実子供だから。徹夜なんかするなっつーの」

大和も俺と同じ考えだったらしい。

「そつえば、大和。箱根でのスケジュールって決まってるのか？」

「1日目はテキトー。2日目は大自然で釣りとか。3日目は名所観光だな。」

「まあ、細かく決めてもそのとおりには動かないしね」

「集団行動の和を乱すのはよくないね」

「京、お前が言っな」

騒がしい電車の中、目的地へ。

―箱根湯本。旅館は山の上なので本来ならバスのはずだが。

「あたしは走って旅館まで行きまーす」

「山道、車で30分ってことは結構あるよ?」

「今日のノルマは昼までにこなしただろう私たちは」

「まだまだ。駆けてかけて駆けまくるのよ!」

そついうと、ワン子は走り始めてしまった。

「ワン子が心配だから、俺も走って旅館まで行くよ」

「悪いな、ナオ」

「まあ、ちょうどいいウォーミングアップになりそうだし」

そついうと俺もワン子の後を追って走り始めた。

「ねえ、大和？」

「なんだ京？」

「ナオがワン子より明らかに早い気がするのはきのせい？」

「気のせいじゃないと思うよ」

この時、ファミリーのみんなはあきれていたという……。

「遅かったな」

バスで旅館に到着した連中にかけて一言目がこれだった。

「いやいや、ナオが速すぎるんだからね」

「というか、ワン子は何？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・すっかり忘れてた・・・・・・・・orz。」

「まさか、ナオ・・・・」

「すっかり忘れてました」

俺はついに白状した。

「いったい何のために走ったんだろ？」

京の毒舌がとても厳しく突き刺さる。

「まあ、大丈夫だろ。私の妹だしな」

「にしても、きれいな宿だな。さすが九鬼財閥の傘下」

「1部屋10人とは広いな」

そうつぶやいたのは大和だった。

「大和と同部屋・・・ハアハアハア・・・」

「俺、ロビーで寝るわ」

「大和、あきらめろ」

俺は冷たく言い放った。

「zzzz・・・株が一株1円。買い占めろおお・・・zzzz」

「キャップはいつまで寝てるつもりなんだろう？

というか、1株1円の株とか安すぎでしょ！」

「しょうがないな。代理で私が仕切る。

温泉は24時間入り放題。夕飯までには時間が余っている。

とりあえず好きに行動しろ」

各自思い思いの行動をとり始めた。

俺は

A とりあえず修行

B なんとなく修行

C やっぱり修行

って、全部同じじゃねーか・・・。

こうして旅行の1日目は過ぎて行った。

??? side

1??? ????年4月9日

目覚ましの音で私は起きた。

いつもと同じく、起床時間は5時30分。私の一日は目覚ましで起

きた後、自分の部屋の窓を開けるところから始まる。

その後、自分の朝食と、お弁当を作って、学校の準備をするとちよ
うどいい時間になる。

そして、私は隣の家、幼馴染である彼の家へと向かった。

次回予告

キャップ「……………zzz……………もう魚は食べきれない……………zzz。
z。」

……………zzz……………というか何で軍人が箱根にいるんだ？……………z
zzz。」

ワン子「いったいどんな寝言よ！！

次回 10話 箱根旅行に行こう part 2!!!!

相変わらずのナオの出番の少なさはどうしたものなのかしら？」

9話 箱根旅行に行こう part 1（後書き）

さてさて、今月19日に「このライトノベルがすごい2011」が発売されたわけですが、私が好きなソードアートオンラインが4位、僕は友達が少ないが2位、神様のメモ帳が10位という私得なランキングでした。

そういえば、今日、はがない5巻を買ってきました。

この小説が書き終わったら読むつもりです。

さてさて、飛鷲さんの感想で、

「SHUFFLE! if story」の方も更新お願いします

というものがありません。

もちろん答えはokです。

最近古い作品をリメイク&更新することを考えていたので。

しかし、全部を全部リメイク&更新するわけにはいかないので、今度アンケートを取りたいと思います。

なので、この作品をリメイクしてほしい とか、 早く更新してほしい っというものを感想に書いていただけると嬉しいですよ。リメイクする候補にしますよ。

というか、リメイク云々の前に感想が来たことに感動でした。

最近だれも感想をくれなくて、やる気が40%減(当社比)していました。

なので感想を下さった飛鷺さんには感謝です。

ということで、皆さんもどんどん感想を下されると嬉しいです。

それでは

s e e y o u a g a i n .

10話 箱根旅行に行こう part 2 (前書き)

120000pv、160000ユニーク突破!!!

今回、やっと前話の最後ににでてきた謎の女の子の名前が明らかに！！

そして、箱根旅行は予想外の展開に！？

曲情報は前回と同じです。

あと次回はOPとEDが逆になります。

そしてそのあとは新OP、EDになります。

相変わらずgdgdな文章ですが楽しんでくださるとうれしいです。

10話 箱根旅行に行こう part 2

あらすじ

大和「箱根旅行1日目は無事(?)に終わり、舞台は2日目の釣りへ。」

でも、さっきから感じる殺気はなんなんだろう?。」

昨日は結局あの後修行をして、風呂に入って夕飯を食べて終了だった。

余談だが、結局ワン子は俺がついてから1時間30分後ぐらいに旅館に着いたらしい。

まあ、そんなことがあつて今現在は旅行2日目、午前3時30分、場所は森の中だ。

この世界に来てからも、元の世界で早起きして朝の鍛錬をしていた感覚が抜けず、2日に1度は朝早く起きて鍛錬をしていた。そして、今日が2日に1度の鍛錬の日なのだ。

つまり、今日も今から鍛錬する……はずだったのだが、今日はいつもとは違うみたいだった。

そう、森の中に軍隊がいるのだ。たぶん、殺気の数からして30人前後、そして、その中に2人、ほかのやつらより明らかに優れた人物がいることがわかる。

そして、そのうちの一人は、目の前にいる。

「あなたは何者ですか？」

「人に聞く前に自分から名乗るといのが日本のマナーなんだが？」

「もう一度聞きます。あなたは何者ですか？」

「だから、貴方から名乗る……」

俺が言い終わる前にその女は俺に向かってものすごいスピードで突っ込んできた。

だが、そのスピードはモモ先輩より遅い。

俺はその突っ込んできて俺を殴ろうとしていた手を素手受け止め、そのまま、その女の首に腕を回し、その女を拘束した（イメージわきにくいかもしれませんが、映画とかで犯人が人質を取る時のような態勢です）。

「もう一度聞く、お前は何者だ？」

さっきその女が言ったのと同じセリフだが、今は言ったのは俺だった。

その女もこの態勢で抵抗は無意味だと思ったのか、

「ドイツ軍のマルギッテ・エーベルバッハだ」

観念して自分の素性を話した。

「なんで、ここにドイツ軍がいるんだ？」

「それは……」

「それは私からお話ししよう」

森の中から一人の軍人、さっき言った優れた人物の2人目が出てきた。

「川神百代を倒したというのは本当だったみたいだね、本郷直孝君」

「本郷直孝……この男が！？」

「貴方は俺を知っているみたいですが、貴方は何者ですか？」

「私はフランク・フリードリヒ。クリスの父親でドイツ軍の中将だ。」

直孝君にはクリスがお世話になっているようだね」

クリスの転校してきた日に、ナオは用事があつて遅刻していったので、ナオはクリスのお父さんの顔を知りません。

「クリスのお父さんでしたか。

じゃあ、今回、ドイツ軍がこの山にいるのもクリスに会いに来たと考えていいんですか？」

「ああ、まさにその通りだよ。

クリスが転校して2週間ほどたつからな。顔を見ようと思った訳だ。君には私の部下が迷惑をかけてしまったね」

「いえいえ、そういうことなら俺は自分自身の修行に戻ります」

そういつて、俺はマルギツテの拘束を解き、兵士の殺気がない場所へと向かった。

「すみませんでした、中将。ご迷惑をおかけしてしまって」

「気にしないでいい。それにしても直孝君と戦った感想はどうだった？」

「闘ったというほどのものではありませんでした。

彼からは全くと言っていいほど殺気が出ていなかったんで、一般人だと思い、隙についてそれなりの威力で殴ったのですが、拳を素手

で受け止められてしまいあのような状況になりました」

「殺気がほとんど出ていなかった・・・か。

彼は本当に我が軍に欲しい存在だな」

その時のナオは

「ハークシヨン！！！」

くしゃみを連発していた。

マルギツテとクリスのお父さんと別れた後、6時になるまで修行した後、宿舎に戻ってファミリーの人々と一緒に食事をして、今現在、釣りに行くため、女子陣の着替えをロビーで待っている。

「うし、大和ほど早くなかったがパズル完成だ」

「これでパズルが解けてないのはモロとガクトだけだな」

「いいんだよ。俺様は力が取り柄なんだから」

「我ながら情けないよ」

「残念ながら、タイムアップみたいだぞ。女子陣が来た」

「ナオ、どこにもいないけど？」

「あそこの角に入って15m先に気を察知したからもつすぐ来るぞ」

「ナオのその能力便利だな、俺もほしいぜ！」

キャップは相変わらずノーテンキだった。

その後、いろいろと話しながら山に入って川に到着。

「ここら辺でいいだろう。ナイス景色だな」

「よし、盛大に釣ってやろうぜ。ひゃっほう！！！！」

キャップは釣竿を持って川に駆け出した。

「おい、エサをつけないと」

「現地調達でいいんだよ。岩の下にはたくさん虫がいる。

そして、ヒット！！ヤマメだぜ！！！！」

さすがキャップとしか言いようのないサバイバル精神だった。声を

かけたクリスもあきれたというか驚いた顔で見ていた。

「全力で満喫しているなー、野生児だなー」

「次回 モロ覚醒俺だつて釣つてやる にご期待ください」

「そこで期待されても視聴率とれる自信ないよ。

それに、京。別に僕は覚醒とかできないからね」

「見てろ、俺がかつこいい見本を見せてやる」

「ガクト、まだオチには早いよ?」

「オチねえよ。というか、ナオつて結構毒舌だよな」

「でも、ナオの言うとおりガクトが落とさないと次のシーンに進めないよ」

「言ってる。京、いつもよりワイルドな俺様に惚れるなよ」

ガクトは釣り中のモモ先輩の横に座った。

「俺様の釣りテクがすごかったら、結婚を前提に付き合ってくれ、モモ先輩!!」

「ほー! 動物的で面白い求婚だ。ではその素晴らしい釣りテクをみせてもらおうか」

「うっしや。今から釣りゲーになるぜ」

ガクトは意気揚揚と釣り糸を投げ込んだ。

だが、それは姉さんの糸と絡み合ってしまった。

「邪魔だ!!! もつと遠くで釣れ!!!」

「はぐううううう!!!」

「おー! ずいぶん遠くまで飛ばされた。

さすがガクト。見事にオチを付けたね」

一番の親友であるモロにこう言われるガクトって……。

「アタシは釣りの前に修行しよっと！」

「まあ、時間もたんまりあるしそれもいいだろ。」

おい、大和！！私の分も釣れ。3匹以上連れてなかったら死刑な！」

「厳しい法律だな……」

「大和、もし釣れてなかったら俺のを少し分けてやるから」

「ナオ、いざとなったら頼むぜ……ってお前だけ釣ってるんだよ！？」

ナオの周りには魚がたくさん入ったバケツがすでに4個もあった。

「いや、釣りは初めてだったんだけど、やってみると簡単に釣れちゃってさ」

「初めてでこんなに釣るとかいったいどうやったんだよ？」

「単に魚がいる場所に釣り糸を投げただけだよ」

「だって、どこに魚がいるかなんて分から……。もしかして、ナオ」

「お前、魚の場所まで気でわかるのか？」

大和が言いかけた言葉を言ったのはモモ先輩だった。

「ええ。どんな生き物でも多少は気を発してますから」

「その多少の気を察することが出来る奴なんて滅多にいないぞ。」

私も無理だし」

「でも、無意識のうちに察知することができるようになったんですよね」

「お前のその才能も、まさか魚釣りのために使われるとは思ってもしなかっただろうな」

モモ先輩は若干苦笑していた。

「!?!」

森の奥に若干だが殺気を感じた。

モモ先輩が気付いていないということは結構遠くなのだろう。

そして、その殺気は早朝に感じたドイツ軍のものと一致していた。

そのうえ、マルギッテのところにワン子と京が向かっていることが分かった。

「ちょっとトイレに行ってきます」

そついうと俺はマルギッテのいる場所へと向かった。

俺がマルギッテのところに着いた時には、ワン子と京は絶体絶命だ

った。

それというのも、ワン子と京が素手で戦っているのに対し、マルギッテはトンファーを使っているのが原因だろう。

「これで終わりだ！H a s e n ! ! J a g g d ! !」

京たちに向けてトンファーの乱舞が繰り広げられる・・・

「終わりなのはお前のほうだ、マルギッテ」

前に、俺はマルギッテを拳で殴り吹っ飛ばした。

「闘気を感じてここまで来てみれば面白い展開になっているな」

「本郷直孝・・・・。またお前か・・・」

「安心しろ、手加減はしておいた。2週間もあれば痛みは引くだろう」

「手加減して全治2週間って・・・」

「しょーもない・・・」

その京の口癖の後遅れて、俺が出した殺気に気づいたファミリーのみんなが続々とやってくる。

「いったい何の騒ぎだ？」

「マルさん！！！」

「お久しぶりです、クリスお嬢様。すみません、このような姿で」

「お嬢様って・・・まさかクリの知り合い？」

「なんだかやっこしいことになっているな」

「お父様！！」

「クリス、今日も美しい。」

紹介しよう、私の部下のマルギッテ少尉だ」

「そうだ！マルさん。その怪我は……」

「大丈夫です。少し休めば治ります」

「部下が失礼を働いたようだ」

「失礼というレベルじゃなかったけどね」

「近接戦闘に長けている分、君たちのような手慣れを見ると勝負を吹っ掛ける癖がある。」

その若さゆえの無鉄砲さが私は嫌いではない」

「それで襲われたほうはたまったもんじゃないけど。」

もういいや……めんどい」

「アタシはよくないわよ。やいマル！」

「野ウサギが私を呼び捨てに！？」

「今度はお互い武器ありで勝負よ！」

「いいでしょう。返り討ちにしてあげます」

「それにしても父さまはなぜこのような場所に？」

「お前から連絡が来たからだ。友達同士で泊まりがけの旅行に行くというではないか・・・」

そんな電話を聞いては父親として居ても立っても居られない。心配で駆けつけたのだ」

「おい、おっさん。そんなに俺たちが信用ならないか？」

「信用してないわけではない。だから30名という少数の部下を連れてやってきたのだ」

「十分にもほどがあると思うな」

「中将、そろそろ出発のお時間です」

「あ、そうそう。フランクさん」

「なんだ？直孝君」

「森の中で兵士が襲い掛かってきたから、全員気絶させておきました。」

「ちゃんと回収しておいてくださいね」

「私が誇る精鋭たち30人を一人でだと！？」

「マルギッテ、確認しろ！」

「……連絡不能。制圧された可能性が高いですね」

「実際に目撃するとすごいものだな、君の実力は。」

部下は責任を持って回収していく。

「ではな、クリス」

そういうと、マルギツテは痛みをこらえながら去っていき、フランクは悠然と去って行った。

直江大和 side

気を取り直して俺たちは釣りを再開していた。

中でもクリスは上機嫌で釣りをしている。

おそらく父親と会えたから機嫌がいいのだろう。

なら、今こそ説得だぜ。

「クリス、お前の父親かつこいいな」

「ああそうだろう。自分の誇りでもある。」

そんな父さまが好きだというこの国も称賛したい」

「誇り高い軍人なんだな」

「そうなんだ！自分たちはそもそも軍人の系譜」

さらに食いついてきた。

「そうなんだあ。クリスの一家はすごいんだな」

「だろう」

「ところで軍人って作戦を使うよな？」

「ああ。ブリッククリークとかな」

「そうそう、大事なことなんだ」

「？。何を言いたいんだ大和？」

「正面からぶつからず、被害を最小限に減らす作戦も知ってるし、理解もできるだろう？」

「まあな。実際奇襲作戦などもやるしな」

「つまり、俺のはそういうことだよ。」

策を用いるのも味方や自分自身の被害を減らすため。

軍隊に置き換えるとわかるだろう。

勝つための作戦、生き残るための作戦。

これを否定するとお前の誇りである軍の在り方の否定をすることになるぜ？」

「む……？む？」

「まあそついうわけさ。」

俺が実戦向きの男だと理解してもらった上で、ある程度は仲良くしようじゃないか」

「・・・わからんな」

「なんでだよ？」

「・・・お前が言ったところで説得力がない。

いや、言葉に重みがない？

あるいは、口だけと言い換えるべきか？」

「・・・！！」

「こんにやる・・・好き放題言ってくれる」

「仲間を思いやる気持ちは分かっている。

そして今の言葉も受け入れたいのだが、体が拒否している。

やはり、簡単には納得できないな」

俺はどうにも認められていないようだった。

口先と小手先だけのタイプだと思われるのか。

「ならもつ、お前の体に教えてやるよ」

「何？」

「勝負だクリス！俺という人間を認めさせてやる」

「なるほど。力が伴えば先ほどの発言も納得できるな。」

面白い、その勝負受けた。

それにしても、まさかお前と決闘することになるとはな

「なんか面白い流れになってきてるけどいいの、京？」

「これ邪魔したら大和に空気よめって怒られるし。」

私は釣った魚とでも会話してるよ。

ほら魚が口をパクパクさせながらこう言ってるよ。

あううう・・・みずをくれえええ　　って。」

「それくらいからやめようね」

なんか、京とモロが話しているようだったが、無視しておいた。

「よし、話は分かった。」

任せとけ、俺とモモ先輩で平等にその決闘の内容を決めてやる」

「安心しろ、川神院の名にかけて平等にやってやるぞ」

「まあ、決闘は明日やるとして、今は釣りだ釣り!!」

「そうだな、準備にも時間かかるし」

こうして2日目は過ぎていった。

そして、決闘前にもかかわらず、女子風呂を覗きに行ったことで熱を出してしまったのは、また別のお話。

???side

私を家を出ると隣の家へと向かった。

合鍵を使って家の中に入ると、家は真っ暗だった。

そして、リビングに着くとそこには一枚の紙が置いてあった。

内容は

修行に行ってくる。2か月ぐらい言ってくるけど、心配しないで
っというものだった。

私はその置手紙を見たとき、自然と悲しくなった。

今までにも何回も彼が修行に行ってしまうことはあった。

だが、その時はいつも私に直接言ってからだった。今回のように置
手紙ではなかった。

「なんで、直接言ってくれなかったの？ナオ君？」

その呟きは家の静寂の中へと吸い込まれていく。

私、藤宮美空は沈んだ気持ちで学校へと向かった。

次回予告

百代「前日に女湯を覗きに行つて風邪を引いた大和。一体決闘はどうなるのか？」

次回、11話 箱根旅行に行こう part3

ガクト「大和が風邪ひいた理由の半分はモモ先輩のせいなんだがな・
・・」

10話 箱根旅行に行こう part 2 (後書き)

ついに日常編はあと一話。そのあとはアンケートを挟んで川神大戦編です。

さて、先にお知らせしておきますが、11話の投稿は遅いと12月中旬になります。

理由はテストがあるからです。というか今もテスト8日前です。

まあ、気分や感想次第では、明日んでも投稿するかもしれませんがwww。

また冬休みに入ってから更新ペースは若干遅くなるかもしれませんが。

なぜなら、新作がたくさん出るからです。

世界征服彼女、D・C・DX、のーぶるわーくす、ハローグッドバイ、etc.....。

欲しいものが多すぎる。

ということで、こんな作者ですが今後もよろしくお願いします。

それでは

see you again .

11話 箱根旅行に行こう part3（前書き）

130000PV突破!!!

今回、川神戦役のシーンを相当省いております。まあ、最後の5戦目のシーンはオリジナルな展開にしておりますが。

理由としてはいくつかあるのですが、そのうちの一つは、全部書いてるとめっちゃくちゃ大変だからです。

まあ、ということで日常編完結です。

アンケートを挟んで川神大戦編をお楽しみください。

曲情報

・OPテーマ

サクラサクミライコイユメ

・EDテーマ

shining ray

詳しい情報は6話をご覧ください。

11話

箱根旅行に行こう

part 3

あらすじ

ガクト「ついに大和とクリスの決闘の日。

だが、大和は大熱を出してしまった。

若干俺様のせいでもあるんだよな・・・」

俺たちファミリーのメンバーは大和とクリスの決闘を見届けるため、河原へと来ていた。

「大和とクリスの決闘の内容は、ずばり、川神戦役in箱根だ！！」

「ナオさん、川神戦役って何か分かります？」

「俺も転校してきたばかりだが詳しくは知らないが、クラスなどの決闘にもちいっることが多い勝負方法で、くじ箱の中から対戦種目を引き、その種目で勝負して、先に5回勝ったほうが勝ちらしい」

「オイ、ナオ！俺が説明したかったのに。」

それに、詳しくは知らないと言っというて、よく知ってるじゃねーか」

「でもその場合、5回続けて自分に不利な種目が出てしまうこともあるんじゃないのか？」

「平等にくじは入れた。普通はそこまで偏らんぞ」

「それに、偏ったとしても運も実力のうちだろ？」

「ああ、そうだな。」

それに複数回闘えるのなら、くじでも問題ない」

「それじゃ、大和とクリスでじゃんけんをして、くじを引く順番を決めろ」

「くじを先にひくメリットってあるのか？」

「時々紙によって2つ種目が書いてあったりしてな、その場合引いたやつがどちらかの種目を選ぶことができるんだ」

「なるほど、結構なメリットがあるんだな」

「それじゃ、クリスはじめよう。」

最初はぐー、じゃんけん、ぽん！」

大和が出したのはグー、クリスが出したのはチョキ、したがって大和の勝ちだった。

「よし、大和。それじゃあ早速1枚引け」

そして、大和が引いた紙には

c h a i n d e a t h m a t c h

と書かれていた。

結果、大和の棄権によりクリスの勝利。

このまま、試合は大和もクリスも互いに譲らず2勝2敗で5戦目を迎えようとした時だった。

「!？」

いきなり大和がその場に崩れ落ちた。

「!？。大和!!!大丈夫？」

「！！。お前、ひどい熱があるじゃないか」

「大丈夫だ、こんくらい。」

俺はクリスと決着をつけなきゃいけないんだ」

「大和はガキだな」

「この試合に勝って、クリスに俺を認めさせるんだ。これは男の意地なんだ」

「大和、お前男だぜ」

隣でガクトが感動していた。

「大和、お前はここで辞める気はないんだな？」

「ああ、これは男の意地だぜ、姉さん」

「よし、分かった。今ちようど2勝2敗だろ？」

だから、次でラストゲームにする。

クリスマスもそれでいいか？」

「ああ。私もあまり大和に無理をしてもらいたくはない」

「それでは、ラストバトルのくじを引け、大和」

そして、最後に大和が引いた運命のくじは、

「お前とことん運がないな」

山頂からのダウンヒルランニングバトルだった。

「大和、コイントスしろ。」

コインが表ならワン子、裏なら京がパートナーとなる。

ルールとしては、山の中に2つチェックポイントがある。

そこでクイズを解いてスタンプをもらい、先にゴールしたほうが勝ちだ。

山頂から発せられたモモ先輩の声が森の中に響いていた。

その声と同時に、大和のワン子は林の中へ、クリスと京は普通の山道を下って行った。

そして、他のみんなはチェックポイントゴールにいるため、山頂に残されたのは俺とモモ先輩だけになった。

「あの試合の後お前とゆっくり話すのは初めてだな」

「そうですね」

「まさか、お前に負けるとは思わなかったぞ」

「モモ先輩は、いつから俺が武道四天王だっことに感じていたんですか？」

「お前と初めて会ったとき、そして、乙女さんたちが負けたと聞いた時に、もしかして思った。」

そして、ワン子との決闘のときに、ほぼ確信へと変わったな」

「やはり、あの時ですか・・・」

「なあ、ナオ？」

「なんですか？」

「お前は勝負をしていて楽しいか？」

「!!!!!!」。

「私にはお前が勝負を楽しんでいるようには見えなかった。

いや、楽しんでものかもしれないが、それは本当に心の底からなのか？」

俺は言葉を返すことができなかった。

モモ先輩の言うことが間違っているようには聞こえなかったからだ。

「もしかしてお前はそれだけの力を持ったことを恨んでいるんじゃないか？」

・・・そうなのかな。

もともと俺自身が力を持ちたいと思って力を手に入れたわけじゃない。

それにこの力のせいで・・・あの事件を起こしてしまった。

そして、あの事件で俺は友達というものをほとんどなくした。

「実際、私は優れた力を持つことの寂しさをよく知っている。

だけどな、その寂しさから救ってくれたのは、ナオ、お前なんだよ」

「俺？」

「そうだ。お前がいるから、私にとって勝負、いや武道が楽しくなつたんだ。

実際に昨日稽古をしてみて分かった。

こんなに稽古が楽しかったなんて　　ってな。

ナオというライバルの存在が私に武道の楽しさを実感させなおさせてくれたんだよ」

「モモ先輩……」

「ナオには私がライバルじゃ不満か？」

「いえ、まったくそんなことはありません」

「それじゃ、これからをもっと楽しそうに戦え!!」

心の底から武道が楽しいって思えるようになってみる!!」

「分かりました」

「いい返事だな。」

それじゃ、そろそろ大和たちもゴールに着くだろうし、ゴールへ向かうか」

こうして、俺たちは頂上を後にした。

直江大和 side

「ぬ．．．ウ？ここは．．．．．」

気が付けばみんなは昼食をとっていた。

「ようやく起きたね。2時間くらい寝てたよ」

「そっか、俺．．．．．勝負に勝ってそのまま．．．．．」

そっ、俺は熱があるにもかかわらず川に飛び込み、勝負に勝つことができたのだ。そして、勝負が終わると気を失ってしまったようだ。

「薬もらってきてるから飲んで」

「一応言っとくが口移しはやらないからな」

「大和のいけず」

そんな、やり取りをして、薬を飲みながらほかのみんなを見ているとあることに気が付いた。

「あいつらすっかりなじんでるじゃん」

もともとナオは問題なかったし、クリスやまゆっちも、ほかのみんなとの距離がこの旅行で明らかに近づいていた。

「あとでワンコ笛も渡さないとな」

「大和、あまり顔色よくないぞ」

「じきに薬が効いてくるよ」

「とりあえず大和さんはあまり動き回らないほうが」

「はい」

クリスはちよつとだけ柔らかくなつたし、まゆっちもちゃんと意見を言ってくる。

・・・これは本格的に仲間加入だな。

「よし、それでは新入り3人に川神魂を授けるぜ」

「川神魂？」

「こつという詩がある。

光灯る街に背を向け、我が歩むは果て無き荒野
奇跡も無く標も無く、ただ夜が広がるのみ
揺るぎない意志を糧として、闇の旅を進んでいく。

これが川神魂だ！」

「あえて荒野を遺憾とする男の詩だぜ」

「女の子の私だってわかるけど長いわ」

「勇往邁進。一言でいえばそういうことだな」

「勇往、邁進」

「困難をもつとせずつに突き進むことが・・・」

「いい言葉だな。前に進もうという意思があふれてる」

「辛いときは口にするといい。」

同じ旅をする仲間がいる。力が出るぞ」

「それさえ刻み込めばこれ以上言うことはねーな」

「ねえ、大和と京も来たんだし乾杯しようよ」

この言葉の後、俺たちはプチ宴会をし、その後観光をした。

そして午後4時、観光も終わり、俺たちはバス停でバスを待つことにした。

「バス、すぐ来そうだね。ナイス進行管理」

「こういう時スムーズだと気持ちよく帰れるからな」

「もし……そこのお兄さん」

バス停の近くにいた占い師のおじさんに声をかけられたのはナオだった。

「少し占っていきませんか？もちろんタダで結構です」

「まじか、占ってもらおうぜ」

「私はタロットカードを使って占いしております」

そういつて、その占い師のおじさんはタロットのカードをめくっていく。

そうしてる間にバスは来た。

「あなた方、みんな輝かしい未来をお持ちのようすな」

「それはよかったぜ。」

中途半端で悪いが俺たちは行くな」

次々と俺たちはバスに乗り込んでいく。

そして、バスが発車する瞬間にその老人は最後のタロットカードをめくった。

そして、その占い師のおじさんは走り去るバスに向かって叫んだ。

「お聞き下さい。貴方たちの中に一人……一人にさせてはだめです。恐ろしいものが訪れる」

その言葉はバスの中のファミリーに聞こえることはなかった。

どこに向かって走れば もっと 素敵な明日に逢える？

舵を取って 胸にしまった 奇跡の地図を広げた

空を目指して 夢を探して 道に迷った時もある

夢じゃなくて 君と出会って 素敵な自分を見つけた

小さな勇気から 大きな物手にした

「願い」を今こそ 「誓い」に変えて

Shining ray Find your brand new
way.

未来の物語を描こう

新しい風にすべての思い乗せて 今…

Shining ray Find your brand new
way .

a never ending journey to be
together .

どこまでも追いかけて Shining ray

ナオの平行世界の冒険はまだ始まったばかり。

いったいどのような結末を迎えるのか、それは誰も知らない。

次回予告

次回はアンケートです。

11話 箱根旅行に行こう part 3 (後書き)

試験前で疲れ切ってる八重桜です。

前に書いたように、次の投稿は遅いと12月中旬になってしまいました。

まあ、アンケートは早く仕上がると思いますが・・・。

アンケートに関してはできるだけ多くの皆さんに回答していただけることを期待しております。

それでは

see you again .

12話 不協和音（前書き）

150000PV、20000ユニーク突破!!!

読んでくださっているみなさんいつもありがとうございます。

今回より川神対戦編始まりました。

楽しんでいただけると嬉しいです。

曲情報

・OPテーマ？

「嘆きのロザリオ」

歌 JAMP PROJECT

テレビアニメ 超重神グラヴィオンOP

この曲は私がJAMの中でも好きな曲です。
ぜひ聞いてみてください。

URL <http://www.youtube.com/watch?v=A3S4Zikm9VA>

・EDテーマ?

「アゲハ蝶」

歌 ポルノグラフィティ

この曲は最近ニコニコ動画のほうでもMADで有名になってきていますが、とてもリズムが良い曲です。

| | | |
|---|---|---|
| v | c | U |
| w | h | R |
| | ? | L |
| | v | h |
| | " | t |
| | m | t |
| | F | p |
| | r | : |
| | o | / |
| | P | / |
| | l | w |
| | m | w |
| | Q | w |
| | b | . |
| | Q | y |
| | o | o |
| | & | u |
| | a | t |
| | m | u |
| | p | b |
| | : | e |
| | f | . |
| | e | c |
| | a | o |
| | t | m |
| | u | / |
| | r | w |
| | e | a |
| | " | t |
| | f | |

12話 不協和音

川神大戦編 プロローグ

俺がこの世界に来てから約2か月半が過ぎた。あの箱根旅行から約1か月半が過ぎたのだ。

最近になって思うことといえば、現実世界の友人たちのことだ。

俺はあの事件で大勢の友人を失った。だが、彼らは俺のそばに残ってくれたのだ。

たしかに他のやつらも、俺が世界チャンピオンになってから、たくさんの人が声をかけてきた。しかし、俺はすべてを無視した。あまりにも下心が見えすぎているからだ。

でも、彼らはそんなほかのやつらとは違った。あの事件によって俺が学校中じゃら冷たい視線or恐怖の視線を浴びることになっても彼らは、自分の悪口が言われることも恐れずに俺のそばにいてくれた。

そのおかげで、あのとき、俺はくじけずに済んだんだ。

その俺の仲間の中で一番気になるのが、幼馴染の美空だった。

もともと美空の両親は俺の両親が死ぬ前に他界しており、食事は3食すべて俺と一緒に食べていた。

しかし、その俺がいなくなったのだ。さびしい思いをしながら一人で食べているのかもしれない。

まあ、彼女たちなら美空を一人さびしい思いはさせないと思うが・・・。

まあ、そんなこんなで2か月たった今、現実世界のことを気に始めている。

しかし、今はそれ以上にこちらの世界で気にしなければならないことがあった。

6月ごろに入ってから、学園は緊張感に包まれていた。

そう、2年F組と2年S組の争いが激化したのだ。

そして、この2クラスの争いは、川神学園を巻き込む決闘となるのであった。

嘆きのロザリオ / J A M P r o j e c t

月が闇を照らすとき 伝説が宇宙そふを舞う

禁断のデュエルの時 タナトスが呼んでる 遠く

G u i l t y 仮面に隠した
罪の痛みと引き換えに

ずっと 探し続けてる 真実だけを

運命に戸惑う 嘆きのロザリオ

消せない 記憶が 愛に震えてる

月が闇を照らすとき 伝説が宇宙そふを舞う

儚き堕天使達よ 美しく飛べ

禁断のデュエルの時 タナトスが呼んでる 遠く

「それでは、和平使節団としてS組に行ってきます。

そして、ぎくしゃくしているS組との仲を取り持ってきます」

そう言ったのは、F組の委員長である真与だった。

ホームルームでS組についての話題が出ており、大和の出したこの意見を採用することにしたのだ。

「うわー、なんだか僕も緊張してきたな。

もぐもぐ、ピザまんおいしい」

「熊飼もいくのか。珍しいな」

「仲良くまったりと学園生活を送りたいからね」

「ロクな結果にならと思うが・・・まあ、好きにしろ」

出たよ、源さんのツンデレ。

「あたしも別にS組と仲良くする必要はないと思う」

まあ、千花のように反対意見の人もあるようだが、

「だめです。せっかく同じ学び舎の仲間なんですから」

真与の気迫に押し切られていた。

「相手も仲良くしたいと思ってるとは限らないだろ」

「体育祭前で興奮している今ならいけるかもと軍師である直江ちゃん」

「そうなの？」

「元から少ない確率が少し上がった程度だけだね」

「やっぱ、不安だね、それ。」

真与、大丈夫？」

「委員長にはナオとワン子を護衛につける。」

ナオがいれば委員長に危害が加わることは絶対ないし、ワン子がいれば九鬼がサインする可能性も上がる」

「ああ、任せとけ。委員長には指一本触れさせないから」

「なんかナオのそのセリフ、恋人へのセリフみたいね」

「大和、用事を忘れてたから、ワン子一人に護衛を任せてくれ」

「冗談よおお」

ワン子が泣きそうな顔で見てくる。

やっぱり、いじりがあるな。

「あと使節団として声をかける相手は、葵冬馬か井上準にしてね。そうしないと、低い確率が0になっちまう」

「はい、言われた通りにします」

真与が元気な声で返事をする。

「でも仲良くなった後、具体的にはどうするんだ？」

「夕涼み会なるものをやってみようかと」

「それではいつてきまーす」

「葵冬馬がいればどうにかなるだろう」

しかし、この後、大和のこの考えが甘かったことを思い知ることになるのだった。

――2年S組

「おっ、大和君の話通り来ましたね、ようこそ」

「ど、どうも」

「こちらへどうぞ、マドマゼル。」

勉強好きの多いむさくるしい空間ですが・・・」

「なんじゃ、こいつらは！・・・2年F組の連中ではないか」

声の主は今回の作戦での要注意人物である、心だった。

「平和の使節団だよ。お前ら手を出したら怒るぜ？」

まあ、本郷がいる時点で返り討ちにされるだけだがな」

その言葉と共に多くの視線が俺に集まった。

あのモモ先輩との試合以降、学園である意味有名人になってしまった。

まあ、学園だけではなく世界中な気がしなくもないが。

「平和あゝ???使節団???なんじゃ勝手に……」

「我也聞いておらぬが……」

「お邪魔しまーす」

「一子殿がいるので許す!!フツハハハハハハ!!」

まさに大和の読み通りだった。

「リラックスしていいですからね」

「は、はい」

真与は相変わらず緊張気味だった。まあ、無理もないと思うが・・・。

「でも、みんなから見られているね・・・」

「クマちゃん。そんなに緊張しなくて大丈夫。

何があってもアタシとナオで守り抜くわ!!」

「ホホ、山犬が1人前にほざきおるわ」

「ワン子、我慢だぞ」

俺は必死にワン子をなだめた。

「英雄、クラスの代表として調印をお願いします」

「ほう、調印とな？よく書類を見せてみる。

・・・ふむ、F組とS組の恒久和平の実現か・・・」

「S組と恒久和平？待つてほしいな。

なんで、F組ごときと同格なんだ？」

S組の生徒の一人が不満を言うと、他の生徒も不満を言い始めた。

「2・F委員長を困らせることを言っな！！！！！！！！！！」

小さい女の子を困らせることを言っな！！！！！！！！！！」

「ちょっと・・・。切れすぎだから、井上君」

「なるほど、これからは仲良くしようということか・・・。」

「はい、意味もなくピリピリするのはやめましょう」

「私も賛成です。別に喧嘩でいる必要もないでしょう」

葵冬馬もこちらの味方だった。

「トーマが賛成ならさんせい」

自動的に小雪もこちら側だった。

「この夕涼みというのは？」

「お茶会だね。」

みんなで一緒に食べたらおいしいよ」

「僕たちはおいしくおもえるかなあ。」

そもそも君たちとは食べるものが全然違うと思うけど」

さっき、一番最初に不満を言ってきたやつが、また文句を言ってきた。

「貴様、でしゃばるな！！無礼であらう」

「いや、九鬼！！これはS組の意志でもあるのじゃ。

なかよくするのはいいのじゃ。

でもそのためには、

F組はS組より劣っていることを自覚しています

という一文が必要なのじゃ」

「そりゃいい。力関係がはっきりする」

心の主張により、S組の過半数が心の主張を支持してしまった。

「やれやれ、みんなムキになってしまってますね。

他のことなら意思統一ができるのですが・・・」

「ま、心配しないで。ちゃんと調印できるから」

「うむ、我も調印することに意義はない」

この発言にはS組全体からブーイングが来たが、

「代表である我が決めたこと。いわば宇宙意思。従え!!」

九鬼に押し切られていた。

「っとまあ、このようにまとめることもできる」

「へえ、凄いわね」

「!!。であろう、一子殿。我はすごい!!」

一子に褒められて九鬼はうれしそうだった。

「しかし、心から納得していないものが多数だと、うわべだけの調印になるかもしれんな」

「それでも、交流の機会が増えれば、分かり合えると思います」

「さすが、わがエンジェル。素敵です」

「・・・まあ、九鬼君が決めたことには反対しないよ。

でもよかったな、甘粕。

この中のどれかの目に留まれば、玉の輿が狙えるぞ。

お前の家、貧乏なんだろう？

はは、ださい、ださい」

その言葉を言ったやつは、3秒後には床に倒れていた。いや、倒させたというのが正しいか。

「これが川神百代を破った本郷君の殺気ですか・・・」

そう、今の俺はクラス中に殺気をまき散らしている。

といっても、気絶するほどにあてたのはさっきの一人だけだが。

「手を出したな。これが蛮族のやり方か……」

まあ、手はだしてないけどね。

「そっちのクラスの人**も**攻撃しているじゃない」

ワン子の言葉のとおり、S組の生徒も攻撃をしてきていた。

俺はその暴徒たちは次々と気絶させていく。

「何が恒久平和じゃ！！しょせん無理な話なのじゃ！！」

「このような蛮族は此方に飼育されるべきなのじゃ」

「あんたたちって本当に曲がっているわね」

ワン子と心が互いに構える。

「やめてください！！！！！！！！！！」

委員長の言葉が教室中に響き渡った。

「どうして分かり合えないんですか!？」

仲良くしようって言ってるのに・・・。

こんなの悲しすぎます!!!」

「話はきかせてもらったぞい」

そして、委員長の言葉で静まった教室に入ってきたのは、学園長と巨人だった。

「確かに分かり合えないのは悲しいのう・・・。

だが、話し合いで分かり合えなくともほかの方法はあるぞい。

勝負するのじゃ!」

「勝負?」

「うむ。この場は両者退くといい。

明後日、わしが最高の提案をしてやろう」

「学園長、まさかあれをやるつもりですか？」

「ふむ、勝負が一番いいかもしれんな。

先ほどから考えていたのだが、お互いに能力を認め合わない敬意はうまれまい。

分かり合うためにぶつかる。それも一興！！」

2 - Fと2 - Sの仲は結局崩れたままだった。

すると、そこには見慣れた顔があった。

「おはようございます、美空先輩」

美しい髪を持ち、周りを明るくさせるような印象を持つ彼女の名は、新田聖。

私とナオ君の一つ下の後輩で、あの事件の被害者である。

「おはよう、聖ちゃん」

「今日はナオ先輩、一緒じゃないですか？」

「ナオ君はまた修行に行っちゃったよ」

「え、残念です。今日こそナオ先輩に愛の告白を受け入れてもらおうと思ったのに・・・」

まあ、見てのとおり、聖ちゃんはナオ君に好意を抱いている。

「聖ちゃん、そろそろいかなきゃ遅刻しちゃうから急ごう」

「そうですね」

そのまま私たちは学校へと向かった。

次回予告

ナオ「川神大戦の開戦が宣言された。

戦を有利に運ぶにはまず、川神戦役で勝つ必要がある。

絶対勝手やるぜ！川神戦役！！

次回13話 前哨戦、川神戦役開幕!!!
part1

12話 不協和音（後書き）

コロネギさん、beetさん、ゼヘルさん、White Seal
さん、TACさん、アンケートに答えていただきありがとうございます。
いました。

他の方々もアンケートに答えてくださるとうれしいです。

あと、伝え忘れていましたがアンケートの締め切りは12月5日まで
です。

皆さんのたくさんの感想、アンケートの回答をお待ちしております。

それでは

see you again.

13話 前哨戦、川神戦役開幕!!!（前書き）

165000PV突破!!!

たぶん明後日にアンケート結果を出した後は、次の投稿が来週以降になります。

というか、明後日からテストです。

やばいです。

ピンチです。

ということでした承ください。

13話 前哨戦、川神戦役開幕！！

あらすじ

百代「S組と友好的な関係を築こうと、S組へと向かった真与たちであつたが、やはりS組と分かり合うことはできなかった。

乱闘になりかけた時に、じじいが現れて・・・」

川神大戦とは、川神学園の最大最高の勝負方法である。

具体的には丹沢山中でF軍とS軍に分かれて向かい合い、合図とともに、大将首を狙って全員で戦闘をするという分かりやすい勝負である。

ちなみに、大将とはそれぞれのクラス委員長である。

細かいルールは以下の通り。

1、尖った武器は禁止。武器はレプリカまたは峰打ちで戦わなければならない。

2、拳銃と爆弾は禁止。矢は先端に指定の処理を施せば使用可。

3、相手の捕虜への尋問、拷問はご法度。

4、学園内の人間ならいくらでも助っ人可能。

5、逆に学校外の助っ人枠は50人まで。

6、助っ人の勧誘は川神戦役の翌日から可能。もし、それ以前に勧誘してばれば、それなりの罰を与える。

7、今回は特別ルールとして、川神戦役を前哨戦として行う。

川神戦役とはクラスなどの決闘に用いることが多い勝負方法で、く

じ箱の中から対戦種目を引き、その種目で勝負して、先に5回勝ったほうが勝ちである。

ただ、今回はあくまで前哨戦として行うので、勝負は合計5回、そして1勝することに相手のクラスから1人、自分のクラスに引き込むことができ、引き込まれた人は川神大戦では引き込まれた側のクラスの兵士として戦う。

つまり、川神戦役に全勝すれば、相手クラスの主力メンバーを5人、自分のチームに引き込むことができるのだ。

また、引き込まれた選手を取り返すことも可能である。

つまり、一回目にSが勝つて、大和を引き込んだとする。その後二回目にFが勝った場合、S組から引き抜くか、大和を取り返すかの2つの選択肢が存在するということだ。

よって、川神戦役の勝敗は川神大戦の勝敗を大きく左右するといっても過言ではない。

「ルールはこんなもんじゃな」

俺たちは川神大戦の説明を受けていた。

「ということは、このイベントは行内の人間が総動員で」

「そういうことじゃの。2・Sと2・F以外の連中をチームに引き込むんじゃ。」

最終的には学校を2つに割っての大戦争になるぞい。

味方に引き込む政治力もまた問われる、まさに戦争の再現。

7月31日に実施するので準備を備えよ!!!」

「そ、そんな・・・大がかりの喧嘩なんて・・・」

「喧嘩にあらず。真剣勝負のぶつかり合いじゃ。」

これが終わった後、みんな分かり合えるはずじゃ」

「面白い、その勝負受けたぞ」

「・・・私たちも勝負を受けていいですか？」

真与の問いに、俺たちは大きくうなずいた。

「では、これよりF組とS組の喧嘩を禁ずる。

むろん闇討ちなどもな。

まずは、来週の川神戦役に備えよ!!」

S組は天下無敵のエリート集団。

F組はろくでなしと言われた人間たち。

2・F対2・Sの全面戦争が幕を開ける。

そして、今日は体育祭。天気は憎たらしいほど快晴だった。

プログラムが次々に消化されていく。

――1年借り物競争

「さあ、なんて書いてあるんでしょうか？」

由紀江がお題が書かれた紙を開けてみるとそこには
友達
と
書かれていた。

「あうあうあう、これを設定された方は鬼です。」

キャップさんたちのところに行かないと。

でもここから遠いな」

「まゆっちまゆっち、オラがいるじゃないか」

「あつ、そうかそうですよね!」

「人間の友達と書いてないところがミソなんだぜ」

「じゃあいけますね!よし!」

「マロが審査するである、見せてみい」

「はい、どうぞ!」

「友達?おらんではないか・・・」

「いえーい。オラのことだぜ」

「なめているでおじやるかあー!!--!!--!」

「なぜお怒りに!!--!!--!」

こんなやり取りを由紀江がしてることを帆kのファミリーのメンバーは知る由もなかった。

プログラムが次々と消化されていく。

教師徒競走――小島梅子1位

「見たか、お前たち」

「すごいですね、小島先生。ルーが出ていないとはいえ」

ルーは教師であるが、それよりも前に師範代なのである。

なので、平等性を守るために徒競走は出ていなかった。

そして、

『さあ、川神大戦の前哨戦、川神戦役の始まりだああああ！！！！！』

川神学園にモモ先輩の声が響いた。

『アナウンスはお昼の放送でおなじみ、川神百代と』

『解説は私、ルーでお送りするネ』

お昼の放送の相棒である、井上準は川神戦役に出場するため、代役としてルーが選ばれたのである。

「うおー、ついに因縁の対決だぜ！！」

「2-Fろくでなし軍団VS2-Sエリート軍団」

「半端なく楽しみだぜ、サイコーだぜ！！！！」

会場の生徒のテンションはものすごいことになっていた。

「それでは、この川神戦役の説明に入る。

勝負は前に伝えたとおり5回勝負じゃ。

くじで引いた種目で戦ってもらうぞい。

1回戦のテーマは運動神経。参加人数は4人。

箱の中に運動神経に関する様々な種目が書かれた紙が入っておる。

なお、一度闘うともう出られぬ。

メンバーは慎重に選ぶがよいぞ」

つまり、強いメンバーだけを出させないための処置ということだ。

「ちなみに2回戦のテーマは可憐。参加人数1名。

3回戦のテーマは美。参加人数1名。

4 回戦のテーマは知力&武力。参加人数は5名。

5 回戦のテーマは運&知力&遊び心じゃ。参加人数1名。

1 勝負終わるごとに指名タイムがあるからのう。

指名された選手は川神大戦だけにとどまらず、その瞬間から川神戦役が終わるまでも、相手チームにいてもらうぞい」

ものすごいシビアな戦いになりそうだな。

「では、1 回戦のくじを引くぞい。

・・・ムッ!!!

出あった、超騎馬戦じゃあ!!!!さあ4 人選べ」

「超ってなんだよ・・・。いやな予感しかないぜ。

大和、メンバーはどうするつもりなんだ?」

俺は軍師である大和に話を振ってみた。

結局、大和は源忠勝、川神一子、他運動部員2名を選んだ。

「おー、なんだか面白そう!」

僕、上になりたいな」

「うむ、思う存分暴れてくるがよい。

あとはS組選りすぐりのスポーツ選手でいいであろう」

「お姉さまー、あたし頑張るわー!!」

『おお頑張れよー、愛しき妹よー』

モモ先輩の声はマイクによってまたもや川神学園中に響き渡った。

「ちゃんと実況の仕事をしなさい百代」

「先にゴールしたほうが勝ちの騎馬戦レースじゃ。

ちなみに相手騎馬への攻撃もありじゃ。ただし、全員素手で出発し、基本素手で戦うこと」

基本？ということは例外があるのか？

「騎馬が崩れても一回まではセーフじゃ。ただし、5秒以内に組みなおすこと。

2回解体したらその時点で負けじゃ」

『レースせずにその場での戦いになる可能性が大』

「そこでレースの中間地点にボーナスを用意している。

鎖鎌を麻呂が持っているでござる。

鎌は切れぬが分銅にあたると痛いぞ」

『さあ、両チーム騎馬を組んだ！！』

「見ろよ、あいつら反転してきたぜ。」

「どうやら、ゴールするより俺たちをつぶしたいみてえだな」

『S組、反転してF組に突進していく』

「ユキも遊ぶな、不通に走れば勝てるのによ」

「ぶつかりあい？望むところよ」

「落ち着け一子。このままぶつかれば勢いで負ける」

「じゃあどつするの？もう来るよ？」

「俺の合図に合わせろ……いいか」

『さあ、二つの騎馬がぶつか……』

「分散しろ！！」

その源さんの声で、F組の騎馬がぶつかる前に自動的に解体された。

そして、S組の騎馬は突撃の対象がなくなってしまった。

そして、F組の騎馬メンバーは個人で走った。

そして、5秒ギリギリのところで騎馬を組みなおした。

『自主的に分離して個々に走る・・・なかなかの作戦』

「なるほど・・・しかし、もう解体できないわけですね」

「どうせすぐに追いついちゃうよー」

「ああ、あっという間に追いつかれるだろうが・・・」

「鎖鎌ゲート！早速装備していくわ」

「武器さえ取得できればそれでいい」

『これで圧倒的優位はF組だ！！』

一子の分銅がものすごい勢いで回転する。

「僕も中間地点にあるボーナスを使う」

「は？」

声を上げたのは麻呂だった。

「川神一子 オリジナル奥義 石飛礫！」

「ええーい（持ち上げ）」

「ななな、なにをするでおじゃ……」

「ちょ……教師を盾にして分銅を防いだ！？」

『なるほど、確かに中間地点に置いてあったネ』

ルー先生……あんだ、鬼か？

「その柔軟な発想が重要だぞ」

学院長までもが鬼か・・・。

『どうやら、人間の盾は有効と認められた模様!!』

「分銅握っちゃった」

「離しなさいよー!!」

「僕のー僕のー!」

「ぬぬぬぬぬ・・・なんて力なのよ」

『大将同市の鎖の引っ張り合いだ!!』

「思いつきり引っ張ってやるわ。せーの」

「やっぱり離そうっと」

「どうわ!! 急に離さないでよ・・・」

「・・・っ馬鹿!!!!」

あつ、ツンデレの源さんがワン子を罵ってる・・・っじやなかった。

この状況はもう決着ついたな・・・ワン子が単細胞だったのが敗因か・・・。

『ワン子転落!!!!!! 騎馬崩壊で試合終了!!!!!!』

「まずは軽く一勝ですね」

「ユキも楽しく遊べたし、よかったよかった」

「おいおいおい、源とワン子があしらわれたぜ」

「倒し甲斐があるってもんだぜ!!!!」

「気楽なこと言ってる場合かよ、キャップ。

負けたから1人S組に取られるんだぞ？」

「そついやあつたな・・・そんなの・・・」

忘れてたんかいっ！！

「さあ、S組。誰を指名するか選べ！！！」

「100%私だわ・・・じゃあねマヨ」

「はい、私が指名されてしまつんですね」

「ううん、あたしが指名されてしまつのは」

「いえいえ、私が指名・・・」

「なんだろう・・・この100%な安心感」

「ね。僕もあり得ないから、こういつとき気楽だよ」

「それではみなさん・・・打ち合わせ通りでいいですね」

「まあ、よからう。わが友に任せる」

『さあ、S組は誰を選ぶか決めたようだ。』

定石通りだとF組の軍師、直江大和か、武道四天王の本郷直孝か、
クラスのマードメイカーの風間翔一あたりか？』

「私たちが欲しいのは・・・」

「ゴクリ・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「直江大和君です」

『おおーっと。S組はF組の軍師、大和を指名』

「貴方はS組に来られる頭脳があるはず。闘争心といい、私たちの仲間にふさわしいです」

「しゃーないか・・・ルールだし。」

お前ら、絶対に俺を取り戻してくれよ!!!

ナオ、俺がいない間の軍師の役目はお前に任せた」

こうして2回戦へと突入していくのであった。

「おはよー」

私が教室に入ると一人の女生徒が元気にあいさつしてきた。

彼女は水無月翠。私とナオ君の親友だ。

「珍しいね、ナオっちと一緒にじゃないなんて」

先の聖ちゃんの発言と言い、私とナオ君は周りから見たら1セットなのだろう。

なんか、うれしいな。

「ナオ君、また修行に出かけちゃったんだよ」

「あつ、そうなんだ。まあ、3か月後にまた大会があるし、そのためなんだろうね」

「ホント、修行に熱心なんだから・・・」

私はナオ君が武道に熱心なのをうれしく思う反面、不安にも思っていた。

このままじゃ、ナオ君がつぶれそうな気がして・・・。

「おい、授業を始めるぞ!!!」

教師が入ってきて、私は自分の席へと戻った。

そして、その後もナオ君のことばかりを考えていて、授業の内容は全く頭に入ってこなかった。

大和「まさか本当に俺を選ぶとは思わなかったな。

でも、絶対あいつらは俺を取り戻してくれるはず。

頼んだぜ・・・ナオ!!!

次回 14話 激闘!!!川神戦役!!!」

次のページはアンケートの中間結果です。

1

D・C? 5票

SAO 4票

茜色 1票

相変わらずD・C?とSAOが接戦。

でも、SAOに決まって3でもSAOになったらどう作品で違う小説を書くのか……。

無理な気がしてきた……。

2

| | |
|------|----|
| 百代 | 4票 |
| 心 | 1票 |
| 小雪 | 2票 |
| 一子 | 1票 |
| まゆっち | 1票 |
| クリス | 1票 |

さて、百代がついに独走状態に入っただけですね。

他のキャラは、あと1日で百代を抜くことができるか？

あと、一子は主の趣味で確実に攻略します。

3

SAO 新作

5 票

shuffle

5 票

まさかのアンケート締め切り29時間前に同点に!!

どうなってしまうのか・・・。

ついでに言っとくと、一応、同数だった場合の処置は考えてあるの
でご安心ください

4

頑張ってくださいとのコメントを多数いただきました。みなさん
ありがとうございます。

さて、アンケート締め切りは明日、12月5日の23時59分まで
！！

まだ、投票していない方はぜひ投票してください。

たくさんの方の投票をお待ちしております。

13話 前哨戦、川神戦役開幕！！！（後書き）

れおぼんさん、ハラOUNさん、ヤカサさん、紅蓮さん、九字架さん、takagさん

アンケートのご回答ありがとうございました。

さてさて本編は次回で川神戦役を終えて、一子ルートへと突入する予定です。

これからも応援よろしくお願いします。

それでは

see you again.

アンケート結果 &新連載予告!!!! (前書き)

私は知らなかった。有効票とみなした締め切り時間後に頂いた票が、
こんな悲劇を生むことになるなんて.....

アンケート結果

&新連載予告!!!!!!

1

D・C? 7票

S A O 6票

茜色 1票

2

百代 6票

心 1票

小雪 2票

一子 2票

まゆっち 1票

クリス 1票

菜月 1票

3

SAO新作 7票

shuffle 7票

結果的に

1 D・C?

2 百代

3 shuffle & SAO

という結果になりました

・総評

さてさて、計14名様にご回答いただいたアンケートの結果が無事に出ました。

締め切り後にご回答いただいた票も今回は入れてあります。

1については最初からD・C?とSAOの争いでしたね。

実をいうのほかの作品の名前が上がるかと思っていたのですが、実際には2作品だけの争いでした。

そして、2作品は1票差。まさに熱い戦いでした。

よって「原作？何それおいしいの？」の第2章はD・C?の世界に決定です。

そして、ここで宣言しちゃいます!!

D・C?の世界でのメインヒロインはアイシアとさくらです!!!!

理由は私の好みです。

他の攻略キャラに関してはいずれアンケートをとるのでその時によろしく願います。

2については特にいうことはありません。

ただ1つ言うなら、「百代強すぎ!!」

そして、1番の問題点がこの3です。

締め切り受付後に来た2票を有効票とした結果、どちらも「SAO」であったため、まさかの2作品とも7票ということになりました。

正直驚いています。

では、どうするのか？と気になっている方もいらっしゃるかもしれませんが、心配には及びません。

ちゃんと考えてあります。

それは

両方とも連載するしかない！！！！

です。

ここまで皆さんに期待されてて書かないなんていまさら言い出しませんよ。

ですが更新周期は作品によって変えさせていただきます。

この作品 1週間に1度

SAO 2週間に1度

shuffle 2週間に1度

という周期にさせていただきます。

まああくまで、予定ですので、実際にはSAOを1週間で更新したりするかもしれませんが。

それでは、次のページは、新連載予告です

・1作品目 Sword Art Online\Change
the fate\

これはゲームであっても遊びではない

俺は忘れない、2年前、すべてが終わりすべてが始まったあの瞬間を……。

【Sword Art Online}Change the fate】

クリアするまで脱出不可能、ゲームオーバーは本当の死を意味する

2年前、突然過酷なデスゲームは始まった。

約1万人によるデスゲーム、これは新たなる地獄の始まりだった。

大切な恋人、友人、戦友、その全てが1回のミスで命を落とし、決して生き返ることはない。

この物語はそんな過酷なデスゲームの中で、ソロプレイヤーとして活躍する2人の少年とその仲間たちを描いたものである。

新米二次小説家、八重桜が描く、「このライトノベルがすごい2011」で4位を獲得したソードアートオンラインの二次小説。

12月23日午前0時00分連載開始!!!

「俺の命は君のものだ、アスナ。だから君のために使う。最後の瞬間まで一緒にいる」

「シャル、俺は君を守る剣にも楯にもなるう。君は絶対を絶対に現実世界に帰して見せる」

・2作品目 S H U F F L E ! ~ I F S T O R Y リメイク版

これは、あの忌まわしい事故が起こっていなかった、そして、八重桜が自分の夢よりも稟を優先し、バーベナ学園に進学した、IFの物語。

このIFの物語は計4人の転校生の登場から幕を開ける。

神王の娘リシアンサス、魔王の娘ネリネ、そして人間界の世界的に有名な財閥の次期当主 長嶋蓮。

この3人に好意を持たれている稟は「神王にも魔王にも人間界の権力者にもなれる男」である。

稟がたどりつく結末はハーレムか、それとも・・・？

新米二次小説作家、八重桜が描く、処女作のリメイク版。

12月24日午前0時00分連載開始！！！！

14話 激闘!!川神戦役!!(前書き)

ついに200000PV突破!!!!

この作品を読んでくださってる皆さん、ありがとうございます。

さて、今回は川神戦役4戦目までを書いたんですが、正直godgod
というか同じ動作の繰り返しです。

まあ、しょうがないといえましょうがないんですが。

とにかく、皆さんに楽しんでいただければ光栄です。

14話 激闘！！川神戦役！！

あらすじ

ガクト「川神戦役第1回戦はワン子とゲンが頑張ったもののS組に敗れちゃった。

こうなったら、俺様の出番だな！！！！」

「さあ、2回戦に突入するぞい。

テーマは可憐、いったい何が出るかな？」

S組に軍師である大和を取られたことによつて、F組の士気は下がっていたが（ファミリメンバー、特に京は妙に張り切っていたが）、鉄心が引いた種目はF組の士気を回復させるものだった。

「これじゃああああ。ずばり女装化対決！！！！」

男の娘ですね、分かります。

っていうか、だれがこんな種目考えたんだ？

「これは葵君が似合いそうですね」

「私も女性も男性もいけますが、それは男とします」

あずみと葵冬馬なにやらカオスな会話をしていた。

「これは誰が行くんだろうね？」

「おいおい、愚問だろうが、モロよう」

「え？」

「こついつ時にお前がいるんだろう？」

「いや、俺様が言うのもなんだがいける」

「なんで？」

「俺様、中学の時とかたまにモロの肌とか見ると女っぽくてムラムラしてたからな」

聞きたくもないカミングアウトだった。

モロ・・・かわいそうに・・・。

「教師が口を出すことではないがな、私も師岡は行けると思うぞ」

ついに教師公認!?

「うんうん、モロならいけるよ」

「ククク、かわいく仕上げてあげ・る」

「任せろ」

ファミリーの女子陣（まゆっち以外）もなぜか乗り気だった。

「分かった、行ってくる。僕が大和を取り戻す」

「いいぞ！！！男らしく女になれ」

「……なんか数人がBLに目覚めてしまったり、男の大半が自身に対する自信を失ったりしたが、語ると長いので、4回戦までショートカット……」

今現在は、3回戦が終わったところだ。

結果としては2回戦はモロが女装化対決にて圧勝。その後数人の男子から告白されていたのはきつと気のせいだろう。

3回戦は「美」がテーマで種目は1VS1の水着対決（男限定）だった。

ガクトと九鬼がいい勝負をしていたのだが、九鬼の股間の大きさを見て、降参してしまった。そして、この時ほとんどの男子が絶望したという。

まあ、通常時25cmってありえないよな……。

でも一番驚いたのが、源さんは通常時25cmの九鬼に惜敗らしい。

源さん……あんたも普通にすげえよ。

そして、

「それでは第4回戦じゃ。おそらく5戦の中で一番ハードな戦いになるから覚悟しといたほうがいいぞい。」

さて、種目は……これはすさまじい。

リアルPK戦じゃ!!!!!!

さあ選べ、知力があるもの、武力のあるものを。

ルール説明はメンバーを決めたら説明するぞい。

だが、この競技は怪我をする可能性がとても高いということだけは言うておこう」

「こんな時に大和がF組にいないのはつらいな」

「まあ、俺が行かなきゃ話にならないだろう」

「か、風間あああああ！！！！」

「当然私も行く」

「く、クリスうううううう！！！！」

「私も直江ちゃんの代わりの頭脳派としてお手伝いします」

「委員長うううううう！！！！！！」

「まあ、俺も行くしかないな」

「ナオおおおおおおおお！！！！！！」

「よし、あと一人は誰だ？」

「大和は私が助け出す!!」

「し、椎名ああああああ!!」

京が燃えている!?

『さあ、両軍、選手の選出が終わったようだ。

両軍選手紹介!!!

S組 マルギツテ、不死川心、忍足あずみ、中村透、靖国晴之!!
』

「葵冬馬がいないだ!!?」

「私は大和君と戦えないなら出る気はありませんから」

つまり、俺たち相手じゃ勝負にならないって言いたいのか…あいつは。

『F組、クリス、風間翔一、椎名京、甘粕真与、本郷直孝！……！』

「攻撃側がキーパー、キックを受けるほうがキーパー。」

キッカーはキーパーを一回直接蹴れる。

倒れたり、地面に膝をついたらゴール。

耐えて立っていたらノーゴール。

これをそれぞれ交互に行って1ターン。

そして、5ターンが終わった時点でゴール数が多いほうが勝ちじゃ」

こりゃ、確かにケガ人続出だろうな。

「要するに蹴りの我慢比べではないか」

「こ、これのどこに頭脳がかかわってくるんですか？」

「まだ説明の途中じゃ。」

次に掲示板を見よ。あそこに攻撃側だと「交渉者」と「キッカー」とあり、守備側だと「交渉者」とキーパーとあるじゃろっ。

この交渉者が知力勝負のカギとなる。

お前たち両軍にそれぞれ100ポイント授けよう。

まず、蹴る前に交渉者にポイントを提示してもらおう。

攻撃側のポイントが守備側のポイントを上回っていたら攻撃可能じゃ。

そして、その逆なら攻撃不可能じゃ。

じゃが、ポイントは使った分減るから100ポイントの中でうまくやりくりすることが大切じゃ。

また、提示ポイントが同じだったら、その場にいる4人で1分間のフリーバトルタイムがあたえられる。

そして、一番のポイントが交渉者とキーパー、またはキッカーは毎回ランダムに選出されるんじゃ。

もしかしたら、甘粕がキーパーになるかもしれん」

「え？」

「もしそうなった場合、大量のポイントを使って彼女を守らないといけないのう。」

なぜなら、次に彼女が選ばれたときに出られる状態じゃない場合は

攻撃側なら強制ゴール失敗、守備側なら強制ゴールになるからじゃ。
選手交代は一切認めん。

これでルール説明は終わりじゃ。ああ、あとみんな素手でな」

なんか、交渉者のシステムってライオンゲームにあった密輸ゲームに似ている気がする。

ま、どうでもいいけどな。

「それではさっそくやってみようかのう。

第1ターン！！先攻はS組からじゃ。

では、ランダム選手選択！」

『さあ、スロットで選手名が回転！！

おっ、出たぞ！！

攻撃側S組 交渉者不死川心・キッカー忍足あずみ！！

守備側F組 交渉者本郷直孝・キーパー甘粕真与!」

「これはいきなりやばい展開なんじゃないか？」

「甘いな、クリス。見てろ。俺が交渉でうまくやってきてやる」

『さあ、交渉者が前に出てきたぞ』

「いきなり先制点のチャンスじゃな。此方達は」

「まさにその通りだね」

「まあ、そこで愚民にハンデをやるう。

此方は5ポイントと提示するつもりじゃ」

はい、明らかな罠ですね、分かります。

「それ本当？」

「もちろん。最初だけハンデで教えてやってるのじゃ」

普段人を見下してるやつがわざわざハンデなんてくれるはずがない。
これが九鬼とかだったら話は別だけどな。

俺と不死川はお互いのノートに提示ポイントを書き込む。

「さあ、まずは不死川のポイント提示じゃ」

そして、不死川のノートに書いてあった数字は……6だった。

不死川のほうに目をやると、勝利を確信したかのように笑っていた。

『次に守備側本郷直孝のポイントを提示』

「7!! 攻撃はできずPK失敗じゃ」

はい、実に楽な頭脳戦でした。

というか、もし6を提示しても、委員長はを倒す前に俺にやられる
っ手ことに気づいてないのか？

「なんじゃと！……6ではないと！？」

当の本人は負けたことに驚いてるし。

案外、キッカーより交渉者のほうが大事だな。

「よしよし、よく防いだぞ」

キャップは満足そうに笑っている。

『さあ、次はF組が攻撃側！！ルーレットスタート！！』

攻撃側F組 交渉者甘粕真与・キッカー椎名京！

守備側S組 交渉者マルギッテ・キーパー中村透！』

「そ、それでは頑張ってくださいす！」

さて、マルギッテはどう動くかな？

軍人だしおそらく序盤はバランスを重視してくるはずだが・・・。

『さあ、両者がポイントを書き込んでいるぞ』

『では、同時公開！！S組15！F組16！』

F組に攻撃権！PKが行われます！』

「それではPK開始！！」

「痛いかもしれないけどごめんね」

京はそういうと相手クラスの男子の太ももに、渾身の力を込めた回し蹴りを叩き込んだ。

相手は京の渾身の一撃を耐え切ることができず、地面にへたりこんでしまった。

「ゴ~~~~~~~~ル！」

こちらが先に点数を取ったのは点数以上に意味がある。

この1点を守り抜けば勝なのだ。

もう、バランス理論なんて気にする必要はない。

『S組逆襲なるか？ルーレットスタート!!』

攻撃側S組 交渉者忍足あずみ・キッカー靖国晴之！

守備側F組 交渉者椎名京・キーパークリス！』

「今度はこっちが優位だな。

京、靖国は頭はいいが運動は苦手だと聞いた。だから、できる限りポイントを節約しろ」

「わかった」

『両者、ポイント打ち込み、提示!!』

『F組0のS組1！PK権獲得!!』

「それではPK開始!!」

「さあ、どこからでも攻撃するがいい」

「無理だよ、俺には」

靖国はそういつとクリスの足を軽く蹴った。

「PK失敗。得点なし!」

これでこちらがさっきよりももっと優位になった。

次の攻撃で点を取れば勝ちに近いんだが・・。

『F組優位のまま攻撃!ルーレットスタート!!』

攻撃側F組 交渉者甘粕真与・キッカー風間翔一!

守備側S組 交渉者靖国晴之・キッカー不死川心!』

さっきから、委員長当たりすぎじゃね?4回中3回だぜ?

「俺は勝負なら女の子でも攻撃するぜ。承知の上で出てきてるんだからな」

キャップ、女から見たら最低なことを言ってるかもしれないが、かつこいいぞ。

『さあ、両者がポイントを書き込み、開示!!』

F組0のS組1・PK失敗!』

さすがにこちらが節約しようとしていることに気づいて手を打ってきたか。

こちらはまだ優位だが、この2ターン目で相手も結構ポイントを節約してしまってる。

この1点を守り抜けるか？

『3ターン目!!』

攻撃側S組 交渉者靖国晴之・キッカーマルギッテ!

守備F組 交渉者風間翔一・キーパー本郷直孝!」

これはまたこつちに有利な組み合わせだな。

「キャップ、ポイントは0でいいぞ」

「よし、お前を信じるぜ!」

『さあ、両者がポイントを書き込んでいく』

「相手は0にしたいはずだが、そうするとフリーバトルになってしまい、痛手になる。つまり、相手は1を提示してくるだろうな」

『F組0のS組1。PK権獲得!』

「それでは、PK開始!」

「本郷直孝、齒を食いしばりなさい!」

マルギツテは眼帯を外すと、俺の足を全力で薙ぎ払った。

が、俺は立ったままだった。

まあ、正直結構痛いけど。

「PK失敗。得点はなしじゃ」

「うわゝ、足と足が当たる音がここまで聞こえてきたゝ。痛そゝ」

『これでもっとF組が優位に！！』

攻撃側F組 交渉者風間翔一・キッカークリス！

守備側S組 交渉者靖国晴之・キーパー不死川心！』

「キャップ、次も0だ」

「そんな守ってばかりでいいのか？」

「それが一番味方が傷つかないで勝てる方法だからな」

『両者、ポイント開示!!』

F組0のS組11!PK失敗!!』

『F組は1点を確実に守る戦法に出たネ』

『勝負の行方はどうなるのか?残りポイントはF組77のS組65
!!』

F組が相当有利な状況で4ターン目。

ルーレットスタート!!

攻撃側S組 交渉者中村透・キッカー靖国晴之!

守備側F組 交渉者甘粕真与・キーパー本郷直孝』

勝ったな。これで終わりだ!!

「委員長、ここも0ポイントで」

「わ、わかりました」

『両者ポイント開示!!』

F組0のS組1・PK権獲得!』

靖国は俺の前まで来ると先ほどのように軽く蹴るだけだった。

『PK失敗!!これでF組の勝利確定か?』

「ルーレットスタートじゃ!」

攻撃側F組 交渉者椎名京・キッカークリス!

守備側S組 交渉者靖国晴之・キッカー忍足あずみ!」

靖国……何回連続だよwww。

「京、こゝも……」

「わかつてる。これで確実に大和を取り戻す」

『ポイント開示!!』

F組0のS組1・PK失敗!!』

「次がラストじゃの。と言ってもほとんど試合の結果は決まってるが・・・」

『ルーレットスタート!!』

攻撃側S組 交渉者中村透・キッカーマルギッテ!

守備側 交渉者甘粕真与・キーパー椎名京』

『提示したポイントはF組77のS組63。PK失敗!!』

ということはこの勝負F組の勝ち!!!!』

「やったー」

「よっしゃ」

「K t k r」

「よくやったぞ」

クラス中から喜びの声が聞こえてくる。

でも、まだ総合的にみると2勝2敗なんだよな。

「さて、F組は誰を選ぶのじゃ？」

「私の運命の人を選びます」

「ものすごく帰りにくいからその言い方やめてくれない？」

『これにより、両チーム入れ替えなしの状態で5戦目突入だ！！！！！』

そして、5戦目の種目は、

「出たぞ、遊戯王での1勝先取の勝負じゃ！！！」

え？

次回予告

ナオ「まさか、最終戦がカードゲームとは思わなかったぜ。

だが、そのカードゲームの結果のせいで波乱の展開に・・・。

そして、ついに川神戦役決着！！

勝者は果たしてどちらなのか？

次回、第15話 決着！！川神戦役！！」

百代「今回は私のセリフものすごく多かったな」

14話 激闘！！川神戦役！！（後書き）

次回で川神戦役終了で一子ルートに入ります。

まあ、正直ルートという表現が正しいのかわかりませんが・・・。

後、明日23日0時00分よりSAOの新作、明後日24日の0時00分からshuffleの新作が連載開始されます。

SHUFFLEのほうはまだ書きあがってませんがwww。

SAOのほうは最初の2話は00話??とする予定で、SAOの開始した時のことを書いてます。新キャラもちろん登場します。まあ、量的には1700文字なので少ないですが、忙しい中書いたので、お察しください。

又、感想は新連載のほうもこちらも受け付け中です。

なので、感想を下されると嬉しいです。

それでは

see you again.

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2990o/>

原作？なにそれ、おいしいの？

2010年12月22日07時25分発行